
世界で一番

LIVED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番

【Nコード】

N7461S

【作者名】

LIVED

【あらすじ】

黒の組織と決着を付けようという時、江戸川コナンこと工藤新一の心情に変化が訪れる。灰原哀こと宮野志保は、組織を倒した後、どうするのだろうか。志保は元の体に戻るつもりがなくても、自分は毛利蘭の元へ戻るべきなのだろうか——組織と決着を付け、その決断を迫られる。

72巻まで。ただし、新一は蘭に告白していない設定。

ブログ（前書き）

初投稿です。理系なので文章が硬かったり、短気なので展開が急だったりするかもしれませんが、お付き合いいただけると幸いです。

プロローグ

江戸川コナンこと工藤新一にとって、毛利蘭とはどのような存在か？

少年が物心付いた時、いつも隣にいた1人の少女。少女は、少年といるのが当たり前だった。学校でクラスが別々になっても、行き帰りはいつも一緒。だから、少女がそばからいなくなるなんて、考えたことがなかった。

やがて、それが特別な存在であると少年は気付く。はつきりと意識したのは、中学に進んで、部活の先輩より告白された時か。好きだと言われて嬉しかった反面、その時頭に浮かんだのは、いつも隣にいた少女のことだった。自分を好きだと言ってくれる先輩よりも一緒に過ごしてきた少女の方が気になるし、大事にしたい——だから付き合えない、と断った。そして、いつか少女に想いを告げると心に決めた。高校生探偵として名を馳せ、ラブレターを多数貰うようになって、一番には少女のことが頭にあった。

だが、少女に想いを告げぬまま、ある日突然、少年の体は高校2年生から小学1年生相当にまで縮んでしまった。正体を隠し、江戸川コナンとして少女のそばにいることはできたが、少女を危険に巻き込まないためにも、事件が全て決着するまで、そのことを打ち明けるわけにはいかない。電話で元の高校生の時の声を聞かせることはできても、少女は新一が姿を消したことで寂しさを募らせ、時折涙を流すなど、無理をしている。少年の体が、縮んでしまったばかりに。だから、一刻も早く元の体に戻り、少女をこれ以上苦しめないようにしたい。コナンの正体を知らなかったとはいえ、新一を好きだと教えてくれた少女に、自分もそうだと早く伝えたい——そう思った。

新一にとって、灰原哀こと宮野志保とはどのような存在か？

元組織の一員で、少年を小さくした毒薬の開発者。それでいて、「あなたなら私を理解してくれると思った」と――最初にそこまで聞いた時は、恐れより先に、怒りが込み上げてきた。人を殺す毒を作っていた冷酷な人間のことなど、誰が理解するものか、と。だから、少女のことは決して認めないつもりだった。

だが、そう思っていた矢先、少女の素顔を見た。どうして姉を助けてくれなかったのか、と。感情を剥き出しにして泣き崩れる少女の姿で、少女が姉を慕っていたと知った。組織に命じられて薬を作っていたと言ったが、悪い人間じゃないのかもしれない――少年の心境に、変化が訪れた。

いつしか少年は、少女を守らなければならないと思うようになる。きっかけは、少女が「早くここから消えてしまいたい」と言ったことか。それとも、バスジャックに遭遇した際、爆弾と共に死のうとしていたからか。組織の影におびえ、周囲の人を危険に巻き込まないようにしている少女の姿に、見かけよりタフじゃないと感じた。だから、少女をこれ以上心配させないためにも、一刻も早く組織を潰す必要があると思った。少女がいないと、少年が元の体に戻れないかもしれないとか、そういった打算抜きで。

毛利蘭にとって、工藤新一とはどのような存在か？

少女にとってもまた、少年は一番近くにおり、少年がいなくなるなんて考えなかった。だが、当初は異性としての意識はほとんどなかったように思う。もちろん、嫌いだったらそばにいないから、好き嫌いと言えば好き、になったのだろうが。周囲に少年との関係からかわれても、仲の良い幼馴染、以上の感情は抱いていないつもりだった。彼氏彼女なんて照れ臭い、というのもあったかもしれない。

少女が少年を、はつきり異性として好きになったのは、高校生になり、ニューヨークへ行った時だった。ある劇場で鎧が上から落ちてきて、逃げ遅れた女優がいたから、思わず助けた。なのに、その

女性は後に、ある舞台俳優を殺してしまった。自分が女性を助けたから、男性は殺されてしまったのではないか——責任を感じていた時、少年は「人が人を助ける理由に、論理的な思考は存在しない」と言った。そう、少女が女性を助けたのは、特別な理由があったからじゃない。単純な話、助けないといけないと思ったから助けただけ。それで、後悔していた少女の心は救われた。同時に、そのことを気付かせてくれた少年に、心惹かれるようになっていった。人が人を好きになるのにも、理由なんてないのかもしれない——そんなことを思いつつ。

そんな少年が、ある日突然、少女の前から姿を消した。それまでは当たり前のようにいたのに、急に連絡も付かなくなってしまった。そのことが気にかかり、夜も眠れない日が続いた。その事実で、やはり少年が好きだと改めてわかった。

そんな時、少年から少女に電話があつた。厄介な事件に巻き込まれたから、当分戻ることはできないという。それで少女は、少年の無事を知って安堵した半面、仕方ないかな、とも思った。いつからか少年は、ホームズや事件のことばかり話す推理オタクになっていて、事件があるとすぐに首を突っ込みたがるようになっていたから、遅かれ早かれ危険に巻き込まれる予感がしていたのだ。それでも——いや、それだからこそ、少女は少年を好きになった。だったら、そんな危なっかしい少年が帰ってくるのを、待っていてあげないと心配ばかりかけた少年に、言いたいことはいっぱいあるけれど、事件が終わったら、まずは「お帰り」と言っただけ——そう思うようになっていた。

蘭にとって、江戸川コナンとはどのような存在か？

新一が姿を見せなくなってから、入れ換わるようにして少女の前に現れた小学生。可愛い弟ができたようで、新一の前では素直に言えなかったことでも、コナンには何でも言えてしまう。そのおかげで、新一が姿を見せなくなっても、幾分寂しさを紛らわせてくれて

いた。

コナンと新一は同一人物ではないか——そう疑ったことは、何度かあった。実際、知識や推理力は小学生離れしていて、コナンの発言がきっかけて事件が解決に向かうことが何度となくあり、容姿や性格も含め、新一と共通する部分が多に多い。だが、学園祭の時にコナンと新一が同時に存在していたため、やはり2人は別人ということで一応納得していた。そのことで、少女は新一がほとんど姿を見せなくなった寂しさを募らせた一方、逆に安心した部分もあった。もし、コナンが新一だったとしたら、本当はずっと少女のそばにいたのに、騙し続けていたことになる。新一がそんなひどいことをする筈がない。少女は新一が好きだし、信じてもいる。たとえ新一が厄介な事件に巻き込まれたのだとしても、嘘を吐き続ける筈がない。だから、やはりコナンと新一は別人——少女自身の願望も含め、それが事実と思うようにしていた。

蘭にとって、灰原哀とはどのような存在か？

コナン達のクラスに転校してきた少女で、阿笠博士の家に住んでおり、少年探偵団員。それでいて、コナンは蘭にそのことをあまり語ろうとしなかった。哀と直接話をしようとしても、パソコンに集中していたり、目が合うと逸らされてしまったりで、なかなかその機会が訪れない。嫌われているのではないか——それまで、周囲の人に分け隔てなく明るく接してきた蘭にとって、好かれることはあっても避けられた経験はなかったため、哀は気になる存在になっていた。

結局、哀と話をしたことはそう多くない。ただ、コナンと同じく大人びていて、どこかミステリアスで、交わした言葉は少ないにもかかわらず、蘭に強い印象を残していた。一番驚いたのは、「作ったゲームを紹介する」と阿笠博士の家に招かれた時か。蘭がコナンを心配し、事務所に帰ろうと言ったら「江戸川君なら大丈夫だから、もう行かないで」と止められた。とても小学1年生のものとは思え

ない、必死の形相であつた。この子には、何か重い過去があるので——それが何であるか気になったが、軽々しく聞けるものでもなく、しばらくはそつと見守ることにしようと思つた。

灰原哀こと宮野志保にとって、江戸川コナンこと工藤新一とはどのような存在か？

少女がまだ組織に属しシエリーと呼ばれていた頃から、少年——工藤新一の名は耳に届いていた。聞けば、その少年は少女より1つ年少でありながら、日本警察の救世主と呼ばれるほどの高校生探偵であるという。もっとも、それがどれほどのことが、少女には今一つピンとこなかったが。

その日、試作段階だつた薬——アポトキシン4869の被験者名の中に少年の名を見付けた時、少女は特段の感情を抱かなかつた。否、抱かないようにしたつもりだつた。最初、少女の許可なく組織が薬を人間に投与したと聞いた時は、たまらなく嫌な気持ちかしていた。マウスを何十匹も死なせてしまつた失敗作を、人間に使えば死ぬに決まつている。マウスを死なせたのも嫌だつたのに、人を殺す犯罪行為の片棒まで担がされたのか——だが、組織にそう言つたところで、聞き入れられる筈もなく。次第に、考えても無駄だと思ふようになつた。だから、少年に薬が使われたと知つても、そのことを深く考えないようにしていた。

組織が少年の家を調べると聞いた時は、正直言つて驚いた。少年の死亡が、まだ確認されていないという。なら、もしかして——あのマウスと同じように？ その予感、二度目の搜索で確信に変わった。子供時代の服だけがなくなる理由など、他にある筈がない。少年は、幼児化して生き延びている。少女は何故か心躍つた。その時から、少女は少年に興味を持ち、調べ始めた。それは、科学者として育てられた少女の、知的欲求だつたのだろうか。いつか、幼児化した少年に会うことができれば——心のどこかで、それを期待して。

少女の体が小さくなり、小学校で初めて幼児化した少年を自身の目で見た時、言いようのない不思議な感覚がした。この人は信じられる——気が付いたら、少年の隣に座っていた。それまで、少年とは一度も会話したことがなかったというのに。そんな経験は初めてだった。

彼女が、実年齢で11歳も年下の少女に、少年が好きなのかと聞かれた時、驚いて咄嗟に答えられなかった。その問いかけが、まったく予想していないものであったから。だが、嫌いなのかと聞かれたら、それは違々と答えただろう。この時、彼女は少年を異性として意識し始めたのかもしれない。

少女が少年への意識を強めたのは、少年の体を一時的に元の高校生に戻し、何でそこまでしてくれるのかと問われた時だった。少女は、少年の居候先に変装して出入りすることを当然のように口にしたが、確かに少年の言った通り、そこまでする必要はなかった。なのに、少年のために尽くそうとしていた。その理由を考えると、少女は少年へのある感情を認めざるを得なかった。振り返ってみると少女はどうしてか、少年に思わせぶりの言葉を口にすることが多かった。演技とはいえ少年に「愛してしまった」と言った時は、自然と体に熱がこもるのを感じた。サッカーのことになると本物の小学生のように無邪気にはしゃいだり、事件や暗号のことになると後先考えず動き回ったりする少年に、心動かされたのか。最初に会った時の不思議な感覚は、一目惚れだったのかもしれない——そう思い始めた。

あとは、ドミノ倒しが進むかのごとく、少女の心は恋に落ちていった。組織の追跡からは逃れられないと、少女がバスの中で爆弾と共に散る決断をした時は、少年は自らの危険もかえりみず助けに来てくれた。少年が組織を追おうとしていた時は、少女のことを「見かけよりタフじゃない」と言い、心配をかけまいとしていた。少女は組織の元一員であり、少年の体を小さくした薬を作った張本人だというのに、どうしてそんなに優しくするのか——愛おしさと切な

さでいっぱいになっていった。

だが、いつからか少女は、少年への恋心を抑えるようになってしまった。何故なら――。

志保にとつて、毛利蘭とはどのような存在か？

志保が新一を調べ始めると、間もなく1人の少女の存在を知った。少年の近所に住む幼馴染でガールフレンド。年頃の高校生だし、珍しいことでもない。最初は、気にも留めなかった。

少女の体が小さくなった後、外泊を電話で連絡する少年の姿で、蘭のことを思い出した。事情をほとんど知らされず、普段はコナンとして少年に接するが、電話では時々新一として話している。自分の作った薬に翻弄される少年と蘭が、少し滑稽に思えた。

少年が銀行強盗団に撃たれた後、本気で心配して声をかける蘭の姿を見て、志保の心は二重の意味でざわついた。1つは、蘭の心配する態度が、とても居候の小学生に対するものではなく、本気で愛する人に対してのものだったから。もう1つは、蘭の持つ雰囲気、あまりにも姉に似ていたから。それまでも、蘭のことは何となく敬遠してきたが、ますます接しづらくなってしまった。

少年がまだ蘭に告白していないと知った時、志保は確かに上機嫌になる自身を感じた。自分にもまだチャンスはあるのでないか――そう思つて。

だが、その期待は、次に蘭を間近で見えて以降、徐々に薄れていつてしまう。蘭は器量が良いだけでなく、明るく、優しく、一緒にいるこちらまで嬉しくさせるように屈託なく笑うことができる。対して、自分はどうか。志保は、蘭と自身のことを、ちょうどイルカとサメのようだと思った。女として、到底敵わない。誰だって、サメよりイルカの方が好きだろう。実際、少年が蘭に好意を抱いており、自分を恋愛対象として見ていないことぐらい、志保にもわかった。しかも少年は、蘭を想っている一方で、今の体になったせいで蘭に真実を話してやれないことを、申し訳ないと思つている。少

年の体を小さくした薬を作ったのは誰だったのか。志保の心の中で、少年への罪悪感が強まった。

せめて、少年や蘭のことを、嫌いになれたら少しは気持ちが楽になるのに——そう考えたこともあった。だが、少年はもちろん、蘭のことも嫌いになれそうにない。蘭は、事情を知らないとはいえ、少年と蘭の人生を大きく狂わせる原因を作ってしまった自分に対しても、他の人と同様に優しく接してくれる。しかも、好きだった姉によく似ており、会うたびに姉のことを思い出させる。志保は、胸が締め付けられる心地がした。

だから志保は、少年と蘭について、深く考えないようにした。自分にもチャンスはあるとか、変に期待をするから、辛くなる。自分のやるべきことは、2人が幸せになるよう、外から応援し、協力していくことだけ——そのように、志保自身に言い聞かせるようにして。

工藤新一、毛利蘭、宮野志保。

これは、3人の関係がどう変化していくかを記した物語——。

第1章：前夜

「1つ、聞いておきたいんだけど。あなた、組織を倒すことと、彼女と一緒にすることなら、どっちが大切？」

「……あ？ いきなり何を言い出すんだ？」

時は、3月上旬の午後9時30分。黒の組織との決着を明日に控え、コナンは阿笠博士の家に来ていた。そして、哀と明日の決戦の作戦について最終確認をしていた。

話は、1週間前に遡る。

服部平次やFBI、それにCIAから組織に潜入中の水無怜奈の協力を得て、コナン達はバーボンこと沖矢昴の打倒に成功していた。その際、怜奈は負傷して昏睡状態となり、FBI側でも数名の犠牲者が出たが、来葉峠で死亡したと思われていた赤井秀一の生存が判明し、復帰していた。また、バーボンの周辺から組織のネットワーク構造や世界各地の拠点データが見付かった。それによると、組織の現在のメインシステムは杯戸市内の拠点にあり、それを破壊すれば事実上組織は壊滅することだった。システムの構造は文字化け記号のような暗号で示されていたが、元組織員である哀にはその解読ができ、FBIのジョディ・スターリングに自身とコナンの正体を明かした上で、「私なら破壊できるから、本拠地に行かせて欲しい」と志願していた。

「具体的にいつ乗り込むのか」が問題となったが、それらのデータを得た翌日、どういうわけか阿笠邸に盗聴器が届き、組織の杯戸市内本拠地の音声を聞くことができた。そこから得られた情報で、FBIにバーボンが倒されたことに関連して近日中に会議が開かれるとわかったため、その会議中に本拠地に乗り込んで制圧する作戦と相成った。

再び、話を現在に戻す。阿笠邸にて、コナンと哀の会話が続く。

「あまり、彼らを甘く見ないことね。ここまで来たとはいえ、私達が無傷で勝つ保証なんてどこにもないわ。場合によっては、そのどちらかしか選べないかもしれないのよ。彼らの息の根を止めようとするれば、当然あなたも危険にさらされる。殺される可能性だってあるわ。彼女と一緒にいるだけなら、今彼らを倒さなくても、彼らの目から逃れていけばいい。薬のデータなら、いずれ手に入るかもしれない」

それは、明日コナンが危険を冒す必要はない、という意味だろうか。

「おまえ、オレがそんなことを許すと思うのか？ 奴らは絶対ぶっ潰さなくちゃならねえ。それに、オメーはオレが守るって言っただろ。組織を倒すためには、オメーが行く必要があるんだから、当然オレも行く」

「まあ、そう言うと思ったわ。でも、決着を急いで、命を落としてしまつては何にもならない。生きていれば、彼らを倒すチャンスはまた訪れる。そこを間違えないで。たとえ組織を倒しても、あなたが死んでしまつては、彼女が涙を流すことになるのよ」

「ああ。それはわかつてる。オレもオメーも、絶対に生きて帰る」

「ええ、もちろん私も、そのつもりよ。ただ、もし私が彼らの手に落ちたなら、私のことは見捨てなさい。自分の命を第一に考えるのよ。私を助けようとして、あなたまで死んでしまつかもしれないのだから」

「……」

「私も、自分の命を第一に考える。あなたが危機に陥っても助けないわ。あなた自身で何とかしなさい」

「……ああ」

会話が途切れる。一息ついてから、哀は口を開く。

「……彼らと対決する前に、彼女に電話してあげたら？」

「……そうだな」

コナンは新一用の電話を取り出し、蘭にコールした。2回目のコール音の途中で、電話がつながる。

『もしもし、新一？』

「よう、蘭。今、大丈夫か？」

当然のように、コナンは蝶ネクタイ型変声機を用いて新一の声を出している。

『うん、大丈夫だよ。どうしたの？』

「これまで俺が追ってきた事件だけど、近いうち決着が付きそうなんだ」

『本当に？ 決着が付いたら、また元の生活に戻るの？』

「ああ、すぐつてわけにはいかないけど、戻れると思う。だけど、決着を付ける時には危険を伴うから、もしも、つてことがあるかもしれない」

『もしも、か……やっぱり、危ない事件なんだね。でも、新一はそういうの放っておけないと思うし……わたしは大丈夫だから、絶対に無事で帰ってきてね？』

「ああ、絶対に無事で戻るから、もう少しだけ待っていてくれ」

『うん。前に言ってた推理のことも、まだ聞いてないし……また、戻ってきたら聞かせてね？』

「おう、そういえばまだ話してなかったな。今回の推理は、いつも以上に自信があるんだぜ？」

推理、という言葉に、哀が身を硬くする。薬の事実を明かさないために蘭に麻酔銃を打ち込む前、言っていた言葉がよみがえる。

——聞かせてもらうからね！ 新一のあの推理の答え……！ 多分、わたしもその推理……あ、合つてると思う気もするし……だ、だから……だから、病院に行くまでこの手は絶対に……ぜーったいに……

新一が何を推理していたのか、哀は直接聞いたわけではない。だが、その時の蘭と新一の様子から、哀には「蘭が新一の想いを聞こ

うとし、新一が蘭の聞きたがっていることを推理した」としか思えなかった。

（やっぱり、この人の目には、彼女しか映っていないのね……）

哀は、これまでコナンの蘭に対する想いを聞いてきた。蘭が新一を想っていることは、これまで何度も会ったわけではないが、同じ女の目から見て明白だった。コナンが新一に戻り、どちらかが想いを打ち明ければ、もう哀の手の届かないところに行ってしまう。

（まあ、最初からわかっていただけれど）

押し殺していた筈の想いが再び溢れ出しそうになり、哀は思わず目を瞑った。

「ああ、片が付いたら、また電話する。それじゃあな」

コナンが電話を切った後。

「彼女が羨ましいわね」

哀は、止めようと思いつつも口にしてしまっていた。

「あん？」

声に出した後で、哀は、しまったという顔をする。

「……何でもないわ。忘れて」

（彼から、こんなに想われるなんて、本当に羨ましいわ。2人とも、幸せになりなさいよ）

哀は、コナンに一言就寝を告げ、ベッドの方へ向かっていった。

（変な奴）

言葉の意味を測りかね、遠ざかる哀の背中を見ていたコナンだったが、さほど気にも留めなかった。

（まあ、いいか……そうだ、父さんにも電話しておこう）

優作の番号へ電話する。数回のコール音の後、受話器より優作の声が聞こえてきた。

「新一か。そっちはもう深夜じゃないのか。どうしたんだ？」

「ああ父さん。明日、例の組織と決着を付けるつもりなんだ」

「……そうか。当然、勝算はあるのだろうな？」

「もちろん。FBIの力も借りて、奴らの勢力は弱めてきたし、あ

と一步のところまで来てる。明日、奴らの本拠地に乗り込んで、薬のデータを手に入れ、幹部の身柄確保とネットワークの分断を行うつもりだ」

「うむ。おまえはもう、一人前の男だ。おまえの決めたことに、私も文句は言わない。ただ、最後の詰めを誤るな。過程が良好でも、最後に1つ間違えただけで、それまでのことが全て台なしになることがある。それが何なのか、おまえにはもうわかってるだろうが」

「ああ、絶対に生きて帰るよ、父さん」

「うむ。また会おう、新一」

再び電話を切ってから。

（もう、やり残したことはないかな……いや。あいつにも電話しておくか）

服部平次にコールする。

「おお、工藤。どないした？」

「服部。いよいよ、例の組織と、明日決着を付けることになった」
「……………」

平次が沈黙する。平次の頭に、1週間前の出来事がよみがえる。

「な、何やと！？ もう一遍言ってみいや自分！」

「ああ、何度でも言わせてもらおう。これ以上、君に手伝ってもらうことは何もない」

赤井秀一が言った。

「何でや！？ オレかて、ここまで首を突っ込んだんやぞ！？ せやのに何で、これ以上協力できないっちゅーんじゃ！」

平次は赤井に近付き、右手で赤井の胸倉を掴む。

「ここから先は、部外者を巻き込むわけにはいかない。覚悟を決めた者だけの世界だ」

赤井は顔色1つ変えることなく、左手で平次の右手首を握り、胸元から離す。その力に平次の右手は軋み、赤井の視線に気押されそうになるが、平次も引くわけにはいかないプライドがあった。

「つちゆうことは、何か？ オレには、覚悟ができてないつちゆうことか！？ オレは西の高校生探偵・服部平次やぞ！ 危ない橋も渡って来たからこそここにおるんや！ オレがどれだけ修羅場を乗り越えてきたか、わかって言つとんのか！？」

今度は、コナンが口を開いた。

「服部……組織を追ってここまで来れたのは、オメーのおかげだ……本当に、感謝してる……けど、落착いて考えてくれ……オメーは、組織に何かされたわけじゃねえだろ？」

「ああ、せやな。けど、ほなこと言つたって、現におまえはちつちようされとるし、悪さばかりしよる連中を、放っておけるわけがないわ！」

「服部、だからこそだ……今なら、まだ引き返せる……オメーは、まだ組織に狙われてるわけじゃない……でも、これ以上踏み込んだら、オメーは必ず組織にとって消すべき対象になる……そうなた時、周りの人を巻き込まないよう別れを告げて、組織を追って戦えるか？ オメーには、守るべき人がいるんじゃないのか？」

「……」
平次が押し黙った。守るべき人と聞いて、幼馴染の遠山和葉や両親の顔が頭に浮かんだ。

「せやけど……それやったら、おまえかて守るべき人がいっぱいおるやないか。何より、事務所の姉ちゃんがおるやろ」

「オレはもう、逃げられないところまで来てるんだ。薬を飲まされ、体が小さくなった時点で、オレが組織を追うことは決まった。否が応にも、参加させられたんだ。そして、組織を倒して完全に元の体に戻るまで、オレに平穏な生活は訪れない……組織を倒せないなら工藤新一は死んだのと同じ……その覚悟でやっているんだ」

コナンの言葉に、平次は徐々に視線を落としていく。

「頼む。おまえは、これ以上は来ないでくれ」

3人の間に、沈黙が流れる。平次は固く目を閉じ、両手で拳を作った後。

「くっ……！」

呻くように、声を上げる。

「くっっ……そおおおー！！！」

平次のやり場のない怒りが爆発する。地面に膝を付き、右手で作った拳で地を叩く。赤井は感情を殺すように地に伏せた平次を見つめ、コナンは目を伏せたまま、平次の叫び声を聞いていた。

平次は、意識を現在に戻す。

「そうか……いよいよか……」

「ああ、そうだ」

再び、会話が途切れる。平次は、感情が爆発しそうになるのを抑えつつ、口を開いた。

「何や、アホくさいわ……おまえは、死を覚悟してやっとなるっちゅーのに、オレは蚊帳の外やもんな……」

「そんなことはない。前にも言ったけど、ここまで来れたのは、オメーの協力があったからだ」

「ハ……何ぼ言うたって、オレが何とかっちゅー組織にとどめ刺せんのには変わらんわ……」

平次の言葉に、コナンが沈黙する。平次が本当は組織の壊滅作戦へ参加したかったとわかるだけに、コナンはかける言葉を持つていなかった。しばらくして、受話器の向こうより再び平次の声が届く。

「工藤。必ず、生きて帰ってこいよ？ 死んだら、承知せんぞ？

死んだら、今度こそホンマに絶交やからな？」

「ああ、わかった」

「おまえが死んだら、オレが代わってその組織をあっさり倒したるほんで、『工藤新一はヘボ探偵やった。オレが日本……いや、世界一の高校生探偵・服部平次や』って言いふらしたるさかいな。そんなこと、言われたないやろ？」

「ああ、そんなのはごめんだ」

「そつやろ？ せやから、必ず……」

平次が次の言葉を飲み込んだところで、コナンが後を継いだ。

「ああ。必ず戻る。オメーと、また推理で競争してえからな」

「おお、そうや。戻ってきたら、必ずオレが勝つたるからな。絶対生きて帰ってこいよ。ほんなら……また、な」

「ああ……また」

通話が終わり、コナンはしばらく受話器からの電子音を聞いていた。

（よし、もう大丈夫だな。それじゃ、オレも寝るか）

コナンもベッドに向かった。

第2章：突入（前書き）

血が出てきます。苦手な方はご注意ください。

第2章：突入

翌日、杯戸市内某所にて。

『よし、揃ったな。では、対FBI会議開始だ』

『ちよっと！ 何でベルモットがいないわけ！？ アタイはアイツから今日のこと聞いたってのに！』

コナンの持つ盗聴器のイヤホン越しに、キャンティの声が響く。
『フン…… 奴が時間通り現れねえのは今に始まったことじゃない。気にせず始めるぞ……』

（ベルモットは中にいねえのか？ 今日の突入のことを知ってるなら、巻き込まれるのを避けたのかもしれないけど…… この盗聴器はベルモットが送ってきたものとして…… 本当に大丈夫なのか…… 畏じゃねえだろうな……）

コナンが思案する。すぐそばで聞いていたジョディも、幾分表情に戸惑いを見せる。

（確かに、畏の可能性はある…… でも、中の構造は大体わかっているし、セキュリティシステムにも侵入できた…… 畏であるなら、もうこちらを攻撃してきているか、入口近くで待ち構えている筈…… やっぱり、突入する価値はあるわ）

そこまで考え、ジョディは振り返った。

「みんな、突入するわよ。畏の可能性はあるけど、入口で待ち伏せでもされていない限り、作戦通りでいくわ。何かトラブルがあったら、ベルトのSOSボタンですぐに知らせて」

そして、今度は無線を取り出した。

「こちらジョディ。シュウ、予定通り行くわよ」

『了解した』

組織本部は廃工場を模していたが、入口が2つあったため、二手に分かれて侵入する計画だった。

「もう一度確認だけど。とにかく、人命が最優先よ。作戦中止も躊

踏しないで、危険があつたらすぐに知らせて。それじゃ、準備はい？」

全員、無言で頷いた。ジョディが入口に近付く。捜査官達が入口に向けて銃を構える。

ジョディが扉を開く。

。

特に、何も起こらない。中から薬品の臭いが漂うが、誰の姿も見えない。コナンの耳にも、これまで通りジン達の会議の様子が聞こえている。その場の緊張が、幾分和らぐ。

「それじゃ、このまま進むわ。あなた達は、ここを確保しておいて」
「了解」

声をかけられた捜査官2人が返事をする。コナンと哀を含め、残りのメンバーは順に中に入っていた。

一行はジョディを先頭に、部屋を順に調べつつ、建物内を進んでいく。会議中ということもあつてか、まだ突入してから組織員を見していない。

『こちら赤井。βチーム侵入成功。予定通り進行中』
「了解」

（赤井って人の声……どこかで聞いたかしら）
哀は記憶を辿るが、すぐには思い出せない。

（でも、今はそんなことより、薬のデータと組織の壊滅ね）
拳銃——シグザウエルP226を構えて歩きつつ、ふとジョディは不安を覚える。

（いくら何でも、静かすぎる……本当に、ここが本部なの？）
そんなことを考えつつ、10分ほど歩いた頃。それまで一本道だった通路が、二手に分かれていた。その場に来た者が、瞬間面食らう。

「こんなところ、マップには……いえ、改修したのかしら……」
事前に得ていた建物の情報では、ここも一本道になっていたのだ

が、実際には右側にも通路が伸びていた。ただ、その前に鉄格子があり、中途半端に開いた状態になっている。

「どうします？ 当初の計画通り、まっすぐ進みますか？」

キヤメルが言う。

「ええ……それが無難だけど……」

「でもこつちつて、地図ですぐ隣にあった、行き止まりの通路だね？ だったら、こつちから進んだ方が、会議をしてる部屋には早く行けるんじゃない？」

コナンが右側のルートを指差し、頭の中で地図を思い浮かべながら言う。

「ええ、確かにそうね。でも、あなたと哀ちゃんとはかく、今のままじゃ私達が隙間を抜けて行くことはできないわ」

「だったら、ボクと灰原が抜けて扉を開けるよ。あそこにあるレバーで開けられるんじゃない？」

コナンが鉄格子の奥に見えるレバーを指差す。

「じゃあ、お願いできるかしら」

「うん、任せて」

返事の後、コナンは鉄格子の隙間を抜けた。続いて哀も抜ける。

コナンは先にレバーまで近付き、手前に倒そうとしたが、びくともしない。哀もレバーに手を置く。

「せーのっ」

2人が力を込め、レバーが下がった。すると、重い金属音と共に鉄格子が開き始めたが、同時にその場所に赤いレーザー光が現れた。「な……何だこれ？」

「……多分、センサーじゃないかしら。あの光が遮られると、どこかにそのことが伝わるんでしょね……」

哀の冷静な言葉に、コナンは顔をしかめる。

（どうする？ もう一度レバーを上げるか？ またさっきみたいに、オレと灰原が通れるだけの隙間が残るのか？ もし完全に閉まっちゃったら、完全にジヨディ先生達とはぐれちゃう……）

ジョディも慌てていたが、少し落ち着いてから言った。

「このまままっすぐ行けばそっちへ行ける筈だから、しばらくそこで待っていて」

「いや、このままここで待っている方が逃げ道がなくなって危険だよ。ボク達も先に進んで、合流地点に行ってるよ。大丈夫、迷いそうになったら連絡するから」

「……そう。そうね、その方がいいかも。じゃあキヤメル、あなたはここで待機して、コナン君達が後ろを取られないように見張っていて」

「了解です」

キヤメルはその場に残り、ジョディ達は通路の奥へ進んでいった。

「じゃあ、私達も先に進みましょう」

「よし」

コナンと哀も進んでいく。ほどなくして、再び通路が二手に分かれる地点に差し掛かった。

（左はジョディ先生達と合流するルートで、右は部屋が1つだけで行き止まりだったよな……どっちみち左に行くんだけど、先に右の方を調べておく方がいいか）

コナンが哀を振り返ると、哀も同じ結論に達したのか、右側を見ている。

「私がドアの中を見てくるから、あなたはここで見張っていて」

「わかった」

コナンは右側通路手前の角に立ち、麻醉銃を構えつつ左側の通路を警戒する。哀が歩いていき、奥のドアのノブに手をかけようとした、その時。

ガチャリ。

ノブが動き、ドアが開く。中から、1人の大柄な男が出てくる――

（な……！？）

哀が目を見開く。黒ずくめの服に、帽子、サングラス。ウォッカ

だった。

「な……何だ、てめえは!？」

(何!？ ウォツカ!?)

突然の事態に動揺しつつも、コナンは角から様子を窺う。ウォツカは懷から拳銃——FNハイパワーを取り出し、哀に向けた。哀はわずかに後ずさり、無言で銃口を見つめる。

「待てよ……おまえ、どっかで見たな……確か……」

ウォツカは、銃口を哀に向けたまま近付き、少し考える。

「ジンの兄貴が言ってた……シェリーはガキになってるかもしれないねえって……そしてウェーブで赤みがかった茶髪。貴様、シェリーだな」

「……」

「何の用でここにいるのか知らねえが、まさか俺達の下に戻る気になつたってわけでもあるまい。大方何かデータを回収に来たか、俺達を潰す算段でも探っていたんだろう。どっちみち、おまえにはここで死んでもらう」

ウォツカの右手の人差指が引き金にかかる。

(まずい、このままじゃ灰原が……)

——もし私が彼らの手に落ちたなら、私のことは見捨てなさい

(くっ、そんなことできるかよ。奴に撃たせないためには……)

コナンは麻醉銃をたたみ、ボール射出ベルトとキック力増強シューズを作動させた。

(この位置なら、銃を弾き落とす方が確実だ。そして麻醉銃を打ち込む)

「じゃあな、シェリー」

コナンが左足で素早くボールを蹴る。

(行っっ……けええええー!)

ボールがウォツカの銃に向かって飛んでいき——

「そうだ、殺す前に……」

不意にウオツカが右手を引き、銃口が哀から外れる。

（何っ！？）

ボールは、ウオツカの目の前を通り過ぎていった。壁に当たって跳ね返り、その勢いを失う。

「な、何だ！？」

ウオツカがコナンの方を向く。

（し、しまった……）

「く、工藤君！？」

哀も驚き、コナンを見る。

「何っ、工藤！？ 工藤って、工藤新一か！？ 兄貴がバラしたはずの……そうか、おまえもガキになってやがったのか！」

ウオツカが、今度はコナンに銃を向けた。

（くそっ、こうなりゃ一か八か、奴の懷に飛び込んで、拳銃を奪う！）

コナンは、ほとんど反射的にウオツカに向かって駆け出していた。

「ダメよ！ 工藤君、逃げなさい！」

（あと5メートル！ 間に合うのか！？）

その時、不意に哀がウオツカに飛びかかった。銃口がコナンから外れ、ウオツカは体勢を崩す。

「なっ！？ て、てめえ、離しやがれ！」

ウオツカは左方向に体を回転させ、哀を振り払った。

「うっ！」

哀が地面に叩きつけられる。再び、ウオツカは哀に銃口を向ける。

「ちくしょう、シェリーめ！」

「やめろ！」

今度はコナンがウオツカに飛びかかった。右手の銃に向けて、手を伸ばす。

「ああっ！？」

ウオツカの手から銃が離れ、コナンの手に入る。コナンは体を返

し、両手でソレを握り、ウォッカに銃口を向けて構える。

「く、くそつ！」

「ウォッカ！ 両手を頭に置いて！ 私達を案内して！」

銃口がウォッカの胸を向いている。哀も立ち上がる。ウォッカは言われた通り、両手を組んで帽子の後頭部に置く。2人に背を向け、通路を反対方向へ歩き始めた。コナンは銃をウォッカに向けたまま、哀と共に後ろを歩く。

（まずい。何とかしないと……）

歩きつつ、ウォッカはこの局面を開く方法を考える。

（今、ハイパワーを手に行っているのは工藤の方。だとすれば、もう1つの方で……）

ある結論に達し、右側に折れる通路の角に来たところで、不意にその奥に駆け込んだ。

「なっ！？」

そして、ウォッカは上着の内側に手を入れ、何かを取り出し、コナンに向けて構える。

「なめるなよ、クソガキが！」

ウォッカが構えているのは、銃——ワルサーPPK——

ドクン——

（このままじゃ、オレも灰原も殺される——）

ドクン——

（今、手には銃がある——）

ドクン——

（やらなきゃ、やられる——）

ドクン――

。 。 。
乾いた銃声と共に、呻き声が漏れる。辺りに、血飛沫が飛ぶ。コナンの顔に、血が降りかかる。

「ぐっ……！ うっ、うう……」

ウォッカが胸を押さえ、その場に崩れ落ちた。

（――）

FNハイパワーの銃口から出た煙が、コナンの顔にたなびく。空薬莖が、コナンの足元に落ちている。放たれた弾丸が、ウォッカの心臓を貫いていた。

「――」

発砲時の姿勢のまま、コナンは動かない。哀も、動かない。

『A・31エリアにて、発砲を確認――』

建物内でまだ生きていたシステムが作動する――！

不意に、建物内で赤い照明が点滅し始めた。

『ちよっと！？ 誰か入ってきてるじゃない！』

『フン……どうやら情報が漏れていたようだな……会議は中止だ。すぐに侵入者を始末しろ！』

コナン達の上階で、大人数の足音がした。それとほぼ時を同じくして。

『作戦は失敗よ。みんな撤退して！』

ジョディから無線が入る。哀の瞳に生氣が戻り、コナンの腕を掴んだ。

「さあ、逃げるわよ！」

しかしコナンは呼びかけに応じず、目は虚ろで焦点も合っていない。

「工藤君！？ 逃げるのよ！」

（オレが——撃った——オレが——）

——殺した……？

「工藤君！ しっかりして！」

そうこうしている間にも、進む予定だった通路の側から、数人の駆ける足音が近付いてくる。やむを得ず、哀はコナンの手を強く引っ張り、レーザーセンサーのあった通路の側へと駆け出した。コナンも手を引かれて走り出したが、目から光が失われたままだった。

第3章：夢と現実

（あの時、オレは何をしたんだ？ 目の前に銃口があつて、頭が真っ白になつて……気が付いたら、銃声がして、何かあつたかいものが顔に当たつて、奴が呻き声を上げて……）

——いや、何か忘れちゃいねえか？

（オレ、あの時手に何か握つてたよな……銃声がした後、そこから白い煙が出たような……）

ああ、そうだ。

（白い煙つて……け、拳銃！？ オレ、銃を握つてた！？ それが煙を上げたつて……誰かが撃たなければ、そんな風にはならねえよな……撃つたのは……誰だ？）

そんなこと、最初からわかつてるだろ？

（銃を握つてたのは、間違いなくオレ……煙を出してたのも、オレが握つていた……そして、銃声の後にウオッカが倒れた……奴も銃を持つてたけど、煙は出てなかった……あの時近くにいたのは、オレとウオッカと、灰原だけ……となると、撃つたのは……）

いい加減、ごまかすのはやめろ。

（灰原は、オレの隣にいた……あの時、あいつが何をしていたか、オレは見えていない……でもあいつは、銃は持つてなかった……オレの持つていた銃の引き金を引くことはできたけど、そのためにはオレの手に触れないとできない……あの時、オレの両手にあつたのは、金属とプラスチックの硬い感触だけ……つてことは、撃つたのは、やっぱり……）

おまえなんだよ！ おまえが撃つて、殺したんだ！！

（オレ……か？ オレが……殺した、のか？）

おまえ、あの時自分が何を考えてたか、覚えてないのか？

（……………）

——このままじゃ、オレも灰原も殺される——

——今、手には銃がある——

——やらなきゃ、やられる——

(.....)

そうだ、やらなきゃやられると思って、殺したんだ!!

(殺したって……殺人？ 殺人は、何があってもやっちゃいけないんじゃないのか?)

——Stop. Stop it, Ray…… Even if
you are facing a bitter aspect
of life…… Drugs and murder are
foul, without any excuses……
Deserve a red card, for a loser.

>ダメだよレイ……たとえどんなに辛く悲しいことがあったとしても……麻薬と殺人はやっちゃならねえ反則……みつともねえレッドカードだよ……<

(オ、オレ……レイに、殺人はダメだって言ってたぞ……なのに、
オレが、殺人を……)

(オレが殺人をしたって知ったら、蘭はどんな顔をするんだろう……
……)

——ねえボウヤ、なんか勘違いしてない？

——え？

——ホラ、シャツじゃなく床にこぼしちゃったとか……

——でもボク本当に……

——ホントにホント？　よく思い出して……お願いボウヤ……

（……やっぱり、傷付けちまうだろうな。蘭のことは、もう泣かせたくないのに……泣かせないために、あいつに黙ったまま生きていくしかないのか？　でも、それは……）

——でももう嫌だ！　これ以上、父さんを殺した悪夢を見ながら、おびえて暮らすのは嫌なんだ！！　罪を償って、楽になりたいんだよ……

——しっかりしなさい昭夫！！　耐えるのよ！　時効まで頑張りましょう！　だ……だ、黙っていれば誰にもわからないわ……

——そう……確かにこのまま隠れていれば、警察からは逃れられる……だが、犯した罪からは決して逃げられはしない……奥さん……あなたは息子さんに……一生この重荷を、背負わせる気なんですか？

（何で、こんなことばかり思い出してんだ、オレ？　でも、オレ自身が言ったことだ……）

（今回の件、オレが罪を償えるのか？　オレが撃つたって自首しても、組織が死体を残しているのかどうか……死んだ証拠がなかったら、逮捕も何もできない……だったら、どうやって償えるんだよ……）

そうだ、おまえが殺したんだよ！！　殺さなくても、動きを止めれば良かっただけ……胸を撃つとか、麻酔銃で眠らせるとか、いくらでも方法があった筈だ。なのに、心臓を撃ち抜いただと？　明確な殺意がなきゃ、そんなことできねえよな？

（違う！　オレは、殺したくて殺したんじゃない！　あれは、たまたま心臓に行っちゃったんだ！　それにあの時、オレが撃たなかったら、オレも灰原も殺されていたんだ！　だから……だから仕方なく、勇気を出して引き金を……）

——オレー人が犠牲になって勇気を振り絞ってあいつに天罰を加えてやったっていうのに……何だよ……何だよ、その言い草はよオ!?

——ダ、ダメですよ……

——あん?

——ダメです……勇気って言葉は身を奮い立たせる正義の言葉……人の命を奪う理由なんかに使っちゃダメです……

(ああ、蘭……おまえ、そんなこと言ってたんだな……おまえの言った通りだ……勇気を振り絞って殺しただなんて……言い訳にもならねえ……)

そもそも、奴から銃を奪った後、どうしてずっと銃を持って構えていたんだ? 麻酔銃で眠らせれば良かったじゃないか。隣にいた女に、銃を渡しても良かっただろう。なのに、おまえがずっと持っていたのは、おまえが本当は人を殺してみたかったからじゃないのか?

(ち、違う……あの時オレがずっと持っていたのは、奴に少しでも隙を見せたら、反撃されると思ったから……麻酔銃のことなんて、考える余裕がなかった……灰原に渡さなかったのは、あいつに人殺しをさせたくなかったからなんだ……)

でも、結果はどうなんだ?

(ぐっ……)

あーあ。おまえが人を殺したって知ったら、おまえの幼馴染の女は悲しむんだろうな!。

——は、犯人は……米原先生あなたです!!

(——)

——策を弄した犯人を、追いつめる時のあのスリル！！ あの快感
——！ 一度やったらやめられねーぜ、探偵はよー！！！！

（——）

——ふざけんな！！ 人間を殺す薬を作ってた奴を、どう理解しろ
ってんだ！？

——お、お、おい新——

——わかってんのか、てめー！！ おまえが作った毒薬のせいで、
いったい何人の人間が……

（——）

どうした？ 随分大人しくなったな。人を殺しちまったことで、
この先の人生に絶望したか？

（……………）

絶望したっていうんなら、俺が殺してやろうか？

（……………）

ああ、死ぬ前に、さらに絶望を味わわせてやるよ。そうだな……
おまえが殺した奴と、おまえが推理で追い込んで自殺をさせちまっ
た犯人の、幻影を見ながら死んでもらうか。

（な、何でおまえが……成実さんのことを、知ってるんだよ？）

何だ？ まだ気が付いてないのか？ 俺はずっと、おまえの中で
生きてきたんだぜ？

（え？ それって……つまり……）

あ、そうだ。俺が、おまえに成り代わって、これから先を生きて
いくっていうのが良さそうだな。それをおまえにそばで見させてい
た方が、よっぽど絶望しそうだな。

（な、何をするつもりだ？）

まずは、組織を倒す……まあ、これはもうFBIが動いてるし、

俺がどうこうしたからって変わるもんじゃないから、ここは協力してやるよ。その先が、結構面白いぜ？　まずは、組織から抜け出した女だ。実はあいつ、おまえに惚れてるんだよ。でも、おまえを小さくしちまった負い目があるし、おまえと幼馴染の女が両想いだって知ってるから、解毒剤を作っても、多分そのままじゃ元の体に戻らないだろうな。だから、一緒に元の体に戻って欲しいって頼み込むんだ……ここはちょっと工夫が必要だろうけど、俺があいつに気があるようなことを匂わせれば、きっと元に戻ってくれるさ……それで、期待を抱かせておいて元に戻ったところで、やっぱり幼馴染の方が放っておけないって言うんだ……さらに、あいつの毒薬で死んだ奴の家族を探し出して、「この女が作った毒薬で死んだ」って教えてやるんだ……家族は当然あの女を非難するだろうな……そこまでやったら、あの女はどうなるかな。頼りにしてたおまえからは裏切られ、何人も死に追いやった罪の意識に苛まされて、絶望のあまり自殺するかもしれねえな……

(……やめろ)

次は、幼馴染の女だな。放課後、あいつを人気のない場所に呼び出すんだ……あいつ、「ついに告白してもらえる」とか思ってた、喜んで来るだろうな……でも、その場に来るのは、屈強な男が多数だ……それで、あの女を犯そうと迫る……あいつ、美人だし、体つきもいいから、喜んでやる奴いるよな……あ、でもあいつ、空手があったか。そうなると、俺がその場に行って警戒を解いてから、催涙スプレーでも使って弱らせないとダメか……あとは、他の男に任せろ……あいつが犯されるのを、近くで見てるんだ……もちろん、初めては俺じゃなくてな……さあ、そこまでしてやったら、あの女はどうするかな。あいつ、おまえのことが好きだから、「何かわけがある」とか思ってた、誰にも相談しなそうだな……そうなると、さらに凌辱をエスカレートさせていくしかないか……しまいには、誰ともわからねえ奴の子を孕んじまうかな……その時、周囲の連中に、どうやって打ち明けるのか……

（やめる！）

あとは、探偵の仕事か……まあ、散々おまえの推理は聞いてきたし、俺でも結構事件は解決できるだろう……ただ、犯人を追い詰める時、おまえは甘いよな……前に自殺させちまったことが、引つかかってるんだろうけど……相手は殺人者で、悪人なんだろ？ だったら、何でもっと徹底的にやらないんだよ？ 自殺させないようになるとか、傷付けないようにするとか、気にする必要なんてないだろ？ 自殺したんならしたで、世の中から悪人が減ることになるんだから、喜ばしいことなんじゃないのか？ だから、俺はもっと徹底的に、できるだけ多くの犯人を自殺させてやるよ。

（やめろおおおおお！！）

何言ってるんだよ。これは、おまえの望みでもある筈だぜ？

（違う！ オレは、そんなこと望んでなんかない！）

ったく。往生際が悪いな。おまえは、こういったことを、今まで一度も考えなかったっていうのかよ？

（黙れ！！ 黙れ黙れ黙れえええええ！！）

「さっきからうるせえんだよ、てめえ！」
大声を上げる。

「何よ。うるさいのはあなたじゃない」

哀の声が近くから聞こえ、コナンの意識が現実に戻される。

「え？ ……あれ？」

周囲を見回す。コナンの体は、博士の家のベッドの上にあるようだった。

（ゆ、夢か……）

全身汗だくだったが、先ほどまでコナンの頭の中で響いていた声が聞こえなくなり、ひとまず安心する。

（何か、すごく嫌な夢を見ていた気がする……オレの中に、もう1

人誰かがいて、すごくひどいことをしようとしていて……)

夢の内容を思い出そうとするが、目が覚めたことで、ほとんどが霧にかかったように消えてしまっている。

(くそつ、思い出せねえ……でも、あれがオレの望みである筈がねえ……あいつ、確か灰原にも、何かひどいことをしようとしていたような……)

だが、やはり思い出せない。漠然とした不安を抱えたまま、コナンは哀の聲がした方向へ顔を向ける。

「随分うなされていたわね」

「……………ああ、灰原か」

時刻は、午後8時20分。FBIによる組織本拠地への突入作戦が失敗し、撤退した後。組織と決着を付ける作戦はまた明日話し合うこととし、解散となった。コナンと哀は、博士の家に戻ったが、コナンは戻るなり「気分が悪い」と床に就いていたのだった。

(えっと……どこまでが、現実なんだ？ 確か、組織の本部に潜入して、ジョディ先生達とはぐれちまって、ウオツカに見付かって……)

そこまで思い出し、コナンは身震いする。

(オ、オレ……確か、ウオツカを撃ったんだよね？ それで、奴が倒れて、組織内のセキュリティが反応して、逃げて帰って来た筈……)

そして、悪夢にうなされていた——そこまで理解する。では、何故これほどまでうなされたのか、コナンは考える。

(オレが、人を殺しちゃったから……そう思ってるから、だよな……でも、ウオツカは本当に死んだのか？ 別に、誰か死んだのを確認したってわけじゃないし、気絶しただけってことも……)

そこまで考え、コナンは口を開いた。

「なあ、灰原……あの時、オレが撃った後、あいつは倒れたけど……奴は死んだのか？ 単に気を失っただけとかじゃないのか？」

哀は顎に手を当て、その時の状況を反芻する。

「銃創の位置からすると、撃ち抜かれたのは心臓の中心より少し下だったけど、まず間違いなく即死でしょうね」

「……そうか。やっぱりオレが、この手で殺したのか……」

コナンの淡い期待は打ち砕かれた。コナンが俯いたのを見て、哀はコナンが人を殺した慙愧の念に捕らわれていることを察した。

「気にすることはないわ。あなたがああしなければ、私達が殺されていた。私があなただったとしても、同じことをしたでしょうね」

「……ああ。でも……」

「でも？」

「オレがあそこで撃たなければ、オレと灰原が殺される……咄嗟にそう思つて、あんなことをしたけど……たとえ殺さなければ殺されていたんだとしても、たとえ何人も殺してきた犯罪者だったとしても……その相手を殺してしまったのが、正しいことなのかどうか、わからなくてな……」

哀は、ふう、と息を吐き、天井を見上げる。

「大丈夫よ。人をたかが1人殺したことぐらい、すぐに受け入れられるわ」

「た、たかが1人つて……おまえな……」

「私なんか、これまで何人を死なせてきたのか、数えたくもないから。私の作った薬のせいで、何人が死んだことか」

「なっ……」

コナンが息を飲む。哀は続ける。

「そう……正当防衛だった、命令に従つて薬を開発しなければ自分が殺されていたかもしれない……どれだけ言い訳をしても、自分が死なせてしまったことに変わりはないのよ。そして、それは決して消すことができない事実……この十字架を、一生背負つて生きていかなければいけないの。だから、死なせてしまった人達の命を無駄にしないためにも、自分の犯した罪をこれから先償つていかなければならない」

そこで言葉を切り、哀はベッドの上のコナンに近付く。そして、

両腕をコナンの背中に回し、強く抱き締めた。

「は、灰原？」

突然のことに戸惑い、コナンは動けない。

「工藤君……ごめん、ごめんなさい……私のせいで、あなたに、あんなことを……させてしまって……」

コナンの肩の上で、哀の声が震える。哀の目から涙が溢れ、頬を伝ってコナンの肩に落ちる。

「お……おい……どうして、おまえが……」

泣いているのか。コナンは咄嗟に理解ができない。

「人を死なせて、辛い思いをするのは……私だけでいいと思ってた

……なのに……うつ……あなたを、巻き込んで……そんな思いを、させてしまって……うつつ、……ご、ごめ、なさい……」

哀の嗚咽が響く。

（そうか……こいつも、人を死に追いやったことで悩んで、抱え込んでいたんだな……）

コナンは、両手を哀の背中に当て、優しくさすってやった。

「灰原、泣くな……おまえは、1人じゃない……」

言いながらコナンは、自分の心が落ち着いていくのを感じた。

（済んじまったことは、もう変えられない……なら、この先どうするのかが、考えていかないとな……）

そのままの体勢で、哀が泣きやむのを待っていた。

第4章：幕間

翌日、杯戸市内のFBI駐在地にて。8畳ほどの部屋の中で、1人の外国人の男が業務用机の奥に座り、それと向かい合うように2人の日本人——うち1人の外見は小学生——が立っていた。

「しかし、これ以上部外者を危険な作戦に巻き込むわけにはいかない」

コナンと赤井を前にしつつ、ジェームズが言った。

組織に突入がバレた以上、制圧には正面对決しかない。しかし、激しい戦闘が予想されるため、FBI部外者であるコナンと哀を参加させるわけにはいかない。2人は作戦への参加を強く希望したが、結局作戦会議の場では容認できないということになった。コナンはそれを不服とし、会議終了後、ジェームズに直談判に行っていたのだった。

「それでも、お願いします。灰原が行かないと、奴らを完全に潰すことはできなくなる。今倒さなかったら、組織を倒すチャンスは2度と来ないかもしれない。奴らのネットワークを断つには、灰原の知識が必要なんです」

コナンが言い終わると、今度は赤井が口を開いた。

「私からもお願いします、ジェームズ。このボウヤとあの少女がわけありなのは、もうわかっていていると思います。特に、あの茶髪の少女に、私は心当たりがある。今は何も言わず、この子達のやりたいようにやらせてやってもらえませんか」

赤井が頭を下げる。コナンもそれにならい、固く目を閉じ頭を下げた。その2人の姿勢に、ジェームズは顎に手を当て、再度考える（奴らにとどめを刺さず今後ともいたちごっこを続けるか、少々の犠牲は覚悟して勝負に出るか……少なくとも、この子達は覚悟できている……ならば、傍観させるのも酷というものか）

バーボンの情報によれば、組織のメインサーバは明日までは杯戸

市内の拠点にあるが、それ以降は世界中で数十箇所ある拠点のどこかに自動的に移動してしまうとのことであった。一度拠点を移されてしまえば、再度絞り込むのは事実上不可能になる。

しばし目を閉じていたジエイムズだったが、やがて目を開けた。

「わかった。私も首を懸けよう。やってくれ」

その言葉に、コナンも目を開き、顔を上げる。

「あ……ありがとうございます」

再びコナンは頭を下げた。

「では赤井君、コナン君達の護衛は君に任せていいかな？」

「いや、私は決着が付くまで、あの少女と顔を合わせるわけにはいきません。ジョディに頼んでみましょう」

コナンが阿笠邸へ戻ってから。

「それで。どうだったの？」

一足先に帰っていた哀は、ソファに座ったまま、紅茶の入ったカップを口に運びつつ言った。

「ああ。結局、明日の作戦には参加させてもらえることになったよ」

コナンは歩き、哀とテーブルを挟んで向かい側に座った。

「そう。いよいよね……これで終わりにしないと」

「そうだな」

（今度こそ、奴らと決着を付ける。そして、灰原に解毒剤を作ってもらって……）

そこで、ふとコナンは引っかかりを覚えた。

（そういえば、元々灰原の作った薬なんだよな……こいつは自分の薬を、死ぬつもりで飲んだんだけど、結果として幼児化して生き延びた……そして、オレが元に戻りたがっていると知って、奴らを潰すことに協力してくれた……）

哀はティーカップから口を離し、黙り込んだコナンの顔を見つめ

ている。

（こいつ、死ぬつもりだったけど、今では生きて協力してくれている……組織に嫌気が差したから……それだけか？）

昨夜の哀の言葉を思い出す。

——死なせてしまった人達の命を無駄にしないためにも、自分の犯した罪をこれから先償っていかなければならない

（自分の作った薬で多くの人が死んだことや、オレが小さくなったことに対して償っていくため、協力してくれてたのか？ だとすれば、オレが元に戻ったら、一緒に何かする理由はなくなるよな……その先は、どうするんだろう……）

腕を組んで少し俯き、さらに思い起こす。

——人を死なせて、辛い思いをするのは……私だけでいいと思ってた……

（こいつ、結構悩んでたみたいだよな……組織と決着を付けた後も、それを抱えたまま生きていくのか？ でもそれって、すごく辛そうだよな……オレだったら、耐えられるかどうか……）

そこまで考え、コナンは思わず口にした。

「おまえ、組織と決着を付けたら、どうするんだ？」

その言葉に、哀は虚を突かれたような表情をする。

「……さあ？ 考えたこともなかったわ。まあ、アポトキシン4869の解毒剤を作って、あなたを彼女の元に返してあげて、それから考えるかしらね」

「それから考えるって……元の体に戻ってからか？」

「元の体に戻る？ どうかしら……確か、戸籍と住民票については、どういわけか灰原哀のものが作られてたわよね……」

そう。コナンがイギリスから帰った後、阿笠邸にコナンと哀の戸

籍謄本と住民票が届けられており、コナンも米花市役所で間違いなく存在していることを確認していたのだった。

「戸籍を作ったのは、ベルモットかしらね……まあ、真つ当な手段じゃないのは確かだけど……」

哀は、しばらく中空を見据える。

「でも、元に戻っても、行くあてがあるわけじゃないし……あの子達と一緒に、中学・高校と進んでいくのも悪くないかもね」

あの子達とは、少年探偵団の3人——歩美、元太、光彦のことだろう。

「オメー……それでいいのか？」

「……………工藤君、今は余計なことを考えないで。組織と決着を付けようという時にそんなことを気にしていたら、勝てるものも勝てなくなるわ。ここで彼らを倒さなければ、その先はないのよ」

「……………」

会話が途切れる。

（確かに……余計なことを考えていたら、こっちがやられちまう……それはわかってるんだが……灰原、おまえまさか……オレを元に戻したら……死ぬつもりとかじゃ、ねえだろうな……）

蘭を待たせていることより、決着後の哀の動向が気になっている。コナン自身、その心情の変化に気付き、戸惑っていた。

（くそっ……オレは一体どうしちゃったんだ？ 灰原のことがこんなに気になっちまうなんて……ウォッパを撃った後、コイツの苦しみを聞いたからか……）

コナンは窓の外を眺め、哀と過ごした日々を思い出す。最初に彼女の正体を聞いた時、「人を殺す毒を作った奴」と、怒りに任せて言ってしまった。だが、彼女自身がどんな気持ちでいたのか、氣にしたことはなかった。少年探偵団と共に過ごすうち、年相応の可愛らしい面、優しい面、1人で抱え込もうとする面などを見てきた。いつしか彼女が毒を作ったということを忘れ、頼もしい仲間として受け入れている自分がいた。だが、自分が知っていたのは、彼女の

ほんの一面に過ぎなかった。彼女は、自分が作った薬で多くの人が死んだことに、罪の意識を抱いていたのだ。やむを得ないとはいえず、ウオツカを殺してしまい、罪の意識で思い悩んでいた時、彼女は「自分はおもつと多くの人を死なせた。気にすることはない」と言った。そこに、どれほどの思いが込められていたろう。守っているつもりだった少女に、逆に救われた気持ちになった。彼女は、自分が思っていたより遥かに大人で、強いくせに、儚く折れてしまいそうなところがある。

（灰原の奴、オレが小さくなって、組織とかかわりを持ったことも、気にしてるのかもしれないな）

元はといえば、自分が好奇心で首を突っ込んだ事件。取引現場に夢中になり、背後への注意が疎かになっていた。殺されてもおかしくなかったが、彼女の薬があったため、体は縮んだが生き延びることができた。そして、組織が大規模に犯罪を行っていることを知り、打倒組織を誓った。彼女の薬がなければ、そのまま殺されていたか、蘭と共に平和に過ごしていたのかもしれない。奇妙な縁だと思う。（いや……灰原のおかげで、オレは生き延びて、組織を追って潰すところまで来ているんだよな）

探偵としては、むしろ感謝すべきかもしれない。

「なあ、灰原」

コナンは、視線を哀に戻した。

「何？」

紅茶を飲み終わり、哀はカップをテーブルに置く。

「ありがとな」

「……………は？」

予期せぬ一言に、哀は怪訝な表情を見せる。

（こうして今日を迎えたのも、何かの運命かもな）

「何が、ありがとうなのよ？」

「いや、何でもねえよ」

コナンは口元を緩め、視線を落とした。

（まずは、生きて帰らないとな）

「……………そう」

哀はコナンの言葉を不審に思ったが、特に追究しなかった。

（この人、まさか私の薬で小さくなって組織を追うチャンスができたことを？ ……いえ、まさか、ね）

コナンがコーヒーを淹れた後、哀は昨夜より考えていたことを話し始めた。

「明日、私はアポトキシン4869の解毒剤の試作品を使うわ。そして、ウォツカの持っていた銃で、万一に備える」

「な、何だと!？」

座ったばかりのコナンがまた立ち上がり、テーブルに両手を付いた。コナンと哀の2人分のカップの中身が揺れ、零れそうになる。

ウォツカの持っていたFNハイパワーは、組織本部から撤退する際、哀が念のため確保しておいたのだった。

「この体のままでは、銃を扱う時に不利だからよ。あなたも、その体のせいで少し狙いがずれていたみたいだったし」

「そ、そうだったのか？ でも、元の体に戻ったからって、ちゃんと狙えるもんなのか？」

落ち着きを取り戻し、コナンは再びソファに座る。

「大丈夫よ。私は組織にいた時に、銃も扱っていたから」

「えっ……………そうなのか？」

「あら、最初の二セ札の事件で私が撃つたの、覚えてないのかしら？」

「……………あ、ああ。確かに、そうだったな。でも……………」

コナンが言葉に詰まる。哀は自分が守ってやりたいと思う半面、昨日の突入時にウォツカを撃つたことより、組織を相手に自分と哀を双方守ることの難しさを実感していたのだった。

（でも、銃を使うんだったら、オレが持った方が……………）

そう思ったが、二セ札事件で哀が手慣れた様子でH&Amp;K

P7を発砲した情景を思い起こす。

（うーん……あれだったら、確かにオレより灰原が持ってた方がいいか……でもそれじゃ、オレが守られてるみてえだな……）

コナンとしては、複雑な思いだった。

「もちろん、撃つのは最終手段。できることなら、使わずに済みますわ」

コナンの葛藤を知ってか知らずか、哀が付け加えた。

「あなたにも、万一に備えて試作品を渡しておくわ。明日、使うのかどうか、考えておいて。おすめはしないけれど、最初小さいままで乗り込んで、必要になったら使うという手もあるわ。そのために、博士の伸縮自在スーツがあるのだから」

伸縮自在スーツ——着用者の体格に応じ、自動的にサイズを変える服であり、アポトキシン4869が作用した時のように体格が急激に変化した場合にも対応できる。決戦に備え、哀が博士に開発を依頼していたものだった。

「もう一度確認だけれど。とにかく、自分の命を最優先して。昨日、私がウォッカに見付かった時に助けてくれたことは感謝しているけど、今度同じような場面に遭って、2人とも助かるなんていう幸運は、期待しない方がいい」

「ああ、わかった。けど、そっちこそ忘れんなよ。オメーは、オレが守ってやるって言ったことを」

その言葉に、哀は一瞬沈黙する。

「……そうだったわね。私の背中では頼んだわよ」

内心呆れつつも、そう答えた。

（まあ、止めても無駄よね。本当、無茶ばかりしようとするんだから。でも、だからこそ私は、彼に惹かれたのかしら……）

第5章：対決（前書き）

血が出てきます。苦手な方はご注意ください。

第5章：対決

「で。結局、薬は使わないで乗り込むわけね」

翌日、決戦前の最終確認が終わった後。元の体に戻った哀は、FBI駐在地の入口前で、コナンを見下ろす恰好となつて言った。

「ああ。オレは今まで試作品を何度か使つてて今回の薬でどのくらい元の体に戻っていられるのかわからねえし、元の体に慣れてきたところで急にコナンに戻っちまったら、それこそ命取りになるからな。それに、前の鉄格子の件もあるし、子供の体の方がいろんなところに潜り込むのに有利なんじゃねえか？」

「まあ、その可能性はあるけど」

「ま、念のため解毒剤は持つて行くな」

コナンはズボンのポケットを叩き、そこに薬があることをアピールする。なお、コナンも哀も博士の発明品の服を着ていたが、その外観は普段着と何ら変わりなかった。今、哀の着ている白衣を普段着と考えれば、だが。

「薬はこれまで通り即効性だけど、体が大きくなつた直後は心臓に負担がかかるから、余裕のある時に使った方がいいわよ」

「そつだな」

2人が話し合っていると、1台のメルセデス・ベンツがそばへ来て止まった。

「さあ、哀ちゃん、コナン君、乗つて。あなた達は、私が守るから」
ジョディが窓から顔を出して言った。

（哀ちゃん…… 本当に、体が大きくなるなんてね……）
ジョディは内心驚きつつも、声には出さなかった。

車内で特に会話することもなく、3人は一昨日と同じ組織本部入口近くに到着する。

（これで、本当に最後…… 彼らを取り逃がして拠点を移される前に、

今日ここで決着を付ける……)

車から降り、ジョディの後ろでFNハイパワーを握りつつ、哀は思いを巡らせる。

(ちよつと前まで、私も組織の一員だったのよね……もし抜けていなかったら、工藤君と対決していたのかもしれないわね……)

哀もまた、コナンとの奇妙な縁を感じていた。

(彼らを壊滅させたとして、元組織の一員で、何人も死に追いやつてきた私が、平和な日常を送るなんて許されるのかしら……)

銃のマガジンを外し、装着弾数を確認する。コナンが1発消費したため、残りは12発であった。再度、哀はマガジンを戻す。

(薬のデータは、まだ残っているのかしら……元の体に戻れないとなったら、工藤君は私を恨むでしょうね……)

ネガティブな思考に陥っている自分に気付き、哀は頭を振った。

(私ったら、今更何を考えているの……工藤君に昨日、余計なことは考えるなつて言つたのに……今、考えることではない……今は、彼らを倒すことだけ……)

銃を握る手に力を込める。哀の頭を振った動作を見て、コナンは思ふ。

(灰原……かつての仲間を殺すかもしれないことに、抵抗があるのか……)

今回の作戦では、組織員が投降してきた場合にはその身柄を拘束することとし、抵抗した場合も原則生きたまま確保することになっていたが、相手の出方次第では発砲を含む強硬手段もやむを得ないとしていた。

(オレだって、二度と殺したくないけど、向こうも武装してるからな……また、ウォッカの時みたいに……)

弱気になっている自分に気付き、コナンも首を振った。

(今からこんな弱気でどうする。灰原はオレが守るんだろ？ だったら、やらなくちゃな)

そして、コナンは工場の入口に視線を移した。

合図と共に、先発するキャメルが扉を開ける。すぐさま、建物内から銃声が鳴り響いた。キャメル他、3人の捜査官は素早く入口脇の棚の陰へと引く。ジョディ達も思わず、木の陰に身を潜める。

（もう、この場所を外に知られてもお構いなし、なりふり構わずつてこと？）

ジョディが歯を食いしばる。

（いえ、このことが外に知れて騒ぎが大きくなったら、むしろ私達FBIが困るわ。日本警察に断りなく捜査しているのだから……と
いって、今から許可を取ってでは組織を取り逃がしてしまう。もう、後には引けない……）

ジョディが再び入口を窺う。哀もそれにならうが、隣にいるコナンの腰が引けていることに気付いた。

「どうしたの？ 怖気づいた？」

「……んなわけ、ねえだろ」

気を取り直し、コナンは麻酔銃をスタンバイし、一歩前に出た。

「先発隊が飛び込んだら、私達も中に入るわ」

ジョディは覚悟を決めて言った。

キャメルが入口脇から発砲し、中の様子を確認する。一時的に銃声が止んだのを見るや、建物内に入った。他の捜査官も後に続く。

「さあ、行くわよ」

ジョディが入口へ小走りで向かった。哀とコナンもそれに続く。中へ入ると、先日突入した際と同様の構造が目に入る。ただ、入って10メートルほどのところで、組織の者と思われる男が1人、手を上げていた。すぐそばにはFBI捜査官が2人おり、1人は組織員に向けて銃を構え、もう1人は無線機を取り出して連絡していた。

（すぐに対応できるよう、麻酔銃は構えたままの方がいいな）

背中から汗が流れるのを感じつつ、コナンは周囲の状況に神経を

尖らせた。

ジョディ達は、先日の鉄格子の場所まで辿り着いた。コナンが鉄格子を見ると、今回も中途半端に開いた状態となっている。

（結局、ちゃんと閉まらないようになっていたのか）

ジョディはP226を握り直し、鉄格子前の壁を背にし、その向こうを窺う。誰もいないのを確認し、ジョディは鉄格子の先ではなく、正面を指差し、コナンと哀の側へ振り向いた。

（この鉄格子は、開けずに行くわよ）

哀とコナンはその意図を察し、無言で頷いた。ジョディは鉄格子の向こうから目を切り、歩き始める。コナンと哀がそれに続く。ふと、コナンが右側通路を覗くと、通路の角でレミントンM24SWの銃身を左手で持ち、右手の人差し指を引き金にかける、黒キャップにゴーグルの男——コルンの姿が——！

「先生伏せて！！」

コナンが叫んだ直後、銃声が響く。ジョディは前方に倒れ込むように転がる。300Win-Mag弾が服の背中側をかすめていった。コルンは再度、スコープ越しに倒れ込んだジョディに照準を定め、引き金に指をかける。だが、それが引かれる前に、哀が格子の隙間から発砲していた。

「くっ……！！」

銃声の直後、9mmパラベラム弾が左肩に命中し、コルンが怯む。

（よし、これなら！）

続けざま、コナンが腕時計型麻醉銃を発射する。

「うっ……」

コルンの額に針が命中し、そのまま仰向けに倒れた。

「先生、大丈夫？」

銃を構えて前方を警戒したまま、哀が言う。ジョディは体を起こす。

「ええ、弾は背中をかすただけよ……それより、あの男の確保は

後回しになってしまっわね……」

「多分、今すぐ確保しておいた方がいいよ。ちよつと待つてて」

コナンが格子の隙間を抜け、身に付けていた伸縮サスペンダーを取り外す。そして、レバーと格子の1つで輪を作り、ボタンを押した。サスペンダーが縮んでレバーが下がり、鉄格子が開いていく。

ジョディと哀が合流するのを待ち、コナンはコルンにサスペンダーを巻き、ボタンを押した。コルンの体が縛り付けられる。ジョディは無線機を取り出す。

「こちらジョディ。A-30地点で男を確保、眠らせた状態で縛りつけたわ。回収をお願い」

『こちらジェイムズ、了解した。すぐこちらから人を向かわせよう』
再び、ジョディを先頭に通路を進んでいく。

（それにしても……哀ちゃん、やるわね）

コルンの左肩にできた銃創を思い出しつつ、ジョディは内心舌を巻いていた。

3人が分岐点まで進むと、右手の通路でがっしりした体型のFBI捜査官——アンドレ・キャメルが、腹部から血を流し、壁を背にもたれかかっていた。

「ちよつと。あなた、大丈夫？」

返答はない。ジョディがキャメルに向かって歩き出すと、銃声と共に足元で火花が散った。その場の3人が身構える。

「あら、またあなたと会うなんてね」

金色のロングヘアーをなびかせた女——ベルモットの姿が、部屋の中より3人の前へ現れた。右手に持つワルサーPPKの銃口からは、まだ硝煙が拡散しきっていない。

「ベルモット！」

ジョディが叫び、シグザウエルを構える。哀もベルモットに銃口を向ける。

「その男なら大丈夫よ。私を捕まえようとしたから仕方なく撃つた

けど、一応急所は外しておいたから」

言いながら、ベルモットは銃を下げ、視線をコナンに送る。

(Cool guy……やっぱり来たのね……)

ジョディがベルモットに向けて発砲する。ベルモットは銃を下げたまま、体をひねる動作だけで9mm弾をかわす。

「あらあら、ご挨拶ね。私は銃を下げてるじゃない。盗聴器だつて送つてあげたんだし、少しぐらい私の話を聞く気はないの?」

ジョディは再びベルモットに向けて銃を構え直す。10メートルの距離を保ったまま、睨み合いが続く。そうしている間にも、4人の耳には遠方より銃声や切迫した人間の叫び声が響いてくる。

「哀ちゃん! ここは私が抑えるわ! コナン君とこの先、任せていい!？」

銃を構えた姿勢のまま、ジョディが言った。哀はFNハイパワーを構えたまま、ベルモットを見る。視線が合う。いつものように、底知れぬ笑みを湛え、その雰囲気飲まれそうになる。

やがて、哀は銃を下げた。そして、

「わかったわ。任せて」

ジョディに向けて短く言った。

「だ、大丈夫かよ?」

「いいから、行くわよ」

哀は低い声で言い、ジョディに背を向け歩き出した。やむを得ず、コナンも哀に続く。

「さあ、決着を付けましょう! ベルモット!」

2人の足音が遠ざかったのを確認し、ジョディが言った。

「あら、何か勘違いしているみたいね」

ベルモットは、やはり銃を下げたままで言う。

「私は別に、あなた達に本気で齒向かう気はないわ。捕まるのはゴメンだけど、この先は大人しくするから、見逃してくれない?」

「そんなこと、できるわけないでしょ!？」 さあ、銃を捨てなさい

！」

「そう……なら、仕方ないわね……」

ベルモットは静かに両手を挙げ、視線を床に落とす。床の様子を確認し、一步後退したところで右手を開く。ワルサーが手から離れ、床に落ちた。直後、ジョディとベルモットの間の床の溝から、白い煙が噴き出した。

「なっ！？」

突如として視界が遮られ、ジョディは戸惑う。ジョディは後方を確認するが、そちらの床からも煙が次々と噴き出していた。再度ベルモットの方を向くと、顔全体を覆うマスクを被ろうとしているのが見えた。

「じゃあね、お嬢さん。また、どこかで会いましょう」

煙の向こうにベルモットの姿が見えなくなり、マスクごしのくぐもった声だけがジョディの耳に聞こえてくる。

「ま、待ちなさい！ ベルモット！！ うっ……ゴホッ、ゲホッ……」

ベルモットの足音は、ジョディのいた右手側を通り過ぎていく。ジョディはその音を頼りに追跡しようとするが、煙を吸い込んだこととでむせてしまい、思うように体が動かない。

（何よ、これ？ 催涙ガス？）

左手で口元を押さえる。ジョディは振り返って壁に右手を付き、どうにか体を支えるが、ベルモットの位置はすでに把握できなくなっていた。ふと、ベルモットの足音が止まる。

「あ、そうそう。あのCool guyに伝えておいて。『また会えて嬉しいわ。死んだ人と共に元の体に戻りましょう』って」
「うっ……くっ……！」

ジョディに返事をする余裕はなく、体が倒れないよう支えながら、ベルモットの足音が再度遠ざかっていくのを聞いているだけであった。

3分ほど経っただろうか。煙の吹き出しはすでに止まり、ジョディはどうか動けるようになっていた。周辺には、気を失ったキヤメルだけがいる。

「こちらジョディ。A-31地点でキヤメル捜査官が負傷中。急いで回収をお願い」

『了解した。だが、組織員の確保やこちらの被害状況の確認で、すぐには手が回らない状態だ。手配した人員がそちらに合流するまで、しばらく待っていてくれ』

「……了解」

やりきれない気持ちのまま、ジョディは無線を切る。

（また、逃がしてしまった……）

ジョディの脳裏に、父が死んでいた時の情景が浮かぶが、すぐに頭を振ってその記憶を振り払う。

（今はそれより、あの2人よ。早く合流しないと）

右手で身に付けた追跡眼鏡のスイッチを押し、コナンと哀の現在位置を探る。

（2人がどんどん離れていくわ……追い付けるかしら）

応援を待つ間、ジョディは焦燥を募らせていった。

（ベルモットの奴、逃げたのか？）

コナンは周囲を警戒しつつも、ジョディの追跡眼鏡を通して聞ける会話に耳を傾けていた。

（あいつ、灰原のことは諦めるって言ったり、今回は盗聴器を送ってきたり……味方なのか？）

しばらくベルモットのことを考えていたコナンだったが、近くで物音がしたため思考を中断し、再び意識を近傍に戻す。また、FBI捜査官が1人が組織員を拘束し、工場入口方面へ向かっていった。

コナンと哀がジョディと別れてから、15分ほど経過していた。2人は建物内を順に調べ、ネットワークに接続できるコンピュータを探していたが、まだ発見できていなかった。

あちこちで銃声や叫び声が聞こえるのを耳にしつつ、哀は銃を構え、建物内を進んでいく。コナンは、後方を警戒しつつ、哀の後を付いて行く。

（灰原の奴、こんな状況なのに、肝が据わってるよな）

物音がするたびに、コナンは心臓を鷲掴みにされたような気持ちになるが、哀の表情を時折覗き見ても動揺は読み取れない。哀は通路端の細い階段を見て、後ろのコナンを振り返り、無言で階段側を指差す。コナンはそこを上がるという意図を察し、やはり無言で頷いた。

（今は、私が彼を守らないとね……そのために、元の体に戻っているのだし）

2人が階段を上がり切ったところで、ひときわ大きな扉が見えた。哀はその扉に近付いて小さく開き、中の様子を確かめる。

「入りました」

コナンも哀に続いて中に入る。部屋の中は無人で、机の上にコンピュータが置かれている。哀は端末の前の椅子に座り、銃を置いた。「今から薬のデータを探すから、あなたは外を見張って」

「わかった」

コナンは哀の置いたハイパワーを手にする。

「工藤君、残りは11発よ。いざという時は……」

「あ、ああ。そうだよな……」

（また、これを持つことになったか……できるのなら、使いたくないけど……）

鼓動が速まるのを感じつつ、コナンは部屋の入口側を向き、銃を構えた。哀はコンピュータを起動し、バーボンのアカウントでログインする。

（以前と同じ場所に、アポトキシン4869のデータはあるかしら

……)

杯戸シティホテルで、ピスコのノートPCよりアクセスしたディレクトリを探す。しかし、哀がコマンドを入力すると、ディレクトリが存在しないというエラーメッセージが表示された。

(ない……！？ データを消したのか、それとも場所を移したのか……いえ、バーボンは私と工藤君の正体に気付いていたみたいだし、当然アポトキシン4869のことも調べていただろうから、まだデータは残っている筈……でも、今から探すとなると、時間が……) いつまでもここで安全に作業できる保障はない。一刻も早くこの場を去りたいが、組織のメインシステムの破壊をしなくてはならない。間に合うだろうか、組織は壊滅できても薬のデータが手に入らないのではないか——哀の脳裏に不安がよぎり、後ろのコナンを見る。

「灰原。組織の壊滅と薬のデータなら、組織の壊滅を優先してくれ」
哀の動作を視界の隅に捉え、銃を構えたままコナンが言った。

「……いいの？ 元の体に戻れなくなっても……」

「さあな……ただ、このままオメーと一緒にするのも悪くない、なんてな……」

言った後、コナン自身驚く。

(な……何でオレ、こんな恥ずかしいこと言ってんだ？ 今はそれどころじゃないってのに……)

かぶりを振り、再び視線を部屋の入口に戻す。哀もディスプレイを向いて作業に戻った。

(私だって、どれだけそれを望んだことか……でも、あなたは元の体に戻らないと。あなたを元に戻すのが、私の役目……)

「それじゃ、先に組織のネットワークを破壊するわ。気を抜かないで」

「ああ、わかつてる」

哀はファイルを白衣の左ポケットより取り出し、机の上に開く。そこに書かれている暗号メモに目を通しつつ、その手順通りに作業

を開始した。

キーボードを叩きつつ、哀は物思いにふける。

（かつて私のいた組織を、私の手で滅ぼそうとしている……たとい悪の組織であろうと、私はそこで育ってきた……複雑な気分ね）

また、メモに目を通す。今のところ、その手順通りで手違いは発生していない。

（自分の親を殺すのって、こんな気分なのかしら）

不意に1人の男——ジンのことが頭に浮かぶ。

（どんなに残忍で非道な人間だろうと、私を見守ってくれていたことには変わりないのよね……その男を、連邦警察に売ろうとしている……）

ジンと過ごした、浅からぬ日々が思い出される。ふと、哀は自身の手が止まっていることに気が付いた。

（いけない、何を感じ傷的になっているのかしら……もう、私は組織の人間ではない……今は、工藤君達の味方よ……それに、あの男はお姉ちゃんの仇……私の敵なんだから）

気を取り直し、作業を再開した。

（大丈夫か、アイツ……）

コナンは、銃を構えて扉側を警戒しつつも、時折哀の様子に気を配っていた。

「工藤君、外はどう？」

「ん、ああ……今のところ、近くに人が来る気配はないな」

「こっちは大丈夫よ……あと少しだから……」

そう言われては、コナンも何も言えなかった。

やがて、哀は大きく息を吐いた後、無線機を取り出した。

「こちら灰原。システム破壊完了。外からもアクセスできるようになったわ」

『了解。では君達2人は、できるだけ早くそこから脱出してくれ』

ジエイムズから返事が来る。了解と言い、哀は無線を切る。

「さあ、次は薬のデータよ。もう少し見張っていて」

「了解」

薬のデータ保存場所の見当が付かず、途方に暮れていた哀だったが、手近なディレクトリに「APTX4869」で検索をかけると、3秒と経たないうちにヒットした。

（あ、あれ？ こんなところにあつたの？ それとも、ネットワークを破壊した効果かしら）

いささか拍子抜けしたが、気を取り直して哀はデータの保管場所にアクセスすると、パスワードの入力を求められた。

「工藤君、前に入力したアポトキシン4869のパスワード、何だったかしら」

「ああ、シェリングフォード>Shellingford<だ。つづりは――」

コナンの言葉通りに哀が入力した。しかし画面に表示されたのは「Password Incorrect!」>パスワードが間違っている<の文字。

「ダメよ、パスワードも変えられてるわ。どうしたら……」

「なあ灰原、組織はパスワードをかける時、ホームズ関係のにしたのか？」

「さあ、そこまでは……ただ、パスワードを変更する時は、前と関連の深いものにすることが多かった気がするけど」

「うーん……しかしホームズ関係といつても……」

コナンは銃を構えたまま、パスワードになりそうな単語を考える。（あれ、そういえば……確かさつき、ベルモットが元の体がどうか言ってたよな……まさか、さつきの言葉にヒントがあるのか？）

――あのCool guyに伝えておいて。『また会えて嬉しいわ。死んだ人と共に元の体に戻りましょう』って

（また会えて嬉しい……ホームズだったら、『空き家の冒険』だろうな。それで死んだ人なら、あの人だけど……）

「じゃあ、試しにやってみてくれ。ロナルド・アデア>Ronald Adair<」

哀がキーを叩くと——開いた。かつて見慣れていた化学式が、眼前に映し出される。

「工藤君、ビンゴよ。あとは、データを持ち出すだけね」

言いながら、MOディスクをドライブに挿入した。ディスクの回転音が室内に響く。

ほどなくして、データのコピーが完了し、哀はディスクを取り出した。

「さあ、これで薬のデータは手に入ったわ。あとはFBIに任せて、脱出しよう！」

「よし！」

コナンは再びFNハイパワーを哀に渡そうと振り返った。しかしその時、

「シェリー……ここにいたのか……」

腰より下まで伸びた銀髪に、黒ずくめの服と黒い帽子の男——ジンが、全身より殺気をみなぎらせ、部屋の入口に立っていた。

「……ジン！」

「何!？」

コナンが再度振り返り、ジンに向けて銃を構える。

「そしてそのガキ……工藤新一だな……なるほど、工藤とシェリーと、FBIが組んでやがったのか……どうりで、我々が追い詰められてしまったわけだ……」

ジンは左手でベレッタM92を構えるが、その姿勢にはいつものような安定感がない。体のあちこちに銃創や流血の痕がある。

「ジン、もうその傷は致命傷よ! 無駄なことはやめなさい!」

哀が見たところ、ジンは肺を撃ち抜かれているようだった。ひゅ

うひゅうと、おかしい呼吸音が聞こえている。

「フン……あの忌々しい赤井の脳天にはさっきぶち込んでやったが、奴に撃たれてこのザマだ……我々も、FBIにここまで踏み込まれてしまつては終わりだろう……だがシェリー、その前に貴様を殺しておかなくてはな……」

ジンが、ゆつくりと近付いてくる。だが、その足取りはあやふやで、途中で銃を持つ左手が下がり、右手で胸を押さえる。

「我々を裏切った者がどうなってきたか、おまえはよく知っている筈だ……俺が死ぬ前に、おまえも送つてやろう」

それでも、ジンは再びベレッタを哀に向ける。

「やめろ！」

コナンが引き金に指をかける。

「ダメよ！ あなたは撃つてはダメ！」

哀が大声で制止する。哀がしゃがみ、コナンの肩を掴み、力を込める。

「灰原？」

銃を構えたまま、コナンは視線を哀に向ける。

「工藤君、奴の狙いは私よ！ このデータを持って、あなたは逃げなさい！」

哀はコナンの上着の内ポケットにディスクを入れる。

「ほう、そんなに工藤が大事か……ならば、先に工藤から逝かせてやろう」

「くっ！」

再び、コナンは視線をジンに戻す。しかし、コナンが狙いを定めるより早く、ジンのベレッタの引き金が引かれ、辺りに銃声が響く――

「この近くの筈なんだけど……」

ジョディは、追跡眼鏡でコナンと哀を探し、発信器の示す近くの位置まで来ていた。周囲を見回していたその時、上の方から銃声が出た。

「いけない！」

音のした方を見上げると、階上でジンが銃を構えていた。

「うつ、ぐっ……！ はあ、はあ……」

思わず目を閉じたコナンが、再び目を開けると、哀が眼前でうずくまっている。白衣の背中には弾丸の貫通した穴があり、血が流れ出していた。

「は、灰原！？」

「そこまでして、工藤をかばうか……死ね、シェリー！」

次々に発砲し、哀の体に命中していく。9mm弾の1つが哀の体を貫通し、コナンの頬をかすめていく。

「灰原！！」

哀の体がよろめき、コナンの左側で尻餅をつく。

「さあ、お別れだ……」

ジンはもう一度哀に狙いを定め、引き金にかけた指を曲げ――

銃声と共に、ジンの体が前のめりになる。ジンの体に新たな穴が空き、血が噴き出していた。そのまま倒れそうになるのを堪え、ジンが振り返る。そこには、ジンに向けてシグザウエルP226を構える、ジョディの姿があった。

「きっ……貴様……！」

ジョディに向け、ベレッタを構えようとする。だがそれより早く、ジョディはジンに向けて二度発砲する。命中し、ジンの体が今度こそ、仰向けに倒れた。

「……大丈夫？」

銃にそえていた左手を離し、無傷のコナンを見て幾分安堵したジ

ヨディだったが、すぐそばで哀が倒れていることに気付き、顔色が変わる。

「おい灰原！　おい！！」

コナンが銃を置き、哀を抱きかかえる。

「く、工藤君……大丈夫よ……博士に、解毒剤の試作品のデータは教えてあるわ……あとは、そのデータを博士に渡せば、あなたは、元の体に……」

哀は薄く目を開き、コナンの顔を見る。哀の血に濡れた左手が動き、コナンの右肩を掴む。

「しっかりしろ！！　死ぬな！！　くそつ、オレが守ってやるって言ったのに！！　何でおまえがかばうんだ！！」

「だって……あなた言ってたじゃない……自分の運命から逃げるなんて……組織に齒向かい、裏切った時点で、私がこうなることは決まっていたのよ……最初から、わかっていたことよ……だからせめて、大切な人を守りたいって……」

言いながら、哀の顔が青ざめていく。哀の背や上腕から流れた血が、コナンの服を赤く染めていく。

「くっ、もういい喋るな！　すぐ病院へ連れてくから、じっとしてろ！！」

「でも……最後に……あなたの役に立てて……よ……か……」

哀の左手が、コナンの右肩から落ちた。コナンの両腕にかかる重みが増す。

「は……灰原！！　灰原ア！！」

その時、部屋の外から轟音がした。コナンが顔を上げ、音のした方向を見ると、壁や天井のあちこちに穴が空き、瓦礫となって崩れている。また、今度は反対の方から爆音がした。

（くそつ……奴ら、ここを全部爆破するつもりか！？）

再び、視線を哀に戻す。が、ジョディに肩を掴まれる。

「ここはもう危険よ！　早く脱出しないと！」

「先生！　早く灰原を！」

しかし、ジョディは哀の全身を一瞥した後、無言でコナンの右腕を掴んで部屋の外へ向かって駆け出した。哀の体が、その場に投げ出される。

「せ、先生！？ あいつを連れていかないと！」

コナンの言葉に、ジョディは振り返らず言う。

「ダメよ！ もうあの出血では助からないわ！ それに、哀ちゃんを抱えてたら、私達も逃げ遅れるわよ！」

「違う！！ あいつが死ぬわけがない！！ 離せ！！」

ジョディの手を振り払い、再びコナンは部屋の中の哀へと駆け寄った。

「ちょ、ちよつと！ コナン君！」

ジョディは振り返り、コナンを見る。コナンは哀の上体を起こし、運ぼうとする。しかし。

（く、くそつ！ 今のオレじゃ、元に戻ってる灰原を運べねえ……今から薬を飲んで、間に合うのか！？）

ポケットの解毒剤を探るが、その間に、今度は真上から轟音がした。コナンが上を見ると、無情にも、幅1メートルはあるうかというコンクリート片がコナンと哀めがけて降り注いできた。

（し、しまった……）

避けられるのか――

しかし避ければ哀に直撃する――

どうする――

コナンは、咄嗟に体を返し、哀の上に覆い被さった。直後、背中と右腕に激痛を超えた衝撃が走る。

（うつ……く……！ ま……まだ……）

体全体が痺れ、視界に火花が散りつつも、コナンはどうにか首を回し、すぐ下の哀の顔を見る。哀の表情は先ほどと変わらず、青ざめて目を閉じたままであった。

(だ……大丈夫……だ……——)
しかし、それで限界だった。コナンの意識は、闇に飲まれていった。

第6章：帰還

目を開けると、そこは見知らぬ場所だった。

（あれ、ここは？）

コナンは視線を周囲に巡らせる。右手側に大きな窓と半分までかったカーテンがあり、そこから部屋の中へ西日が差し込んでいるようだった。その時、

「気が付いた？ あなたはあの後、病院に運ばれたのよ」

左側からジョディの声がした。

「ジョディ先生？」

声のした方向へ体を向けようとしたが、右腕や背中など、あちこちから激痛が走る。

「イテテ……」

コナンは思わず背中を少し丸める。右腕に目をやると、包帯が巻かれ、首からぶら下げられている。コナンの体は、病室のベッドの上で上体を起こした状態にあるようだった。

（こりや、骨にヒビが入ってるどころじゃねえな）

右腕から視線を切り、ゆっくりと左側に体を向ける。ジョディは丸椅子に座り、コナンの様子を見ていた。

「まったく……爆発が起きてたっていうのに、あの子を助けようとするから……」

「そうだ先生、灰原は？ あいつも一緒に運ばれたのか？」

ジョディの表情が曇る。その時、何者かが病室のドアを開けて入ってきた。

「ボウヤとあの茶髪の少女は、俺が病院まで運んできた」

（——！）

黒いニット帽に、右頬の火傷の痕——赤井秀一だった。ただ、いつもと違い、ニット帽の下に包帯を巻いている。

——あの忌々しい赤井の脳天にはさつきぶち込んでやったが、奴に撃たれてこのザマだ……

コナンの脳裏にあの時のジンの言葉がよみがえり、目を見開いたが、赤井は淡々とした様子で続ける。

「あの少女の出血は普通なら助からない量だったが、どういうわけかまだ生き延びている……もしかすると、体が急激に縮んだことと何か関係があるのか……ただ、撃たれて大量に失血したショック状態で、依然として危険に変わりはない」

「それで、今あいつは!？」

哀への心配が勝り、赤井への疑問はひとまず置いた。

「集中治療室だ。まだ、手術が続いている、………づっ!」

不意に赤井が左手で額を押さえ、よろめいた。

「シユウ!? 大丈夫!？」

ジョディは思わず立ち上がり、赤井に近寄る。

「ああ……だが、さすがに頭に一発もらったのはこたえるな……」

赤井は右手を少し前に出し、ジョディを制する。

「あなたも少し、休んだら?」

「ああ、そうさせてもらおう」

赤井が部屋を出ていく。部屋に沈黙が戻った後、コナンは口を開いた。

「あいつ、あの時オレが狙われたのに、オレをかばった……オレが守ってやるって言ったのに、何で、あいつが……」

ジョディは再び椅子に座る。

「コナン君。今、悔やんでいても仕方ないわ。手術が成功して、哀ちゃんが戻ってくるのを祈りましょう」

「……………」

(くそっ、なんだってあいつは、あんなことを……)

コナンは、哀が撃たれた後の光景を呼び起こす。

——だからせめて、大切な人を守りたいって……
——くつ、もういい、喋るな！　すぐ病院へ連れてくから、じっと
してる……！

——でも……最後に……あなたの役に立てて……よ……か……

大切な人？　大切って………　オレが、か？

（オレが、大切……？　何で？　守ってやるって言ったから……か
？）

だが、それだけであるとも思えない。

（いや、ちよつと待てよ……）

コナンは、さらに記憶を探る。

——何よもう！　モテモテじゃない？

——ああ、歩美ちゃんか

——それともう一人……

——え？

——は・い・ば・ら・さん……

——ええっ！？

——彼女、今日新ちゃんの顔10回は見つめてたわよ！

——ハハ、どーせ自分が作った薬の被験者の成長過程でも監察して
たんじゃねーのか？

——バカね！　女の子が男の子を見つめるのは、その子の顔に何か
付いているか、その子に恋してる時って決まってるんだから？

……え！？　そ、そういえば……でも、これって……

（まさか……いや……）

——私ホントは、あなたとお似合いの18歳よ……

――えっ？

――なーんてね

あ？

――事が落ち着くまでこのカッコであの子の家に居候してあげるから……

――なあ灰原、何でもおまえそこまでしてくれるんだ？

――っ！

――解毒剤ができたんならおまえだっですぐにでも元の体に戻りたいんじゃないのか？

――………バカね、あなたの正体がバレたら私にも火の粉が飛んで来るかもしれないから、協力してあげてるんじゃない！

あ？

――彼女が羨ましいわね

――あん？

――………何でもないわ。忘れて

ああ？

――逃げるみたいで、癪だったから

――あん？

――逃げるって、サメからか？

――バーロー、この海水浴場にサメなんていやしねーよ

――サメじゃないわ………相手はイルカ………そう、海の人気者………暗く冷たい海の底から逃げて来た意地の悪いサメなんかじゃとても歯が立たないでしょうね………

――おい、何わけのわかんないこと言ってるんだ？

——イルカじゃったら、サメの方が強いんじゃないのか？
——……あなた達疲れるからあっち行つててくれない？

あああああああ！！？

（アイツ……まさか、そんな……）

「ちよつと！ コナン君、大丈夫？」

ジョディの声で、コナンの意識は急速に現実へ引き戻される。

「……え？ あ、うん……」

知らぬ間に、大声を上げていたようだった。

「まだ、どこか痛みがひどいの？」

「ううん、大丈夫……」

首を振った後、コナンは顔を上げ、ジョディの顔を見た。

「それより先生、ちよつと1人にしてくれない？」

「え？」

立ち上がったいたジョディは、少しコナンの表情を見る。

「いいけど……あなたも怪我人なんだから、無理しちゃダメよ？」

「うん……」

ジョディも部屋を出ていった。再び、コナンは哀のことを考える。

（あいつ……オレのことが好きだったっていうのか？ そんな筈は……）

しかしコナンは、頭でどれだけ否定しても、心の底では哀の想いを認めざるを得なかった。あの極限状態で、好きでもない人間をかばおうとするだろうか？ コナンも、以前蘭が連続殺人犯に刺されそうになった時、思わず自分の体を盾にしていたことがあった。根底には、「蘭を守りたい」という感情があった。

（あの時、灰原じゃなくて蘭と一緒にいたら……オレは、蘭が撃たれないようにかばうよな、絶対……灰原はオレをかばった……ってことは、本当にオレのことを……）

コナンは、これまで証拠を挙げて犯人を追いつめてきたのとは逆

に、哀の想いを突き付けられ、追い詰められた気分だった。対して自分は、今まで哀にどんな態度を取ってきたのか。哀には、蘭に対する気持ちを正直に告げてきた。蘭の話をする時、彼女はいつもどこか寂しそうな目をしていなかったか。それでも自分の蘭への想いを知り、一歩引いて、身を裂かれる思いで助言していたのではないか。

（くそつ、オレはあいつに、今まで何てことを……）

後悔しようにも、謝ろうにも、今ここに哀はいない。

（灰原……絶対死ぬなよ……オレを置いて勝手に逝きやがったら、一生おまえを許さないからな）

第7章：回復

「もう、コナン君ったら。何で爆発事件の現場に行っていたのよ？」
「ご、ごめんなさい……面白そうな建物だったから、探検したくな
って……」

世間的には、組織本部へのFBI突入および爆破事件は、薬品の
廃工場で起きた爆発事故ということになっている。コナンが入院し
たことで保護者にも連絡が行き、蘭と小五郎が見舞いに来ていた。
「まったく、親戚と旅行に行くって聞きゃ、あんな場所に行つてやが
つて。ちつとは自分の身の危険を考えろ。心配するだろうが」

「うん……ごめんなさい」

コナンは神妙に頷いた。ひとしきり、蘭と小五郎による小言が続
く。やがて。

「あれ、そういえば哀ちゃんは一緒じゃなかったの？ 一緒に旅行
に行くって言つてたけど」

蘭が思い出したように言う。

「えっと……灰原は、もうちょっと親戚の家にお邪魔するつて言っ
て、ボクだけ先に帰つてきてたんだ」

咄嗟に嘘を吐きつつ、コナンは哀のことを思い出し、顔を曇らせ
る。

（くそつ、手術は成功したつていうのに……何でアイツ、目を覚ま
さないんだよ……）

「コナン君、大丈夫？ まだ、具合が悪いの？」

コナンの沈んだ表情を見て、蘭が心配そうに言う。

「あ、だ、大丈夫だよ！」

コナンは、無理して笑顔を作ろうとする。

「そう？ もう、無茶しないでね」

「う、うん」

コナンの病室を後にし、ふと蘭は思い出す。
(そういえば、新一はどうしてるんだろう……新一も無茶してない
といいけど)

事件の決着が付きそうだという電話以降、連絡をよこさない新一
が心配になってきていた。

「どうやら、無事決着したようだな」

優作の言葉に、コナンは病室のベッドの上で体を起こしたまま口
を開く。

「ああ、これでもうほとんど終わった筈だけど……」

優作と有希子、博士の3人が見舞いに来ていた。3人共、コナン
が負傷したことを責める雰囲気はない。

「あとは、哀君じゃな。早く意識が戻ると良いのじゃが……」

博士が、心配そうに言った。

「ごめん、博士……あいつはオレが守るって言ったのに、危険な目
に遭わせちゃった……」

コナンは俯く。

「新一、あまり自分を責めるものじゃない」

優作が言ったのに続き、有希子も口を開く。

「そうよ、新ちゃん。あなたはこれまで哀ちゃんを立派に守ってき
たじゃない。あなたが自分自身を責めるのは、哀ちゃんだって望ん
でないと思うわ」

「でもあいつ、手術は成功して、もう大丈夫な筈なのに、まだ目を
覚まさないんだ……もしかしたら、このまま意識が戻らないんじゃない
かって……」

コナンが沈んだ声で言う。

「新ちゃん、あんまり思い詰めないで。先生は大丈夫って言ったん
だし、新ちゃんがこれだけ帰るのを待ってるんだから、哀ちゃんが

新ちゃんを置いていくわけじゃない。それより、哀ちゃんが目を覚ましたら、笑顔で迎えてあげなくっちゃ」

「……………」

「ね？ 今は信じて待ちましょ？」

有希子が、柔らかな笑顔で言う。

「……………そうだな」

コナンの顔が、幾分明るさを取り戻した。

（くそっ、まだ起きないのかよ）

どうにか歩けるようになったコナンは、博士に頼んで推理小説を持ってきてもらっていたが、哀の様子が気にかかり、毎日哀の病室を訪れていた。

（頼む。早く、目を覚ましてくれ…………）

コナンが祈る気持ちで目をきつく閉じたその時、シーツが擦れるような物音がした。

「灰原？」

コナンは目を開き、ベッドの上で眠る哀に近付いた。

志保、志保…………

（あれ？ 誰か、呼んでる…………）

「志保。何ボーっとしてんだよ？」

「え？」

志保が我に返る。目の前には、新一の姿があった。

「あ？ さては、いよいよ明日に迫ったから、興奮して夜眠れなかったな？ ……ったく、ガキじゃあるまいし…………ま、でもこうい

のつて、女は緊張するのかもな」

新一は、四角いテーブルを挟んで向かい合った志保に話しかけているようだった。

「あれ、工藤君？ 体は、もう元に戻ったの？」

新一は眼鏡をかけておらず、その後ろに座っている女性よりも背丈が大きかった。

「……は？ 体が元に戻ったって……おまえ、何年前の話してるんだ？ 組織を倒した後、オレもオメーも、解毒剤を飲んで元に戻ったじゃねえか。ちょっとウトウトしている間に、そんなことも忘れちまったのか？」

「え？ 私が、元に戻った……？」

志保は思わず、左手で自分の顔を触る。次いで、自分の右手を眺める。

（本当に、元に戻ってる……）

一体、何が起こっているのか。志保はまだ飲み込めない。

「あっちゃー……いくら睡眠不足でも、こんなになるもんなのか？ せつかくの花嫁がこんな状態で、明日の式は大丈夫なのかよ……」

「は、花嫁？ 式？ 私、誰かと結婚するの？」

思いもよらぬ単語に、志保は戸惑う。

「おい、志保。あんまりふざけてると怒るぞ？ それとも、一時的に記憶喪失になっちまったのか？ でも、オレのことはわかるみてえだしな……」

テーブルの上には、三つ折りのメニューと、飲みかけのコーヒーと紅茶の入ったカップが置かれている。どうやら、どこかのファミリーストランのようだった。

「あの、工藤君……私、本当に今の状況がよくわかってないの。どういうことなのか、説明してくれない？」

「マジかよ……でも、その様子じゃ冗談を言っているわけでもなさそうだしな……」

やれやれといった表情を見せつつも、新一は話し始めた。

「じゃあ、組織を倒したところから話すか……組織を倒した後、オレもオメーも、オメーの作ってくれた解毒剤で元の体に戻り、高校・大学と進んだ……あ、元に戻ってから、オレと志保はすぐに付き合い始めたよな……それで、この3月にオレは東都大学を卒業して探偵事務所を開き、いよいよ明日はおまえとの結婚式ってところだったじゃねえか。オメー、ホントに忘れちゃったのか？」

「えっと……ちょっと待って……」

志保は左手を額に当て、記憶を呼び起こす。確かに、言われてみればそうだった気もしてくる。だが、そうなるのと1つ、おかしい点がある。

「あなたと私が付き合い始めたって……彼女はどしたの？」

「彼女……って、誰だよ？」

「彼女は彼女よ！ 毛利蘭さん！ あなた、蘭さんのことを想っていたんじゃないの？」

思わず声が大きくなるが、新一は特に気にする風もなく言った。

「ああ、蘭か……確かに、小さくなってからしばらくは、あいつのことが好きだったな……でも、おまえと出会って組織を倒す協力をしていくうちに、だんだんとおまえに惹かれていったんだよ……それで、いざ元の体に戻ってみると、組織だとか薬だとか、蘭には話せないことが多すぎて……自然と、話が噛み合わなくなったんだよな。それで、組織を倒す前から全部話してたおまえにオレが告白して、オメーもOKだって言って……うわー、改めて話してみると、そこまで忘れられてたのは正直ショックだぞ？」

「じゃあ、本当に、工藤君と私が結婚するの？」

「だからそうだって言ってるだろ。つーかおまえ、いつもみたいに、新一って呼ばねえのかよ？」

「し、新一？ 私、そう呼んでいたの？」

「当たり前だろ。というか、名字が同じになるっていうのに、工藤って呼んでどうすんだよ？」

「……………」

（何？ 何か変よ……これは夢？ それにしては、手で触った感触もあるし……じゃあ、今まで現実だと思ってきたことが夢だったの？）

志保が戸惑っている、来店を知らせる電子音の後に店の入口が開き、何者かが入ってきた。

「あ、いたいた。志保ったら、こんなところで話していたのね」

明美だった。その後ろには、腰まで伸びた長髪に黒いニット帽の男――諸星大の姿がある。

（え？ お姉ちゃん？ どうしてここにいるの？）

明美と大は、新一と志保の座っているテーブルそばまで歩いてくる。

「おめでとう、志保ちゃん。いよいよ、志保ちゃんも結婚か……」
大が志保に言った。

（えっと、この人は……確か、お姉ちゃんの恋人だったけど……でも、別れたんじゃないかったかしら……）

志保が記憶を辿っていると、新一が立ち上がって大に頭を下げる。

「あ、諸星さん。どうも、お世話になってます。ああ、これからは義理のお兄さんですね」

「よう、新一君。探偵事務所を開いたんだってな。となると、俺の職場から君のところに依頼させてもらうことがあるかもしれないな。君には例の事件の時に本当に世話になったし、これからも頼りにしてるぜ」

言いながら、大は志保の隣に、明美は新一の隣に座った。新一も再び座る。

「え、諸星さんの職場って……FBIからですか？ 光栄だけど、何だかプレッシャーだな……」

「何言ってるのよ。私と志保を組織から助けてくれた新一君なら、それぐらいどうってことないでしょ？ これからも志保と力を合わせて、仲良くやっていってね」

（お、おかしいわ……お姉ちゃんは……お姉ちゃんは、殺されたん

じゃ……なのに、どうしてここにいるの？

「そりやもちろんです。でも肝心の志保が、さっきから変なんですよ。明日が式だったことも忘れてたみたいだし、オレと付き合ってたこともあやふやみたいで……一時的な記憶喪失にでもなったんですかね？」

「本当に？ 大丈夫、志保？」

明美が、少し心配そうに志保の顔を覗き込む。

「……え？ あ、うん……」

「別に、顔色はおかしくないけど……きつと、新一君と一緒にになれるのが嬉しくて、我を忘れてしまったのね。大丈夫、すぐに戻るわよ」

明美が顔を離すと、今度は大が口を開いた。

「ああ、そうだな。明美も、俺を車ではねたことなんて、今じゃすっかり忘れているみたいだからな」

その言葉に、明美は頬を膨らませる。

「何よ、大君。あれは、組織に近付くために、大君がわざとやったことでしょ？ でも、それがきっかけで結婚までできたし、今じゃ感謝してるけど……」

（これは……夢？ それとも、こっちが現実？ ……まあ、どっちでもいいか。お姉ちゃんがいて、工藤君とも一緒にいられるなんて、これ以上の幸せはないわ……）

夢なら夢で、志保はこの世界に居続けたいと思い始めていた。

「お姉ちゃん」

「なあに？ 志保」

「もう、どこにも行かないでね」

「どこにも行かないって……何言ってるのよ、志保。私が、あなたを置いていったことなんてないでしょ？」

「ううん。何か、前にそんなことがあったような気がするから……」

「もう。志保ったら、甘えんぼというか、心配性なんだから」

「大丈夫だよ、志保。これからは、オレがずっと一緒なんだから。」

なんつつてな……」

新一が顔を赤くしながら割り込み、笑った。

「まーた、新一君ったら。ホント志保にラブラブなのね」

「やめてくださいよ、明美さん……」

明美と大が思わず笑う。志保も、雰囲気につられて口元を緩める。

「ねえ、新一」

「おっ！？ 志保、やっと目が覚めたか？」

「いえ、実はまだあやふやなの。でも、明日が式だっていうんなら、誰を呼んでいたのか、もう一度確認しておきたいんだけど……」

「ああ、それは重要だな。ええっと、テーブルの配置図は入れてた筈だけど……」

新一がバッグの中を探る。

「おっ、あつたあつた。ホラ、これだよ」

新一が座席表をテーブルの上に置く。それを志保が確認すると、新一と志保、工藤優作・有希子夫妻、阿笠博士、大と明美の名が載っていたが、あとは覚えのない名前ばかりであった。

「おまえが最初、歩美達を呼びたいって言った時は焦ったぞ。いくら組織を倒したとはいえ、体が伸び縮みしたなんて、あんまり言えることじゃないからな」

志保は、しばらく座席表を眺めつつ、考えを巡らせる。

（ということは、吉田さん達とは少年探偵団をやっていたけど、事件が解決したから、元の体に戻ったのよね……）

そこまで考え、志保はあることに気付く。

「あれ？ 体が伸び縮みしたって……私、前は灰原哀だったのよね？」

「ん？ ああ、そうだな」

「何で、灰原哀になったんだっけ？」

「何でって……また、変なこと聞くな。おまえが、例の薬を飲んだからだろ」

「違う、その前よ！ 何で、私は薬を飲もうとしたの？ 確か、お

姉ちゃんが……」

殺されたから。志保が言いかけると、明美の姿が消えていることに気が付いた。大もいなくなっている。

「あれ？ お姉ちゃん、どうしたの？」

「お姉ちゃん？ おまえ、何言ってるんだ？」

「えっ、だってさっきまで、お姉ちゃんがそこにいたでしょ？」

「はあ？ おまえに、姉妹なんていたのか？」

「え？」

新一は、冗談でなく、本当に知らないといった表情をしている。

（おかしい。新一の言っていることが、さっきまでと全然噛み合っていないわ）

「新一。ねえ、さっきから変よ……どうなっているの？」

志保は手を伸ばし、テーブルの上の新一の腕に触れる。すると、今度は新一の姿が消える。さらに、周囲が突然暗くなる。

「えっ……ちよ、ちよっと……ねえ、ホントにどうなっているのよ……新一、答えてよ」

しかし、新一の返事はない。志保の視界には、闇だけが広がっている。

「新一……お姉ちゃん……」

立ち上がって左右を見回しても、何も見えない。

「どこに行ったの？ 私を置いていかないで……」

志保が途方に暮れていると、上の方から声が聞こえてくる。

……ばら……灰原……

（だ、誰？）

志保は、思わず上を向いた。

灰原、オレがわかるか？

（誰？ 誰なのよ……？）

「灰原、起きろ！ 朝だ！」

哀の体が布団の中で動いたため、コナンは思わず哀の体を揺すって声を上げていた。やがて、哀が薄く目を開く。

「灰原！」

「……………新一？」

「え……………」

哀の言葉に、コナンが動きを止めた。

「灰……………原？」

哀の目が徐々に開いていき、コナンを捉える。

「新……………えつと……………工藤、君？」

新一と言いかけたが、コナンの体が小さいままであることを気づき、言い直した。

「灰原！ 気が付いたか！」

「工藤君？ ここは？」

「杯戸中央病院だ。オメーはジンに撃たれて、入院してる」

オレもただけだな、とコナンが付け足す。

「……………そう。私、助かったのね」

「ああ。オレもオメーも、生きて帰ってこれた」

コナンはベッドから離れ、そばの丸椅子に座る。哀は仰向けで天井を見上げたまま、笑顔を見せた。

「ふふ、何だか夢みたい……………」

「これが本当に現実かどうか、ほっぺたつねって確かめてみるか？」
「痛いだけだから、やめとくわ」

顔をコナンの方へ向け、哀が言った。術後の経過のせいか、顔色は白く、目元が幾分痩せているように見えたが、いつもの調子の会話となり、コナンは安心した。

（どうやら、これなら大丈夫そうだな）

コナンの安堵の表情を見て、哀は新一や明美と会話していた先ほどのまでの光景を思い起こす。

（やっぱり、さっきのは夢だったのね……そうよね、お姉ちゃんはどうもないし、私が彼と結ばれるなんて、ある筈がない……でも、もう少しその夢を見ていたかったかな……）

しばらくして、哀は上体を起こした。

「あれから、どれくらい経ったの？」

コナンは、壁にかけられたカレンダーを見る。

「えっと、1週間かな。ずっと意識が戻らなかったから、心配してたんだぜ」

「1週間、か……でも、もっと長い間、夢を見ていたような気分だわ……」

「夢、か。どんな夢だったんだ？」

「それは……って、な、何を言わせるのよ」

喉元まで言葉が出かったが、口に出すのはとても恥ずかしいことに気付कि、哀は微かに頬を赤く染めて視線を窓の外に逸らした。

「へえ。おまえがそんな風にごまかすなんて、珍しいな」

「別に……何だっていいでしょ」

（私が彼と結ばれて、平和に暮らす夢を見ていたなんて……できればその夢を見続けたかったなんて、言えるわけじゃない……）

落ち着きを取り戻したところで、哀は再び口を開く。

「あの時、爆発が起きてたみたいだったけど、あなたが私を運んでくれたの？」

「いや、あの時のオレが、元の体に戻ってたおまえを運べるわけないだろ。もっとも、その時は気が動転して、運ぼうとしちゃったけどな」

「そう……じゃ、どうやって助かったの？」

「実はオレもよく知らないんだ……ジョディ先生を振り切って、オレとおまえの周りに瓦礫が降ってきて……オレが覚えてるのはそこ

までだ」

「じゃあ、誰かが瓦礫の中まで助けに来てくれたの？」

「赤井さんが助けてくれたらしい……その時には、おまえの体は縮んでいたんだろうな。でなきゃ、いくら赤井さんでも、助けられなかっただろうし……」

「……例の、FBIの人ね」

「ああ、後でお礼を言っとかないとな」

そこで、会話が途切れる。不意に、コナンが眉間に皺を寄せ、陰しい表情になった。

「灰原、何であの時、オレをかばったんだ？ いや、そもそも、何でオレがジンを撃とうとした時、おまえは止めたんだ？ 撃たなかったから、オレもおまえも、死ぬような目に遭ったんだぞ？」

哀は視線を上げ、その時の状況を思い出す。少し考えた後、コナンの顔を見た。

「……そんなにいつぺんに答えられないわよ。まず、後の方の質問だけど。あなたにこれ以上、人を殺させたくなかったからよ。ウオツカを殺したただけであれだけ思いつめてしまったあなたの心が、ジンまで殺して、耐えられる筈がない……だから、あなたに撃たせたくなかったの」

「……………」

それは、コナンにとって否定できるものではなかった。コナンはその時の衝動で撃とうとしていたが、哀は、その後コナンがどうなるであろうかまで考え、止めてくれた。哀は、コナン自身よりも、コナンのことを理解しているのではないか。

「ああ、おまえの言う通りかもしれない。おまえに感謝すべきかもしれないね。だが、もう1つはどうだ？ あの時、オレをかばったのはどうしてだ？」

「だって、あなたを蘭さんの元に返すには、あなたに生きてもらわないといけないから……」

「バカ野郎！！ またオレに殺させるつもりだったのか！！」

部屋中に響き渡る声で言う。

「……………えっ？」

哀は、コナンの怒りが理解できず、そんな声を出してしまう。

「ウオツカだけじゃなく、おまえまでオレのせいで死んじまってたら……オレがおまえを殺してたのと同じだ！ おまえが死んでたら、オレはそれこそ耐えられねえ！」

「でも……あの時、私がああしなければ、あなたが先に撃たれて……」

「そんなことは覚悟してた。おまえは自分の命を第一に考えるとかな言っておいて、自分から死に行きやがって……ちょっとは、残される側の人間のことも考えろ」

「……………ごめんなさい」

大声を出して怒りも静まったのか、それきりコナンは黙った。哀も口を開かない。沈黙に耐えかねたかのように、コナンは立ち上がって振り返り、病室の入口ドアを開いた。哀に背を向けたまま、言った。

「灰原……」

「何？」

「良かった……助かって………本当に……」

人前で決して涙を見せないコナンが、静かに泣いている。哀は息を飲み、コナンの震える肩を見つめていた。

第8章：葛藤

哀が意識を戻した翌日。また、コナンは哀の病室へ行っていた。

「薬のデータは、どうなったの？」

「ああ……今は博士が持つてるよ。オレとオメーでジョーディ先生には前から頼んでたし、赤井さんからも口利きしてくれて、ジェームズさんも納得して渡してくれたみたいなんだ」

コナンはベッド脇の丸椅子に座り、哀はベッドで上半身を起こして座った状態で話している。コナンの怪我の具合は大分良くなり、退院の日が迫っていたものの、哀はもうしばらく安静にしている必要があるとのことだった。

「じゃあ、あとは私が退院して、解毒剤を完成させればいいってことね」

「……ああ。そうなるか……」

「大丈夫よ。パイカルの成分だけでも、解毒剤はあと一歩のところまで行っていたし、薬の完全なデータが手に入ったのだから、完成まで2週間もかからないと思う。退院したらすぐ開発に取りかかるから、焦らないで待ってなさい」

「……………」

望んでいたことが、間近に迫っている。その筈なのに、コナンは妙な引っかけを感じていた。

（いよいよ、元の体に戻るのか……でも、何かスッキリしねーんだよね）

それは目の前の少女が原因であると、これまで自身のことに鈍感だったコナンにもはつきりと自覚できた。

「ねえ。私の顔、何か付いているの？」

その言葉で、コナンは哀の顔を黙ったまま見つめていたことに気付く。

「え？ あ、いや……何でも、ねえよ……」

慌てて視線を逸らし、ぎこちなく返事をする。何となく居心地が悪くなり、コナンは「じゃあな」と言って椅子から立ち上がり、哀の部屋を後にした。コナンは、同じフロアで3つ隣にある自分の部屋に戻り、ベッドの上に座る。

（やっぱ、あいつのことが気になるんだよな。あいつ、薬を完成させたら、どうするつもりなんだろう）

食事が終わり、消灯時刻になっても、考え続ける。

（灰原がオレを好きだったとして……オレが元の姿に戻ったら、あいつは戻るのか？ 前に、戻らないかもって言ってたし……あいつが戻らないと、オレがあいつを置いていったみたいじゃねえか）

それでは、後々まで尾を引いてしまいそうだとコナンは感じる。

（蘭を待たせてるってのもあるし……あいつが元に戻らなくてもオレは戻るのが筋なんだろう、けど……何でスツキリしねーんだろう？ オレ、灰原が放っておけないのか）

この感情は、何だ。同情？ 哀れみ？ それとも……愛情？

（オレ、灰原を好きになってるのか？ 確かに、ウォツカをやっちまってから、妙に気になってるけど……蘭とはまた違うのか？）

蘭のことを思い出す。

（蘭のことは、もちろん好きだ。中学の時にはあいつを意識してたし、告白されたりラブレター貰ったりしても、一番はあいつだった。それに、「待ってて欲しい」と言っている。今でも、あいつが大事なことに変わりはない）

そして、今度は哀のことを考える。

（灰原のことは……どうなんだろう？ 守ってやらないといけないと思ったし、今、気になってることは間違いないけど……あいつには、別に何か言ったわけじゃないよな……）

ベッドの上に座ったまま、目を固く閉じて考える。

（でも、蘭に言っているから戻る、灰原には言っていないから放っておくっていつものものか？ それは何か違うよな。大体、今のこのモヤモヤした気分は何なんだよ……）

堂々巡りになってしまふ。

（結局、蘭を取るか、灰原を取るか、どっちかってことか……）
それでもまた考え、夜が更けていく。

翌日も、コナンは哀の病室へ行く。哀が顔を上げてコナンの表情を見ると、目が充血しており、目の下には隈ができていた。

「ひどい顔しているわね。どうしたのよ？」

「ああ……昨夜はちよつと、眠れなくて……」

コナンの返事に、哀は違和感を抱く。組織と決着が付いたというのに、何か悩むことでもあるのだろうか。

「せつかく彼らを倒して元の生活に戻れるっていうのに、何やってるのよ」

「……………」

コナンは椅子に座って俯き、腕組みをしたまま答えない。確かに、元の姿に戻るために組織を打倒した筈で、その目的は達せられたのだから、悩む必要はないのかもしれない。だが、コナンは顔を上げ、昨夜考えた疑問を口にした。

「なあ灰原、前にも聞いたけど……おまえ、この先どうするんだ？」

「え？ 私？ そうね……」

哀は右手の人差し指を頬に当て、視線を天井に送る。しばらくして、コナンの方を見る。

「やっぱり、この体のまま生きていこうかしら」

「何でだよ……アイツらに世話になったからか？」

コナンは、組織との最終決戦前の哀との会話を思い出しつつ、言った。

「それはあるわね。あの子達は、生まれた時から組織の一員だった私に、仲間や協力というものを教えてくれた……このことは、何にも代えがたいし、あの子達にはいくら感謝しても足りない……でも、理由はそれだけじゃないわ」

一旦言葉を切り、再び続ける。

「私は、私の作った薬のせいで死んでしまった人達に、償いをしていかなければならないと思っているの。もちろん、どんなことをしても死んだ人は帰ってこないし、その人達やその家族は、私が毒を作ったことすら知らなかったかもしれない。でも、私が彼らの一生を踏みにしまったことを、なかったことにはできないの。だから、何人も死なせてしまった分、これから1人でも多くの命を救ってきたい。そのためには、元組織の一員としてではなく、一般人として学び直さなければならぬ。だから私は、元組織の宮野志保ではなく、普通の小学生の灰原哀として生きていきたいの」

その言葉に、コナンは目を見開き、丸椅子から立ち上がっていた。「な……何だよ、それ！？ 死んだ者へ償うために生きていくっていうのか！？ そんなの……そんなのって、ないだろ！？ おまえは、作りたくもない薬を作らされていたんだから、おまえこそ被害者であって、そんなこと気にする必要なんてないんじゃないのか！？」

コナンはベッドに近付き、その縁に両手を付く。

「工藤君……自分の本意じゃなかったとか、そういう問題じゃないわ。私の作った薬で多くの人が死んだ……これが事実よ。どれだけ事実を正当化する言葉を並べたところで、自分の心はごまかせないの。だから、事実を受け入れ、これから先どうするかを考えなければならぬ」

「でも償いって……おまえだって、これまで薬を作ってきたことで苦しんできた筈だ。組織を倒したことで、償いは済んでるだろ？」

これからは、今まで辛かった分、自分が幸せになることを考えるべきなんじゃないのか？」

「幸せ……？」

哀が、不思議そうにコナンの目を見る。

「幸せって……どういうことかしら？」

「いや、そんなのいろいろあるだろ。おまえは動物が好きなんだから何か飼ってもいいし、ファッションやブランド物が好きなら、揃

えてお洒落するのもいい。もつと普通に、自分の好きなことをするとか、考えられないのか？」

「自分の好きなこと……」

哀はコナンから視線を切り、窓の外を見やる。だが、ほどなくしてかぶりを振った。

「工藤君。私には、そんな自由許されないわ。過去を全て忘れて、自分だけ幸せになるなんて、私にはできない」

「じゃあ、幸せにならなくてもいいっていうのかよ!？」

「ええ、私にはそんな資格なんてない。犯してしまった罪は償わなければならぬ。あなたが心配してくれるのは嬉しいけど、私の生き方は、私が決めるわ」

「くっ……このっ……!」

何故だか頭が熱くなり、コナンは前かがみになって齒ぎしりする。言いたいことがいっぱいある筈なのに、うまく言葉が出てこない。

「おまえ、自分自身が幸せになろうと考えないなんて……どうかしてるぞ!」

哀から少し離れ、搾り出すようにしてコナンは言った。

「……何で、あなたが怒ってるのよ」

（——!?!）

哀の言葉に、コナンは愕然とする。そう、別に怒る必要はない。自分のことは自分で決める。当たり前のことだ。なのに何故、怒りが収まらない——？

（オレは、灰原が幸せになろうとしていないことに怒っている……）

そう。だが、それが意味することは、つまり——

（つまり……オレは灰原に、幸せになって欲しいと望んでいる……）

——。

「……………え?」

——。

（こ……これって……え? なん、で……………ええっ!?!）

幸せを願う——愛着があるから。愛着があるのは、他人ではない、

特別な感情があるから。では、コナンが哀に抱いている、特別な感情とは……？

「あ……」

コナンの喉から、声が漏れる。

「あ？」

「あああああー!!？」

コナンが頭を抱え、病室の外にまで聞こえるような叫び声を上げる。

「ちょ、ちょっと!？ 工藤君、大丈夫？」

自分でも何をしたいのかわからないまま、コナンは哀の部屋から外へ駆け出していた。

（どうしたんだよ、オレ!? アイツ、素直じゃねえし、可愛げもねえってのに……! 何で、アイツのことがこんなに気になるんだよ……何で、こんなに好きになっちまったんだよ!?)

もう、疑う余地はなかった。コナンは、哀に好意を持っていることを、はつきりと認めた。

コナンは自分の病室に戻り、少し気持ちを落ち着ける。目の前に、1つの難題がある。

（蘭と灰原……どっちにするんだ?）

いや、気持ちは、もう決まっているのだ。ただ、それが許されるのかどうか。

（オレは、灰原の方が、蘭より好きになってるみたいだ……灰原に、幸せになって欲しい……灰原を見捨てて蘭の元に戻ったら、絶対後悔する……でも、灰原を取るには、蘭を裏切らないといけない……）
ここで、どうしても止まってしまう。そこで、第3の案が浮かんでくる。

（蘭との関係を曖昧なままにして、灰原に元の体に戻ってもらって、一緒に生活していくってのはどうなんだろう?）

少し、考えを掘り下げてみる。

（あいつ、18歳って言うてたよな……ってことは、オレの1学年上になるのか？　じゃあ、高3として編入して……って、もう3月だし、学年が終わっちゃうな。というかあいつ、アメリカの学校行っただけというし、薬品会社で薬作ってたんだっけ……となると、もう高校は卒業してるのか？　じゃあ、オレと一緒にバイトでもしようって言うのかな……そうになると、何をするかだけど……）
その後も考えを深めていくが、どうにも違和感を拭えない。

（うーん……何か、変なんだよな……）

一旦止め、再び初めから考え直す。

（あいつには、幸せになつて欲しい……でも、だから一緒に元の体に戻って欲しいって頼むのか？　それも変だよな……しかもあいつ、戻っても親はいないし、お姉さんだって……）

そこまで考え、ふとコナンが戦慄する。

（あ！？　お、お姉さん！？　そうだ、宮野明美は奴らの手にかかって……そして、オレが救えなかった……）

あの日の、哀の涙声がよみがえる。

——どうして、お姉ちゃんを……助けてくれなかったの？

コナンの頭に、強く叩かれたかのような衝撃が走る。

（オレは……オレは、明美さんを救えなかった……）

コナンは、哀が元に戻れなくなった理由の1つは、自分にもあったのだと感じた。

（あいつを元に戻れなくしたのはオレなのに、一緒に戻ってくれて言えるのか？　あいつに許してもらえるのか？　……いや。そもそも、灰原を不幸にしたオレが、幸せになっていいのか？）

何ということか。コナンはこれまで、自分が人を不幸にしたなどと、考えたことがなかった。

（くそっ……あいつの言う通りなのかよ？）

哀の言葉を思い出す。

——私にはそんな資格なんてない

そんなわけないだろ

おまえはそれ以上に、辛い目に遭ってきたんだから

——事実を受け入れ、これから先どうするかを考えなければならない

……これは、オレ自身もそうか

殺人はしちまつたし、お姉さんだつて死なせちまつた
償うためには、どうすればいいのか——

——何人も死なせてしまった分、これからは1人でも多くの命を救
っていききたい

ん、これは何だ？

灰原だつたら、命を救うための薬を作っていくってことか？

だとすれば、オレは——

（オレは、探偵として、1人でも多くの殺人を止める。それが、オ
レの償いであり、役割になるのか）

この考えが、正しいかどうかわからない。だが、今思い付くのは
それしかない。そして、そうするためには、自分はこれから先どう
していけばいいのか。

——。

——。

——。

（どちらも、傷付けないことはできない——）
ならば、答は1つ。

病室を出て、屋上への階段を上がる。ドアを開けると、月明かり

がコナンの顔を照らす。ドアの脇の壁を背にし、電話を手取る。
愛しかった人の顔が頭に浮かぶ。

（蘭……）

蘭の泣く顔はもう見たくない、思った筈なのに。コナンの頭の中で、蘭の目から涙が溢れる。

（蘭…… オレは、おまえを……）

震える指で、コールした。

第9章：蘭との別れ

蘭は、自室の机で教科書とノートを開き、期末試験に向けた勉強をしていた。数学の問題の答え合わせが一通り終わったその時、机の上に置いていた携帯電話が鳴った。そこに表示された人物名を見て、蘭は胸を弾ませてペンを置き、電話を手取る。

「もしもし、新一？」

「よう、蘭……」

「どうしたの？ 追ってた事件の決着が付いたの？」

「ああ……ほとんどな……」

「本当に？ じゃあ、もうすぐ学校にも戻ってこれるのね？ 今から戻ったんじゃ一緒に3年生になるのは無理かもしれないけど、新一だったらきっと大学にも飛び級で入れるし……また、前みたいに一緒に遊びに行けるよね」

「……………」

蘭の声はいつものように、いやいつも以上に明るい。コナンはその声を聞き、これから自分の言おうとしていることに、暗澹とした気持ちがしていた。

「新一？ どうしたの？ 何か元気ないよ？」

受話器から新一の声が返ってこなかったため、蘭は不審に思っ
て言う。

「ああ、いや……」

蘭に別れを切り出す。告白こそしていないが、「待っててくれ」と言っていた相手に対し、裏切ることになる。覚悟していたこととはいえ、いざ蘭の声を耳にすると、その決意が鈍りそうになる。コナンの脳裏に今まで蘭と過ごした日々が浮かび、その楽しかった思い出に、別れの切り出しを躊躇わせる。

「どうしたの？ 何か他に良くないこともあったの？」

いつまでも黙っているわけにもいかない。コナンは、1つ息を吐

いてから右手に持つ変声機を握り直し、口を開いた。

「蘭。おまえに言わなきゃならないことがある」

「え？ 何？」

「実は、オレ……好きな奴ができたんだ」

新一の声が震えている。

「……………え？ どういうこと？」

蘭にも、これが自分に対する告白でないとわかった。

「今回の事件を追ってたことで、ある奴のことを好きになっちまった……………」

「それって……………で、でも、そんな、急に……………新一は、わたしに待って欲しいって……………」

「ああ、勝手なこと言って悪い……………蘭を待たせておいて結局裏切るなんて、最低だと思ってる……………オレは、それまでおまえのことが一番好きだった……………本当だ……………けど、今回の事件で——」

「新一……………」

コナンが話している最中に、蘭の声が割り込んだ。それを聞き、コナンは一旦口をつぐみ、再度声を出す。

「……………何だ？」

少し間を置いてから。

「ひどいよ……………」

蘭の目から涙が零れ、声を震わせる。

「……………すまねえ。いくら謝っても、おまえには詫びきれない……………オレを憎んでくれていい……………」

「ひ、ひどいよ、そんなこと言って……………わ、わたしだって、今まで新一のことが一番好きだったのに……………今でも、だ、大好きなのに……………」

「蘭……………」

それ以上、かける言葉も見付からず、コナンは電話越しに黙って蘭の嗚咽を聞く。

（くそっ……………やっぱり、泣かせちゃった……………本当に、こうするしか

なかったのかよ……」

そのまま、30秒は経過したと思われる頃。不意に、蘭が涙声ながらに話し始める。

「ごめん、新一……今はあなたと、これ以上話したくない……まだ、わたしの気持ち整理できていないから……でも、事件は終わったんだよね？ だったら、また、新一と……会って、話せるよね？」

会って、の部分を蘭は強調する。

「……ああ、また会える」

その意図を察し、コナンが答える。

「じゃあ、また会って、話そう？ 事件のこととか……好きになった人のこととか。ぜ、全部……話して、くれるよね……？」

「ああ、約束する」

「本当？ それじゃ、約束だよ……？ 絶対……破ったらダメだからね？」

「……ああ、今度は、必ず守る」

「……ふう」

どこか、落ち着いたようなため息の後。

「それじゃあ……今日はもう遅いし、おやすみなさい……」

「……おやすみ」

コナンが言った後、通話が切れた。コナンは目を閉じ、しばらくの間、壁に背を預けていた。

第9章：蘭との別れ（後書き）

『世界で一番』の累計PVが1万を超えました。読んでくださった皆様、ありがとうございます。

この小説も折り返し地点まで来ました。新蘭派の方には納得がいかないかもしれませんが、蘭の救済はあります。

評価、感想をお待ちしております。

第10章：退院

翌日、コナンは退院となった。哀はまだ入院している。

その日、コナンを迎えに来るといふ連絡は、日が傾き始めても来なかった。先日、蘭がコナンの見舞いに來た際には「退院の日わたしを迎えに行く」と言っていたのだが。

（まあ、あんな電話したばかりだし、仕方ないか……）

病院の人には家族が来ないのを心配されたが、コナンは「大丈夫だよ」と言い、着替えや本の入ったボストンバッグを持ち1人で病院を後にした。

（蘭の奴、もう学校から帰ってるかな……）

コナンは、探偵事務所の入口ドア前に着いていた。蘭は今、どんな顔をしているのか。不安になりながら、右手でドアノブを回した。

「ただいまー……」

「ん？ お、おお、コナン。そうだ、今日が退院だったな」

煙草をくわえた小五郎が、新聞を持ったままコナンに視線を向ける。コナンはバッグを入口脇に置き、事務所内を見回す。小五郎が机の奥の椅子に座っているだけで、他に人の姿はなかった。

「……あれ、蘭姉ちゃんは？」

「ああ、蘭か……」

小五郎の表情に影が差し、煙草を口元から外して灰皿に押し付ける。

「蘭は具合が悪いと言って、学校を休んでな……今、部屋にいる筈だが。病院へ連れて行こうとしても、必要ないって言うてな……朝から、何を聞いても上の空だ。何か、よっぽどショッキングな出来事にでも遭ったんだろうか……」

新聞をたたみ、机の上に置く。小五郎の表情は、娘を案じる父親そのものだった。コナンには、思い当たる節がある。いや、それし

かないだろう。

（やっぱり……相当ショックを受けてるのか……）

「こんなこと言うのも何だが、蘭と話をしてやってくれないか？
おまえが退院したとわかれれば、あいつも少しは元気になるかもしれない」

まっすぐにコナンを見て言った。

「うん……」

コナンは3階の蘭の部屋の前に立ち、ノックをする。

「蘭姉ちゃん、ボクだよ。入るね」

ドアを少し開け、中の様子を窺う。もう日が暮れようという時間だが、部屋の電気は点いておらず、薄暗い。

「蘭姉ちゃん？ ただいま……」

返事がない。部屋に入ってドアを閉め、中ほどまでを見渡す。寝ているのだろうか……ベッドに近付いてその上を見ようとした時、その手前に、蘭の姿があった。床に座り、顔を膝元に埋め、肩を小さく震わせている。

「蘭……姉ちゃん……」

コナンが立ち止まって声を漏らしたその時、蘭が顔を上げてコナンの側を向いた。

「……お帰り、コナン君」

無理して作った笑顔に、涙声で言う。

「う、うん……」

「ごめんね、迎えに行けなくて……」

どのくらい泣いていたのか。顔には幾筋も涙の痕があり、パジャマの膝部分も濡れている。

「ど……どうしたの？」

答はほばわかってる。それでも、コナンとして聞かなければならない。

「うん……ちょっとね……」

言いながらも、また頬を涙が伝う。

「新一が……」

コナンを見る。蘭の目に、コナンの姿が新一と重なって映る。

「新一兄ちゃんが、どうかしたの？」

「……新一！」

不意に、コナンに近寄って強く抱き締めた。

「ら、蘭姉ちゃん？ い、痛いよ……」

蘭は膝を付き、コナンを強く抱いたまま、肩の上で嗚咽を漏らす。

「ごめんね、コナン君……しばらく、このままでいさせて……」

あとは言葉にならず、蘭はそのまま涙を流し続ける。コナンは抱き締められて立った状態のまま、動くことができない。

（蘭……すまねえ、本当に……）

蘭を傷付けることは、覚悟していたのに。ここまで悲しませてしまったのは自分であり、これで良かったのか、わからなくなる。

（蘭……本当は、オレが新一なんだ……）

そう言ってやりたい。背中や肩から伝わる蘭のぬくもりに、思わず抱き締めたくなる。だが、その間にも、哀の顔が頭に浮かぶ。コナンは、蘭の背中に回しかけた手の動きを止め、代わりに拳を作り、歯を食いしばる。

（ダメだ……今、おまえと抱き合うことはできない……）

そのままの姿勢で、耐える。せめて、蘭に本当のことを話してやりたい。だが、今はまだ、正体を明かすことはできない。組織を壊滅させたとはいえ、末端のメンバーには逃亡した者がいる。全員の行方を把握できているわけではない。危険は、まだ完全には過ぎ去っていない――。

（でも、おまえには、必ず本当のことを話す）

そのために、まずは最愛の人に想いを告げる。そう誓った。

第11章：告白

「せっかく退院できたっていうのに、わざわざ私の見舞いに来るなんて……早く解毒剤を作れって言いに来たのかしら？」

コナンが退院した翌日。コナンは哀の見舞いに病室を訪れていた。哀は内心喜んで笑顔を見せつつも、いつもの調子で思いとは裏腹なことを言う。

「いや、その必要はない。蘭の元には、もう戻らない」

コナンはベッドのそばに近付き、立ったままで言う。

「……え？ あなた、今何て？」

「蘭には、今回の事件を追ってたことで、別の奴を好きになったって言った……」

コナンが、哀の目を見る。

「え……ちょ、ちょっと……」

哀が動揺する。コナンの言った通りなら、思い当たる節は一応ある。いざ組織を打倒する段になってから、急に哀を気にかける発言が多くなっていた。哀としても、自分を想ってくれているのではないかと、淡い期待を抱いていた。だが、それが本当だったとして、受け入れていいのかどうか。

「灰原、オレはおまえのことが——」

「待って！ その先は言わないで！ お願い！」

哀が割り込んだ。

「あなた……自分が何を言おうとしているか、わかってるの？」

「もちろんだ」

「嘘よ！ 意味がわかっているなら、そんなこと絶対に言わないわ！ 彼女のことは放っておくっていうの？ あんなに、彼女のことを想っていたのに！」

哀が声を張り上げる。コナンは目を閉じ、蘭のことを頭に思い浮かべつつ口を開く。

「ああ、今でも蘭のことは好きだ……でも、だからこそ、あいつとは別れないといけない」

「何でなの？」

「あいつにこれ以上、嘘は吐けない……もちろん、オレ自身にも。今はオレにとって、あいつ以上に、近くで守ってやりたい奴がいるんだ……」

再度、哀の目を正面から見つめる。哀は顔を赤くしたが、それでも言った。

「ち、近くで守ってやりたいって……じゃああなた、元の姿には戻らないつもりなの？」

「ああ、そうだ」

本当に戻らないつもりなのか。哀は、まだ納得できない。

「おかしいわ……元の体に戻るのよ？　なのに戻らないって、工藤新一をこの世から消してしまうつていうの？」

「別におかしくねえだろ。工藤新一にはできなくても、江戸川コナンにならできることがあるんだ。それに、おまえだって元の体に戻るつもりはねえんだろ」

「……」

そう、哀に戻るつもりはない。死んだ者への償いという意味もあるし、戻った新一が、姉の面影を持つ蘭と一緒に過ごすのを、近くで見たくないから。愛しい人に手が届かないという以上に、姉のことが嫌でも思い出され、二重に切なくなる。

「どうかしてるわ……あなたは、私の作った毒薬のせいで人生を狂わされたのよ？　なのに、蘭さんを捨てて私を取るだなんて……」

「そうだな。おまえの薬があったから、オレは小さくなった。正直、最初はこの体を恨めしいと思った。でも、この体になったからこそわかったこともあるんだ。小学1年生になって、いろんな人の本音を聞きやすくなった。それにオレ、今ではおまえに感謝してるんだぜ。おまえの薬があったからこそ、奴らに殺される筈だったところを逃れて、逆に奴らを追って倒すことができたんだからな」

哀は右手を額に当て、目を閉じる。少しして、顔を上げコナンを見る。

「……でもそれは、彼女を捨てる理由にはなっていないわ。どうしてなの？」

「おまえのことを、知れば知るほど、放っておけなくなっただよ。きっかけは、オレがウォッカを殺した後か……おまえは、私はもつとたくさんの人を死なせた、って言ったよな。それで気付いたんだ。おまえは組織の命令で毒薬を作らされてたけど、そのせいで人が大勢死んだことを悩んで、抱え込んでたんだよな。おまえのせいじゃないっていうのに。しかもそれだけじゃなく、これから先は死んだ人に償うために生きて、自分の幸せは求めないなんて……どれだけ優しくて、お人好しなんだよ」

コナンが続ける。

「おまえって、本当はすごくいい奴なのに、そのことを人に見せようとしないで、自分も幸せになろうとしない……そんなおまえに気付いて、無性に腹が立ってきたんだよ。おまえはこれまで辛い目に遭ってきた、それでも頑張ってきたっていうのに、幸せにならないなんておかしいって……ホント、どうしようもなくおまえに惹かれちゃったんだ。だから、『おまえの償いは、組織を倒したことでもう済んでる。おまえが幸せになろうとしないんなら、オレが幸せにしてやる』って思ったんだ」

そこで、言葉が途切れた。哀は、コナンが自分を好きになった理由を理解した。だが、まだわからないことがある。

「あなたが、今の体でないとできないことって、何かしら」

「まず、おまえと一緒にいることだ。次に、おまえを不幸にしちまつたことに対して償うってことだ。オレは、おまえのお姉さんを救えなかった」

（——！）

哀は、明美のことを思い出した。確かに最初、卓越した推理力を持ちながら、コナンが明美を助けてくれなかったことを恨んだ。だ

が、そのことはコナンの中でも影を落としていたとわかり、徐々に許す気持ちになっていったのだった。

「そして一番大きいのは、オレが世界一の探偵になって、1人でも多くの殺人を止めるってことだ。これは、おまえが元の体に戻らないのとは、おそらく逆の理由だ」

(……?)

理解できず、哀は首を傾げる。

「工藤新一っていうのは、サッカーが好きで、キザでカッコつけな推理オタクの探偵だけど、あくまで普通の高校生なんだ。工藤新一は、誰も殺しちゃいない。対して、江戸川コナンは、幼くして殺人をしちまった……その罪を償おうとするなら、新一じゃなく、コナンとして生きていかないと」

一応、筋は通っている。しかし。

「……でも、そこまでする必要はないんじゃない？」

「もちろん、オレが殺人者だって知ってるのは、おまえと、FBIのごく一部だけだろうし、それを誰かに言うつもりもない。でも、だからといってオレが人を殺したことをなかったことにはできない。なくせないんなら逆に、殺した経験から、殺人者の心理を知るのに活かせないかって思ってるよ。オレは殺人を止めたいっていうのに、相手の気持ちかわからないじゃ、うまくいかないだろ。殺人をすると、殺された側の関係者はもちろん、殺した側も深く傷付く。そんな思いは、もう誰にもさせたくない。だから、これから先いろんな人と交流していつて、殺意の芽生えとか嫉妬・恨みとか、いろんな人の気持ちを知っておきたいんだ」

再び会話が途切れた。だが、2人の間に重苦しい雰囲気はない。

「おまえが嫌だって言わない限り、オレはおまえを幸せにしたい。お姉さんを救えなかった償いをさせて欲しいんだ。もし、おまえが嫌だって言っても、オレは新一に戻るつもりはないぜ。小学生探偵として、一から勉強し直さなくちゃならないから」

コナンは微笑する。そこには一点の曇りもなく、哀は俯いてしま

った。

「改めて言っぜ。灰原、オレはおまえが好きだ。世界で一番」

今度は、哀は遮らなかった。

「だから、オレと一緒に、道を歩んで欲しい。一緒に、幸せになつて欲しい」

黙って、コナンの言葉を聞いている。

「オレから言うことは言ったぜ。今度はおまえが、オレのことをどう思っているのか、聞かせてくれ」

静寂が流れる。哀は目を閉じたまま、口を開かない。そのまま、時間が静止したと思われた頃。

「まったく、しょうがないわね」

目を開いて笑顔になり、明るい声で哀が言った。

「実は私も、あなたのことは……け、結構、好きだったのよ……」
けれども、出てくる言葉の余裕とは裏腹に、声は震えてしまっている。

「だ、だから、その……うつ……つ、付き合っただけでも……いい、わ……う……うつ……えぐ……」

それ以上、言葉が出てこない。本当は、ずっと望んでいたことだった。叶わないと思いつつも。それが現実となり、作った笑顔が崩れてしまう。涙が溢れて止まらない。

コナンも込み上がるものを堪える。

「灰原……もう、泣かないでくれ……」

哀に近付き、優しく抱き寄せる。哀もそれを拒まなかった。

（工藤君、ごめんなさい……でも、ありがとう……）

そのまま、哀が泣きやむまで抱き合っていた。

第12章：友人

翌日も、コナンは哀の見舞いに行く。哀の左手には、1冊の医学書が握られている。

「覚悟はしてたけど、蘭の奴、相当落ち込んだ……今日は、幾分マシになってた気はするけど……」

コナンは椅子に座ったまま、浮かない表情で言う。哀は本を閉じ、枕元へ置いた。

「でしょうね。あれだけ、あなたのことを想っていたのだから……」
言いながら、哀の視線は自然と窓の方へ向かっていく。外では桜のつぼみの膨らみが大きくなり、雀の鳴き声が聞こえていた。

「あ、あ、あのさあ……あ、哀……」

どもりながらも、コナンが哀の名を呼ぶ。その言葉に、哀はコナンの側へ顔を向け、微かに目を見開いた。

（初めて、名前で呼んでくれたわね）

哀の顔は血色も良く、もう健康と呼んで差し支えなかった。

「オレには、哀が必要なんだ。でも……」

「蘭さんのことも放っておけない……まあ、あなたはそういう人よね」

1つ息を吐く。哀は顔を少し下げ、左手を頬に当てる。

「工藤君。これは、私達でどうにかできる問題じゃないわ。蘭さんが立ち直ると、信じるしかないと思う」

「……………」

（でも、彼女ならきつと乗り越えられる……いえ、乗り越えて欲しい。そうでないと、私……）

哀が唇を噛む。コナンはあることに気付き、俯く哀の顔を見る。

（そっぴいや哀の奴、蘭のことを彼女って言わなくなっただな）

コナンは少し考えた後、言った。

「そっぴいだな。オレも、蘭を信じる。しばらく様子を見よう」

月曜日の朝。探偵事務所前で、蘭は園子と合流した。

「蘭、おはよう。金曜はどうしたのよ？ 急に休んで。電話してもメールしても、全然反応なかったし」

「うん……ごめんね、ちょっと……別に、病気とかじゃないんだけど」

歩きながら話し始めたものの、蘭の表情は沈んだままであった。

「本当に大丈夫？ 今も元気なさそうだけど」

「うん……そうかもね……」

言いつつも、蘭はさらに俯いてしまふ。園子は蘭を見て、少し顔を近付ける。

「何かあったの？ わたしには話せないことなの？」

「えっと……どうだろう……」

蘭は顔を上げ、少し考える。新一に別れを告げられた事実は、蘭に重くのしかかっていたが、結局小五郎にもコナンにも打ち明けないままであった。

（誰かに話してもどうにもならないって、思っていたのかも……でも、園子になら……わたしの一番の親友だし……）

そう思い、蘭は園子の方へ顔を向けた。

「新一がね……わたしの他に、好きな人ができたって……」

その言葉を聞き、園子は立ち止まる。蘭もそれを見て足を止めた。少し間を置いて。

「……………ハア！？ 何考えてんのアイツ！？ 蘭のことを置いていくっていうの！？」

思わず、20メートル先にも聞こえるような大声を出していた。

驚きの表情を見せつつも、蘭は再度口を開く。

「まだ、詳しいことは聞いてないんだけど……事件を追ってたことで、好きになった人がいるって……電話で言ってた……」

「じゃあ、蘭と離れてる間に、新一君をたぶらかした女がいるってこと！？　どこの女か知らないけど、蘭がいるっていうのに……許せないわ！」

園子の声に、2人の前方を歩いてた人々が振り返っている。園子の剣幕に、蘭は慌てた様子で言う。

「や、やめてよ園子、そんな言い方……わたしだって、詳しくは知らないんだから……」

「あ、ごめん……でも、新一君はそのことを教えてくれるの？　このままじゃ、黙って逃げられちゃうんじゃない？」

また、2人は歩き始めた。

「でも、『事件は終わったから、今度会って話す』って言ってたけど」

「うーん……じゃあ、新一君を信じて、話してくれるのを待つしかないか……」

園子の声は徐々に冷静なものに変わり、顔を下げる。話しながらも、2人は帝丹高校の正門前に着いていた。

「とにかく、元気出しなよ、蘭。他のいい男探すの、わたしも手伝ってあげるからさ」

正門を過ぎたところで、園子が言った。

「……うん」

蘭は、迷いつつも頷いた。

授業中、蘭は教室の窓から外を見つつ、考えを巡らせる。グラウンドでは、体育の授業でサッカーが行われていた。

（そつえばあの時、新一は何て言ってたんだっけ……）
受話器の向こうで震えていた新一の声を思い出す。

——オレは、それまでおまえのことが一番好きだった……本当だ……

（新一は、事件があるまでは、わたしが一番好きだったって言って

た……別に、そこで嘔吐しても意味ないし、本当よね……）

徐々に、落ち着いて新一のことを考えられるようになってきた。

（前に、待ってて欲しいって言ってたし……わたしにも聞きたいことがあるって言ってたもの、間違いない……でも、それなのに他の人を好きになるって……）

——今回の事件を追ってたことで、ある奴のことを好きになっちゃった……

（そういえば、「なっちゃった」って……思い出してみれば、変な言い方よね。好きになっちゃう……抑えられないってこと？ 何か、事件のことで、よっぽど世話になったとかかしら……）

蘭は、その後も考えを掘り下げていくが、このままでは判断材料が少なすぎることに気が付いた。

（危ない事件としか聞いてないし……やっぱり、これ以上は新一に聞かないとダメか。本当に、話してくれるのかな……）

——……ああ、今度は、必ず守る

（いえ、約束するって言ったもの……必ず、守ってくれるよね。わたしも、新一を信じないと）

そこまで考え、蘭は視線を黒板に戻した。

（とにかく、まずは新一に会って、話を聞いてからね）

放課後。期末試験間近ということもあり、蘭は部活もなく、園子と2人で帰っていた。

「蘭。あれからわたし、考えたんだけどさ。今度、合コンに行かない？」

「えっ、合コン？」

思いもよらぬ言葉に、蘭は聞き返す。

「そうよ。前に姉貴の友達が、近いうちやるって言ってたから……わたし達も混ぜてもらおうよ。新一君のことは1回忘れて、パーっとみんなで楽しんだ方がいいよ。わたしと蘭は参加するって、返事しとくから」

「え……でも……まだ、新一には話聞いてないし……」

「もう。新一君は他に好きな人ができたって言ってるんだから、蘭もいつまでも引きずってても仕方ないでしょ？ 早く切り替えないと」

2人は横断歩道の前まで来て、信号が赤から切り替わるのを待っていた。

「うーん……」

蘭は園子から視線を切り、腕組みをして俯く。

「わたしも参加するのは久しぶりだし……いい男がいないか、今から楽しみよ」

グフフ、という声を漏らしつつ、園子が笑う。久し振りに見たその姿に、蘭は内心呆れてしまう。

「もう、いい男って……京極さんはどうするのよ？」

「あ、そっか……でも真さん、あんまり電話くれないし……」

信号が青に変わり、2人は道路を横断する。

「そんなこと言ってて、園子も振られちゃっても知らないよ？」

「むむむ……」

自転車が、2人の脇をすれ違っていく。園子は額に手を当て、悩んでいる。

（もう……ホント、園子ったら……）

真と付き合う前に戻ってしまったようで、おかしさが込み上げてくる。

「うふふ」

口元に右手を近付け、思わず吹き出してしまっていた。

「あ、今笑ったわね？ ……でも、やっぱり蘭は笑ってる方がいいよ」

「えっ……」

「朝からずっと、暗い顔してたし……やっと、元気になってくれたわ」

「……」

蘭は園子の顔を見る。今になって、蘭は親友の心遣いに気付いた。
(ありがと……園子……)

園子と別れた後、蘭は階段を上がり、事務所のドアを開く。

「ただいまー」

「おかえり、蘭姉ちゃん」

中にいたコナンが返事をし、蘭の方を見る。

「あれ？　どうかしたの？　何か、元気になったみたいだけど」

朝に比べて蘭の表情が明るくなっていることに気付き、コナンが言った。

「何か、園子がね。今度、合コンに行こうって」

「えっ、合コンって……蘭姉ちゃん、そういうのに行くの？」

「わたしも、まだ行ったことはないけど……男は新一だけじゃないって、励まされちゃった」

「えっと、新一兄ちゃん……」

まさに新一であるコナンは、反応に苦慮する。

「ああ、コナン君にはまだ言ってなかったわね。新一、他に好きな人ができたみたいなの……」

「そ、そうなんだ……」

「それがショックだったから、お父さんにもコナン君にも心配かけちゃって……ごめんね。でも、いつまでも落ち込んでるわけにもいかないし、早く切り替えないと」

「う、うん……」

「さ、早く着替えてごはんの支度始めちゃうか」

蘭は、3階の自室まで上がっていく。コナンは、その動作を見て考える。

（まだ、ちょっと無理してるかな……でもまあ、大分持ち直してき
たか。園子、恩に着るぜ……）

数日後、哀の退院の日。コナンは、哀と共に帰る道中、蘭が立ち
直りつつあることを話していた。

「だから、そろそろ話しておくべきだと思うんだけど」

「そうね。避けては通れないだろうし。でも、FBIの許可は取っ
てあるの？」

日は大きく傾き、2人の行く道に長い影を作っていた。

「それは大丈夫。ジエームズさんは最初反対してたけど、赤井さん
に話したら、一緒にジエームズさんを説得してくれたよ。もつとも、
ジョディ先生は最後まで反対してたけどな」

「まあ、ジョディ先生はベルモットと因縁があるみたいだし、仕方
ないかしら。それにしても、あなたのお母さんがベルモットと知り
合いだっただなんてね」

「ベルモットをどこまで信用していいのかわからないけど、母さん
には『危ないことから引退する』って言ってたみたいだし、赤井
さんも『女1人ぐらい俺が何とかする』って言うてくれて、最終的
にはOKが出たよ」

「その赤井って人、随分私達に良くしてくれるのね。何か理由でも
あるのかしら」

「ああ。今なら、おまえとも会ってくれるだろう」

その言葉に、哀は顔をコナンの側に向ける。

「それって……つまり、ロリコンってわけじゃ、なかったのね」

「あ、当たり前だ。最初っからそう言っただろ？」

話しているうちに、2人は探偵事務所と阿笠邸の分岐地点まで辿
り着いた。

「それじゃ……決まったら、知らせてね」

「わかった。それじゃあな」

2人は別れ、コナンは歩いていく哀の後ろ姿をしばらく見つめていた。

（さて、いよいよだな）

コナンは、新一用の電話を取り出し、蘭にコールした。

第13章：3人

蘭がキッチンで夕食の準備をしていると、まな板のそばに置いていた携帯電話が鳴った。ディスプレイには「工藤新一」と表示されている。蘭はコンロの火を止め、少し躊躇った後、電話を手に取り通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「蘭。明日、1時から時間あるか？ 前に言ってたこと、全部話そうと思うんだけど」

「明日の1時？ うん、特に予定はないけど……」

冷蔵庫に貼り付けられたカレンダーを見ながら、蘭が言った。

「……まだ、心の準備ができてないんだったら、明日じゃなくても大丈夫だぞ？」

「いえ、もう大丈夫よ。それで、場所はどいうするの？」

「オレン家の近くの、例の喫茶店でどうだ？」

「……うん、わかった。それじゃ、また明日ね」

蘭は電話を切り、しばらくそれを眺めた後、またコンロの火を付け、夕食の準備を再開した。

翌日。約束の店に、蘭は5分前に到着した。

「いらっしやいませ、お1人様ですか？」

「あ、いえ、待ち合わせで……中、見てもいいですか？」
「どうぞ」

蘭の視線が、店内を探る。

（新一は、まだ来てないか……あれ？ あそこにいるのは、哀ちゃん？）

店の奥、窓際の席で、哀が1人で座っているのを見た。哀も気付いた様子で、蘭の方を見ている。蘭は哀に近付き、声をかけた。
「こんにちは、哀ちゃん」

「こんにちは」

「どうしたの、今日は？ 誰かと待ち合わせ？」

「ええ、あなたを待っていたのよ」

「え、わたしを？ どうして？」

「……工藤君よ」

その言葉に、蘭は瞬間沈黙する。

「工藤君、って……もしかして、新一のこと？」

哀は、黙って頷く。元々、小学1年生にしては大人びていると感じ、無邪気な所も見たことのない蘭だったが、この時哀が自分を見る目は、いつにも増して真剣であると感じた。

（えっ、どういうこと？ 新一が哀ちゃんに今日のことを教えたの？ どうして？）

疑問が次々に湧いてきて、蘭が戸惑っていると、哀の目が動き、店の入口の方を向いた。

「……来たわ」

蘭が振り返ると、コナンがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「あれ、コナン君？」

コナンは蘭の言葉には答えず、そのまま2人のそばまで来て、止まった。ゆっくりと眼鏡を外す。そして、

「久しぶりだな、蘭。オレが、工藤新一だ」

……。しばらく場が沈黙し、店の中の音楽だけが3人の間に流れる。

「えっと、それって……」

「一応言っておくが、江戸川コナンと灰原哀がおまえをからかっているんじゃない。間違いなく、オレが工藤新一なんだ」

蘭が混乱する。これまで、何度かコナンが新一でないかと疑ったことはあった。だが、そのたびにコナンと新一が同時に存在する場面に遭遇し、最近「似ているが別人」を現実として受け入れ始めていたのだった。

「やっぱり、混乱させてしまったようね。続きは、博士の家で話さない？」

「そうだな。蘭、来てくれないか？」

「え？……ええ」

きょんとした表情を見せつつも、蘭は頷いた。

店を出て、博士の家へ向かう。道中、3人の間に会話は無い。ただ、蘭は、前で並んで歩くコナンと哀は真剣そのものであり、2人が冗談を言っていないと確信した。そして、今コナンの持つ雰囲気は、紛れもなくあの日自分に別れの電話をした新一であり、コナンが新一であるという事実を受け入れつつあった。

（本当に……コナン君が、新一だったの。でも、何で……）

体が小さくなったのか、そのことを話してくれなかったのか……あれこれ考えようとした蘭だったが、すぐに疑問の堂々巡りになることに気付き、コナンの言葉を待つことにした。

（新一が、今日、哀ちゃんを呼んだってことは……哀ちゃんが、新一の好きになった人なのかしら）

阿笠邸の玄関前に、3人が着く。ドアが開き、博士が3人を見る。

「おお、来たかね、新一、哀君、それに蘭君も」

「はい、お邪魔します」

蘭は、博士が新一と呼んだことを気にする様子もなく、いつものように挨拶をした。博士が3人を、ソファとテーブルの場所まで案内する。コナンは哀の隣に座り、蘭は2人とテーブルを挟んで向かいに座った。

「3人とも、コーヒーでいいかね？」

「ああ、頼む」

コナンが答えてから1分と経たず、博士が3人分のカップの載ったトレイを運んできた。

「そろそろ来ると思って、もう淹れておったんじゃ。ちょうど出来

上がったところじゃよ」

言いながら、博士は3人の前にコーヒーの入ったカップを置く。
「それじゃあ、ワシは話が済むまで、下におるわい」

博士が地下へ下りていき、ドアを閉める。それを確認してから、
コナンは蘭の方を向き、話し始めた。

「じゃあ、始まりから話していくか…… トロピカルランドまで行ったあの日、蘭と別れた後、オレはある組織の取引現場を目撃した…… その現場を見るのに夢中になってたオレは、背後からやってきた組織の仲間に気が付かなかった…… そいつに殴り倒され、組織で開発したという毒薬を飲まされた…… そして、目が覚めた時には、体が縮んでしまっていたんだ」

ふう、とここで1つ息を吐く。蘭はコナンを見て、真剣な面持ちで聞いている。

「そう、まさに今のオレの姿さ…… その後、博士の家に行き、事情を話した…… その時博士に、奴らはオレを殺すつもりだったから、オレが小さくなって生きていることを周囲に知られると奴らの耳にも入り、オレを再び殺しに来るだけでなく、事実を知った周囲の人間にも危険が及ぶから、誰にも言うなと言われた…… そんなことを話している最中に、蘭が家にやってきた…… 焦ったオレは、咄嗟に江戸川コナンと名乗った…… 江戸川コナン誕生の瞬間さ」

その後もコナンは、順に事情を説明していく。元の体に戻るためには薬のデータが必要で、組織を追う決意をしたこと。組織の情報を得るため、正体を隠して探偵事務所に居候したこと。小五郎があまりにヘッポコなので、腕時計型麻醉銃と蝶ネクタイ型変声機を使って代わって事件を解決していたこと。新一の両親には心配されたが、自分の力で事件を解決すると言ったこと。蘭に正体がバレそうになった時には、博士や哀に協力してもらって疑いを晴らしていたこと。服部平次には正体がバレてしまい、時々協力を要請していたこと。組織を追っていくうちに、連中の影響力は社会に深く根付いており、壊滅させるしかないと思ったこと。

「やがてジョディ先生をはじめとするFBIに会い、組織を打倒するために協力体制を築くことになった……そして今回の件で、組織を壊滅させ、決着を付けることができたというわけさ」

ここで、蘭が体を少し前に乗り出し、口を開いた。

「ちよつと待つて。壊滅させたとていうけど、全員が捕まったの？ そうじゃないのなら、まだ危険は残っているんじゃない？」

「ああ、逃げたメンバーはいるし、絶対に安全というわけではないよ。今もFBIや日本警察で、残ったメンバーの行方を捜査しているし。ただ、奴らの主だった拠点は潰したし、幹部クラスの奴らは全員逮捕されるか、死亡してる。今回の件で、奴らの存在は世界中の警察に知れ渡ったし、捜査や監視が続く中で、残った末端の奴らが集まったところで、以前のような脅威にはならないと見てるんだ」

「そうなんだ……でも、もうわたしに話しても大丈夫だったの？」

「FBIは反対したさ。ただ、これ以上オメーに隠し事を続けるのは辛いって、わがまま言ったのさ。何度もお願いして、条件付きで話してもいいってことになった……条件つてのは、オメーも秘密を知った以上、危険にさらされる可能性があるから、時々FBIや日本警察で見張らせてもらうってこと。あともう1つ、オメーから誰にも、おっちゃんやおばさん、園子にも、このことを話さないよう約束させるってことだ。どうだ、約束できるか？」

「うん、お父さんにも話したりしないよ」

「そうか、ありがとな。あと、オレが勝手に組織のことに首を突っ込んでしまったせいで、おまえにも危険が及ぶ可能性ができたわけだけど、ごめんな」

「ううん、わたしとしては、新一が本当のことを話してくれて嬉しい。信じてる人から本当のことを話してもらえないのって、すごく辛いから……」

そこまで言うと、蘭とコナンは、顔を見合わせて微笑んだ。哀は2人から目を逸らし、コーヒーをすすっている。

「えっと、それで、あの……」

「何だ？」

「もう1つの話のことなんだけど……」

「ああ、そうだったな」

組織の話をしたことで幾分和らいでいたコナンの表情だったが、ここで再び厳しさを取り戻した。

「オレが好きになったのは、灰原哀、こいつだ」

哀は、目を逸らしたまま、微かに頬を赤くした。

「うん、そうなんだ……でも、哀ちゃんは小学1年生だけど、やっぱり新一みたいに……？」

そこまで聞くと、哀は逸らしていた視線を蘭に戻し、正面から見た。

「ええ、そうよ。私も彼と同じ薬を飲んで、幼児化したの。私の本名は、宮野志保。組織の元一員で、私と工藤君が幼児化した毒薬を作った、開発者なの」

（——！）

これに蘭は驚きを通り越し、声が出ない。

「そう、私は工藤君と蘭さんの人生を狂わせた張本人。だっていうのに、私は——」

哀の声が自然と大きくなり、思わずソファから立ち上がる。

「哀。あとは、オレから話す」

コナンも立ち上がり、右手を哀の前に出して制した。2人が再度座った後、コナンが続ける。

「今言ったように、哀は元組織の一員で、薬の開発者だった。哀のお姉さんも同じ組織の一員だったけど、お姉さんが組織の奴らの手にかかって殺された。そのことに抗議し、抑留され、死ぬつもりで例の毒薬を飲み、結果的に幼児化してその場を逃れ、組織から離反した。そして阿笠博士のところに転がり込み、オレと一緒に組織を潰す協力関係になった」

「ちょ、ちょっと待ってよ……さっき、薬の開発者だって言っただけ……それって……」

蘭が口ごもる。犯罪者、という言葉が頭に浮かんだのだろうか。蘭の顔に、嫉妬を含め、複雑な感情が浮かぶ。哀もそれを察し、俯いてしまう。

2人の様子を見て、コナンは視線を落としてしばらく考えていたが、やがて意を決したように顔を上げた。

「蘭、落ち着いて聞いて欲しい……オレ、今回の事件で、人を殺しちゃったんだ」

「……………えっ!？」

蘭の顔が驚きでひきつり、血の気が引いていく。

「く、工藤君!？」

そこまで話すとは思っていなかったのか、哀も驚き、思わず両手でコナンの右腕を掴む。しかし、コナンは哀の方を見て、大丈夫、と目で訴える。

「いや、蘭には全部話しておきたい……オレは、組織と決着を付ける時に、組織の一員を撃ちまったんだ……」

再び、コナンは蘭に顔を向けた。

「で、でも……新一のことだし、わけがあるんでしょう?」

「ああ……奴らの本拠地に潜入した時、奴らの一員に見付かり、銃を向けられたんだ……そのままじゃ、殺されちゃう……そこで一か八か、オレは奴の懷に飛び込み、銃を奪おうとした……何とか銃は奪えたんだけど、奴はもう1つ銃を持っていて、それをオレに向けてきて、それで……そ、それで……オレは……」

「工藤君、もういいわ!」

当時の記憶がよみがえったのか、コナンの声が震え、哀が悲痛に割り込んだ。蘭は、その時にコナンが発砲したことを察した。場に、重い沈黙が流れる。

しばらくした後、口を開いたのは蘭だった。

「でも……向こうが撃とうとしてきたんだし、新一は正当防衛になるんじゃないの?」

「ああ、そうなるんだろう……オレだって、頭ではそう思っていた。

でもその後、オレは悩んだ……相手が悪人で、やらなければ自分が殺されていたんだとしても、命を奪ったのが正しいことなのかって正直、今でもよくわからねえ」

蘭の反応を見ながら、ゆっくりと話していく。蘭が神妙に聞いているのを確認し、コナンは続ける。

「ただ、オレが悩んでいた時、哀が言ったんだ。『私は、自分の作った薬で何人も死なせてしまった。その事実は決して消すことができない。だからこれから先、償っていく方法を考えなければならぬ』って。哀だって、毒を作りたかったわけじゃなくて、組織に命令されて作っていたんだけど、その薬で人が死んでしまったことに責任を感じていたんだ。それって、人を撃っちまったオレと似てるって思った。それで、オレも人を殺しちゃったことが事実なんだからこれから先償っていくことにしようって思ったんだ。同時に、その時の哀の言葉で、哀もこれまで人を死なせてしまったことを悩んでいたって気が付いた。そうしたら、急に哀のことが気になり出したんだ」

「うん……」

「それで、組織と決着を付けた後、哀にこれから先、どうするつもりなのか聞いたんだ。そうしたら、哀は『これまで多くの人を死なせてしまった分、これからは1人でも多くの人を救うために生きていきたい』って答えた。しかもそれだけじゃなくて、『犯してしまった罪を償わないといけないから、私には幸せになる資格がない』って……それを聞いて、無性に腹が立った。哀は組織に命じられて薬を作ってただけで、死なせたことで苦しんできたっていうのに、組織が壊滅した後もそのことに縛られるなんて……これまで辛い目に遭って、それでも頑張ってきた奴が幸せになれないなんて、オレには放っておけなかった……哀のことが、どうしようもなく好きになつていたんだ」

「……」

「だけど、蘭には『待ってて欲しい』と言ってたし、哀と付き合う

には蘭を裏切らなくちゃならねえ。かといって、約束を守るために哀への想いを残したまま蘭の元へ戻るのは、蘭に対して失礼だ。どうしたらいいのか……そこでオレは、これから先俺がどう生きていきたいかを考えたんだ」

ここでコナンは一息つく。2人とも黙って聞いているが、蘭は少し、辛そうな顔をしている。

「オレは、さっきも言ったように、人を殺しちゃったことを償っていきたい。オレにできる償いは、探偵として、1人でも多くの殺人を止めることだと思った。オレ自身、人を殺すのがすごく辛いことだってわかったし、殺された人やその関係者も悲しい思いをする……そんな思いは、もう誰にもさせたくねえ。だから、殺人を未然に防ぎたい。殺人を防ぐためには、殺人者の気持ちを理解しなくちゃできない……だから、普通の高校生の新一じゃなく、殺人者のコナンとして生きていこうと思った」

「ちょ、ちよつと待って。新一は、元の姿には戻らないの？ まだちゃんと聞いてなかったけど……」

「ああ、こつちも話してなかったな。これまで何度か元の新一の体に戻ってたけど、あれはあくまでパイカルを元にした偶発的なもので、長時間その体を保つことはできなかった。今回組織と決着を付ける時に、例の薬のデータは手に入れたし、これで完全に元の体でいられる解毒剤だって哀に作ってもらうことは可能だ……というより、元々そのために組織を追ってたんだからな。だけど、哀が解毒剤を作る前に、オレはコナンとして生きる決意をして、作らなくていいって言ったんだ」

「……どうして？ 哀ちゃんと一緒に、暮らしていききたいから？」
蘭が、悲しい顔で言った。

「もちろんそれはあるけど、それだけじゃない。一番大きいのは、さっきも言ったように、誰にも殺人をさせないような、世界一の探偵になるためだ。殺人を止めるには、殺人者のコナンじゃないとできないと思うんだ。別にこのことを誰かに言うつもりはねえけど、

俺自身、犯した罪を忘れないためにな。そして、これから先は小学1年生の探偵としてやり直し、できるだけ多くの人と交流して、人が殺意を抱くまでの過程とか、いろいろ勉強していききたいと思うんだ」

一旦切ってから息を整え、コナンが続ける。

「でも二番目には、やっぱり哀のことがあった。哀は、元の体に戻るつもりはなかったんだ。そして、その原因はオレにもあった。オレは、哀の大切な人を守ってやれなかった」

「そうなの？ 哀ちゃん」

蘭が哀の方を見た。

「ええ、私は戻らないわ。私の両親は早くに亡くなっていて、家族は姉と私の2人だけだった。その姉は、組織から私を抜けさせるために組織に入り、逆に組織の仲間の手にかかって殺された……工藤君は、その姉を追っていたの」

「広田雅美を覚えているか？ 10億円強奪事件の犯人で、自殺した……本名は宮野明美といって、彼女が哀のお姉さんだったんだ。公には自殺したことになってるけど、本当は組織の奴らに利用されて強奪をさせられ、殺されたんだ。オレが……もっと早く気付いていれば……」

再び、場が沈黙する。しばらくしてから、コナンが口を開く。

「哀を不幸にしまったことに対し、償うにはどうしたらいいか……それは、哀のそばにいてやることだと思った。それに、オレ自身、蘭と哀と、どっちが好きなのか。蘭には悪いけど、オレは哀の方が好きになってた……だからオレは、コナンとして生きる決意をし、蘭には別れると言い、その上で哀に想いを告げた」

「……それで。哀ちゃんは……」

「私は、蘭さんが工藤君を想っていることも、工藤君が蘭さんを大事にしていることも、知っていた……それでも、私は彼への想いを止められなかった……初めて会った時から、ずっと好きだったの……」

……」

哀は、目を伏せたまま言う。

「だから、彼に好きだって言われた時、私はあなたのことが頭に浮かんだけど……彼と一緒にいたいって、言ってたわ……」

蘭は、どんな気持ちで聞いていたのか。今にも泣き出しそういで、どこか諦めのようなものを感じた表情をしている。

「そっかぁ……」

しばらくして、蘭が言った。

「あの日、わたしが思った通りになっちゃったな……」

（……？）

コナンと哀は、首を傾げる。

「あの日、トロピカルランドで新一と別れた時、もう二度と会えないような、嫌な予感がしたの……また、こうして会えたけど、何だか随分遠いところに行っちゃったなあって……でも……」

目に涙を溜めているが、零さないように堪え、続ける。

「わたし、まだ……新一に、言っていないことが、あったから……言わないと……」

その言葉で、哀の顔に緊張が走る。蘭は天井を見上げ、しばし沈黙する。

（工藤君が好きって、言うのかしら……）

だが、哀の心配は杞憂に終わった。ほどなくして、蘭は再びコナンを正面から見て、言った。

「新一。お帰りなさい。ホント、会いたかった……」

そして、蘭は穏やかに微笑んだ。

「あ、ああ……ただいま……」

コナンは、ぎこちなく返事をする。

（強いわ……やっぱり、蘭さんには敵わない……）

哀は、蘭の笑顔が眩しく、直視できなかった。

第14章：今後

「それで、2人はこれから先どうするの？」

「コーヒーを淹れ直し、少し落ち着いたところで、蘭が言った。コナンと哀は、顔を見合わせる。先に、コナンが口を開いた。

「オレは、さつきも言ったけど、世界一の探偵になるため、このまま小学1年生から勉強し直す。それで、探偵事務所で情報を得る必要はもうなくなったし、オレも居続けるのは辛いから、しばらくは博士の家に厄介になろうと思う」

哀は黙って聞いていたが、コナンの方を向いてわずかに目を見開いた。

（まあ、彼と一緒にいられる時間が増えるのは嬉しいけど……それにしても突然ね）

「父さんと母さんには、これから事情を話していく。多分、反対はされないと思うけど……その先どうなるかまでは、まだわからない。結局、工藤新一は失踪して、江戸川コナンを養子にする、ってことになるかもしれない」

「そうだね。新一のお父さんとお母さんにも話さないと。まずは、そこからだね」

蘭は頷く。その後、今度は哀の方を見た。哀が口を開く。

「私も、元の体には戻らず、しばらくはこれまで通り博士の厚意に甘えるわ。そして、今まで多くの人を死なせてしまった分、これからは1人でも多くの人を救っていききたい。これからは、人を助けるための薬を作っていきたいの」

「うん……」

蘭は少し視線を落として微笑んだが、まだ複雑な感情が顔に浮かんでいる。

「蘭。これまで本当に、すまなかった」

「私も。本当に、ごめんなさい」

コナンに続き、哀も立ち上がり、頭を下げる。蘭は少し驚いた表情をしたが、2人に座って顔を上げるよう言った。2人が座った後、まず目線をコナンに向けた。

「新一。わたし、あなたから好きな人ができたって電話があった時、ショックだったのと、悲しかったのと、両方あった。新一のことだからわけがあるって、頭ではわかっていたけど、正直、少し恨めしかった。でも新一は、わたしには想像もできないくらい、たくさん苦労してきたんだよね。それに、今度の約束は、ちゃんと守ってくれたし。これまで、新一のことは好きだったし、これからも、ちょっと形は変わるけど好きだから、あなたらしく生きて。わたしのことは大丈夫だから……本当に、ありがとう」

「ん、ああ……」

コナンは、照れくさそうに頬を掻き、視線を宙に泳がせた。続いて、蘭は哀に視線を移す。

「哀ちゃん……いえ。志保さん、だったかしら」

「……哀でいいわ」

哀は、蘭の目を正面から見る。

「それじゃあ、哀ちゃん。わたし、あなたのことを急に認めることはできないかもしれない。哀ちゃんのこと、もう犯罪者だなんて思わないけど、新一のことを急に取られたっていう気持ち、まだ消えてないから。でも、新一を任せられるのはあなたしかいないと思うし、わたしもあなたを認めるよう努力していきたい。だから新一のこと、よろしく頼むわ」

「……ええ。工藤君は、私を守るわ」

哀は、蘭から目を逸らさず、はっきりと言った。

3人の会話が一区切りし、幾分雰囲気は緩やかになってきた時、地下室のドアが開き、博士が顔を覗かせた。

「あ、博士」

蘭の言葉で、コナンと哀も振り返って博士の方を見る。

「あ、ああ……まだ、話の途中じゃったか」

博士は少し気まずそうな表情をしている。

「いえ、もう済んだわよ。ね？」

蘭はコナンに視線を送る。

「ん。まあ、そうかな」

コナンは頷きつつ、調子を合わせた。

「そうか。どうやらその様子なら、丸く収まったようじゃのう」

博士が3人の方へ歩いてくる。

「丸く収まるって何よ。別に、喧嘩しに来たわけじゃないんだからね」

「そうそう」

「そうだ、博士。新一がこれまで使ってきた博士の発明品ってどんなものなのか、見せてくれない？　ちよつと興味あるんだけど」

「ああ、構わんが……」

蘭は立ち上がり、博士に付いて発明品の置いてある一角へと歩き出す。コナンと哀は座ったまま、蘭が離れていくのを見ていた。

コナンが向かいの壁の時計を見ると、もう3時になるうとしていた。不意に、コナンの右手が哀に握られる。コナンは哀を見た。

「哀？」

「……………」

哀は答えない。顔を伏せ、コナンを握る手に力を込める。その手が震えている。

（やつぱり、実際に会うと辛いかな……）

コナンは、無言で哀の手を握り返した。

博士から蘭への発明品紹介が済み、2人がソファのそばに戻ってきた後。

「それじゃ、わたしはそろそろ帰ろうかな。新一も一緒に帰る？」

「ん？　ああ……いや、ちよつと……」

コナンは、俯いたままの哀と、握られた手を見る。蘭もその視線で察した。

「そっか……それじゃあ、また後でね。そうだ、帰ってからお父さんの前で、新一って呼ばないようにしないと」

言いながら、蘭は玄関へ向かって歩いていく。スリッパから靴に履き替えたところで、

「じゃあ、新一。哀ちゃんのこと、大事にしてあげてね。わたしは大丈夫だから……」

(――！)

蘭の言葉に、哀が顔を上げて蘭を見る。蘭は振り返り、ドアを開け去っていく。後には、コナンと哀と博士が残る。

――お姉ちゃんは大丈夫だから……

哀の中で、あの日の明美の笑顔と、先の蘭の笑顔が重なる。

「うつ……うつ……」

哀が右手で口元を押さえ、嗚咽を漏らす。

「どうしたんだよ、哀？」

コナンが握っていた哀の手を離し、肩を抱き寄せた。

「本当に……これで、良かったのかしら……？」

哀の目から涙が溢れ、頬を伝う。

「今更何を言ってるんだ。オレはおまえが好きだって言ったし、おまえだって付き合ってたって言ったろ？ だったら、何も迷う必要はないだろ。それとも、オレが信じられねえっていうのか？」

「ち、違っの……そうじゃない……私だって、あなたが好きだし、あなたの気持ちも、信じてる……でも、私なんか、蘭さんからあなたを奪うなんて……だって、私には、蘭さんに敵う部分なんて、何一つないのよ……それに……」

「それに？」

「お姉ちゃん……」

「お姉ちゃん？」

思いもよらぬ言葉に、コナンは戸惑う。

（何で、お姉さんの話が出てくるんだ？）

「お姉ちゃん……ご、ごめんなさい……」

（……？ 何で、蘭じゃなくて明美さんなんだ？ ……いや、待てよ。確か、前にも蘭で、こんなことが……）

コナンは天井を見上げ、赤井の言葉を思い出す。

——また泣いているのか……おまえはいつも泣いているな……

——……いけませんか？

——いや……思い出していたんだ……おまえによく似た女を……平静を装って影で泣いていた……バカな女のことを……

——まさか……

（まさか、蘭と明美さんが似ているから、哀は重ね合わせて見ていたっていうのか？）

再び、コナンは哀の顔へ視線を戻す。哀は泣きやまない。

「おまえ、まさか、蘭と明美さんが似ているから……」

「……っ！」

哀は答えないが、肩に緊張が走る。その反応で、コナンは凶星だとわかった。

（そうか……それなら、会ったびに思い出されるだろうし、余計に辛いだろうな……）

コナンは、左手で哀の右肩を寄せ、正面から向き合う。哀の右手が、口元から落ちた。

「大丈夫だ……これからは、ずっとオレと一緒に……」

「うつ……うつ、……うん……」

哀は頷いたが、まだ肩を震わせている。

「哀」

右腕を哀の背中に回す。そして、コナンは俯いた哀の顔に下から自分の顔を近付け、そのまま口付けた。

「ん……」

哀は驚いたように目を開けたが、すぐにまた閉じ、控えめにコナンの舌を受け入れた。

（やれやれ、仲が良いのはいいんじゃないが……ワシがおるのを忘れておらんかのう）

声を出すわけにいかず、かといって今からその場を去るのも躊躇われ、博士が立ち尽くしていた。

第15章：転機

1週間が過ぎた。3月下旬ということで学校は春休みに入っていた。

コナンと哀で蘭に真実を話した後、コナンは両親にも事情を話していた。2人とも困惑したものの、「犯した過ちを償い、哀と共に過ごしていきたい」というコナンの熱意に、最終的には折れる形で了承した。新一の扱いについては、当面は失踪届や死亡届は出さずに保留することとした。

ちなみに、蘭に真実を話した2日後には、コナンは探偵事務所を出て阿笠邸で生活を始めていた。その際、有希子が江戸川文代に扮し、小五郎と蘭にコナンが博士の家に住む旨を伝えたが、「灰原哀ちゃんをお嫁に迎えに行くと言って聞かない」と理由を説明していた。小五郎は驚いた様子であったが、「強ち外れでもない」とコナンは苦笑し、蘭は幾分寂しさの残る笑顔で送り出した。

そして、両親が仕事の関係で再度海外へ行くことになった日のこと。

両親の見送りが済んだコナンは、米花駅そばのコンビニ前で、転倒する人物を見た。近くにいた女性から、飛んだ丸眼鏡を拾ってもらい、頭を下げる小柄な少年——本堂瑛祐だった。

（あれ？ あいつは、本堂瑛祐か？ アメリカに行ったんじゃないのか）

コナンは瑛祐に近付き、声をかけた。

「よう、本堂。どうしてここにいるんだ？」

コナンの声に、瑛祐は振り返る。

「え？ あ、ああ、工藤新一さん。こんにちは」

「どうしたんだ？ アメリカに行ってるんじゃないのか？」

「実は、CIAの知人から、姉がまた負傷して入院したと聞いたの

で……様子を見に来たんです」

その言葉で、コナンは思い出した。組織と決着を付ける前、バーボンこと沖矢昴を打倒する際、水無怜奈が負傷し、一時昏睡状態になっていたことを。

「ああ、そうか。それで、もう会ってきたのか？」

「はい。まもなく退院できると……良かったです」

しばらく、立ったまま世間話が続く。ふと、瑛祐が思い出したように言った。

「ところで、新一さん。蘭さんは、元気になっていますか？」

「ん？ ああ……まあ、元気ってことになるんだろうけど……」

コナンは瑛祐から視線を逸らし、言い淀む。瑛祐は少し心配そうにコナンの顔を覗き込んだ。

「どうしたんです？ 喧嘩したんですか？」

「いや、喧嘩じゃないけど……」

どこまで話したもののか。しばらく逡巡していたが、やがて口を開いた。

「実は、蘭とは別れたんだ」

その言葉に、瑛祐は口を少し開いたまま硬直した後、驚きの表情を見せた。

「……え、ええ！？ そんな、どうして？」

「オレが、他の奴を好きになったから」

「で、でも……新一さん、あんなに蘭さんのことを気にかけてたじゃないですか」

「まあ、話せば長くなるんだけど……」

一旦切って、コナンは周辺を見回した。

「どっか、その辺入って話さねえか？」

真剣な顔で、瑛祐を見る。

「え？ ……はい、わかりました」

瑛祐は、右手で眼鏡をかけ直し、やはり真剣な表情になった。

近くのファーストフード店に入った後、コナンは、自分の体が小さくなった経緯、黒の組織やFBIとの関係、先日組織と決着を付けたこと、蘭ではなく哀と付き合うことにしたことなどを話した。ただ、哀が元組織の一員であることや薬の開発者であったこと、自分がウォッカを撃ったことは伏せておいた。

「それで、僕にここまで話すことは、蘭さんは僕に任せるってことですか？」

瑛祐は椅子に座り、向かいのコナンを正面から見て言った。

「そこまでは言わねえよ。蘭には蘭の事情があるだろうし」

「そうですか。でも、今なら僕が蘭さんに告つてもいいってことですな、新一さん？」

「……ああ、好きにしろ。ただ……」

一旦視線を逸らし、テーブルの上のアイスコーヒーを口にした後、再び瑛祐を見て、続ける。

「蘭はオレにとって一番じゃなくなったけど、今でも蘭のことは好きだし、大事な幼馴染であることに変わりねえ。蘭をこれ以上泣かせたら、許さねえからな」

「わ、わかりました！」

「ああそれと、新一さんってのはやめてくれ。オレはもう工藤新一じゃなく、江戸川コナンとして生きていくんだから」

「わかりました。では、江戸川さん。今から蘭さんに告りに行きますんで、付いて来てください」

「え？ 今からか？」

「当然です。善は急げ、ですよ」

瑛祐は立ち上がり、コナンの手を引っ張った。

「お、おい」

瑛祐に手を引かれるまま、コナンは店の外へ出た。

探偵事務所まで行く道中。コナンは、両手をズボンのポケットに入れて瑛祐の左隣を歩きつつ、瑛祐が最初に蘭に告白したいと言っ

ていたことを思い出していた。そして、今のこの状況と比較する。

「ふふっ」

その奇妙さに、思わずコナンは噴き出してしまっていた。

「な、何ですか？」

瑛祐は、何がおかしいのかわからないといった様子で、コナンに顔を向けた。

「いや、不思議なもんだなと思ってよ」

コナンも瑛祐を見上げる。

「何がです？」

「おまえが最初に蘭に告白したいって言った時、オレはダメだつて言っただろ？ あれが結果的に役立ったなあつて。もしおまえがあのまま告白してても、蘭はきつとオレのことが頭にあつたから、断つたに違いねえ。あの時告白しなかったから付き合うチャンスができたなんて、おかしいじゃねえか。ま、蘭の気持ちかはつきりわかってる今だからこそ、言えることかもしれないけどな」

「……なるほど、言われてみればそうですね。でも……」

視線を少し落とした後、瑛祐は正面を向き、左手を胸元に上げて拳を作った。

「でも、何だ？」

「僕は、あの時告白して振られていたとしても、きつと蘭さんのことは諦めず、また告白するチャンスを窺っていたと思います！」

「……ま、そうかもな」

そして、2人は毛利探偵事務所を視界に捉えた。

第16章：瑛祐

瑛祐とコナンが探偵事務所前まで行くと、ちょうど蘭が階段を下りてきた。蘭が顔を上げたところで、瑛祐と目が合い、立ち止まる。

「あ……ら、蘭さん。こ、こ、こんにちは」

瑛祐は顔を赤くし、肩を緊張させる。蘭は少し驚いた表情を見せ、瑛祐の半歩後ろにコナンがいると気付く。

「あら、瑛祐君と新……コナン君じゃない。どうしたの？」

思わず新一と言ってしまいそうになったが、踏みとどまった。瑛祐は視線を少し泳がせた後、正面から蘭を見る。

「ええと……蘭さんに、お話があつて来たんですが……い、今からお時間ありますか？」

「今から？ うん、大丈夫だけど……」

頷きつつ、蘭が答える。

「そ、そうですね。じゃあ、江戸川さんも一緒に、どこかその辺入りましょう」

「えっ、どうしてコナン君も一緒なの？」

「いえ、是非江戸川さんにも聞いてもらいたいことなので……」

「そうなの？」

言いながら、蘭は瑛祐の後ろのコナンを覗き込んだ。コナンは苦笑しつつ、無言で蘭に目配せする。

（え……もしかして、瑛祐君は新一の正体を知っているの？ それで新一に聞かせたいってことは……もしかして、その話っていうのは……）

おおよそ、蘭にも話の見当が付いた。

「そう……じゃ、ポアロでいい？」

大きな窓ガラスの奥を指差しつつ、蘭が言った。

「は、はい！」

「ぼ、僕、蘭さんのことが好きなんです！」

3人分の飲み物がテーブルの上に置かれ、ウェイトレスの榎本梓が盆を下げて離れるなり、瑛祐は背筋を伸ばして言った。声が大きかったため、梓は驚いたように振り返り、周囲の客も視線を蘭と瑛祐に向ける。

「ちょ、ちよつと……声、大きいって……」

蘭は気恥ずかしさで顔を赤くし、視線を周囲に向けつつ小声で言う。コナンも慌てた様子で周りを見る。

「あ……す、すみません……」

瑛祐は背中を丸め、照れたように頭をかき、周辺に愛想笑いを振りまく。しばらくして、周囲の注目が3人から離れてきたところで、瑛祐が気を取り直したように言う。

「えつと……改めて、ですけど……僕は、蘭さんのことが好きです」

今度は、普通に会話するぐらいの声である。瑛祐は頬を染め、まっすぐに蘭を見る。

「うん、そうなの……」

頷いて、蘭も瑛祐を見る。

「は、はい……初めて会った時に、一目惚れしまして……会えば会うほど、優しい人だとわかりまして、かわいいと思うようになり、とても、大事にしたいと……こ、こんなことは、初めてだったんです……だから、もし蘭さんが良ければ、その、付き合っただけしいと思ひまして……」

「……………」

蘭は、特に白ける様子もなく、瑛祐を見ながら黙って聞いている。ふと、左隣に座るコナンの方を見た。その視線に気付き、コナンはぎくりとして蘭を見上げる。

「な、何？」

「……ううん、別に」

再び、蘭は視線を正面の瑛祐に戻した。瑛祐は、おずおずと口を開く。

「あの……蘭さんは僕のこと、どう思っていますか？」

「わたし？ わたしは……」

蘭は、自分の頼んだ紅茶に視線を落とした後、顔を上げた。

「わたしも、瑛祐君のことは好きよ」

その言葉に、瑛祐は瞬間沈黙する。やがて、瑛祐の頬はさらに紅潮し、喜びの表情を見せる。

「ほ、本当ですか？ それじゃ——」

「でも、今すぐ付き合うつてわけにはいかないかな」

「え……そ、そんな、どうして？」

「わたし、新一よりわたしを想ってくれる人じゃないと、付き合う気ないから」

「あ……う？」

（ゲッ……）

瑛祐は口を開いたまま表情を硬直させ、コナンは顔を赤くした。

「じゃ、じゃあ……」

「瑛祐君がもつといい男になって、わたしのことを大事にしてくれるってわかったら、その時付き合ってあげてもいいわよ」

「う……」

瑛祐は下を向いてしまう。

（おいおい……）

コナンは赤い顔のまま、蘭を見上げる。蘭もコナンに顔を向けた。あら、コナン君どうしたの？ ……ひょっとして、妬いてる？」

蘭は顔を少し傾け、笑顔を見せる。

「い、いや、あの……」

「何よ。わたしが新一と比べるのが、気に入らないの？」

「う……いや、その……」

（いや、嬉しいけど……オレの前で、そんなこと言うなよ……）

瑛祐はしばらく俯いていたが、再び顔を上げ蘭を見た。

「あ、あの、蘭さん！ じゃ、じゃあ、今すぐ付き合うのはダメでも、一緒に遊びに行くとかならいいんですね？」

その言葉に、蘭も瑛祐に視線を戻す。

「え？ それはいいけど……」

「でしたら、これから映画を見に行きませんか？ 昨日アメリカから日本に来たばかりで、見たい映画があっただんです！」

「うーん……」

人差し指を口元に当て、少し上の方を見た後。

「まあ、今日は用事もないし、行きましようか」

再び瑛祐を見て、蘭は言った。

「ありがとうございます！ じゃあ、江戸川さんとはこの辺で……」

「あら、何よ。コナン君に話は聞かせておいて、映画には連れて行つてあげないの？」

「あ……それは……」

「いや、ボクはいいよ」

瑛祐が返事に窮したのを見て、コナンは立ち上がった。

「あら、そう？ それじゃ、コナン君、またね」

「うん」

「蘭さん、僕達も出ましよう」

言いながら、瑛祐は立ち上がる。

「もう？ 早いね」

蘭も立ち上がり、結局、3人一緒に店を出た。

「えっと、それじゃ……近くでどこに映画館があるか、教えてくれませんか？」

ポアロの入口から出てすぐのところで、瑛祐はそんなことを言う。

「あら、知らないの？ 瑛祐君から言い出したのに」

「いや、昨日日本に来たばかりなので……」

「もう、しょうがないわね。それじゃあ、わたしが案内してあげる」

「すいません……」

瑛祐と蘭は話しつつ、歩道を歩き始める。コナンは、そこで2人に別れを告げた。

「そうだ、瑛祐君は新一が今どうしてるか、知ってるの？」

コナンと別れた後、蘭は瑛祐を見て言った。

「え？ あ、はい。知ってますけど……」

瑛祐はコナンのいた側を振り返って言う。もう、コナンの姿は10メートルほど離れていた。

「へえ。どうやって知ったの？」

「あ、それはですね……」

言いながら、2人は歩いていく。コナンはその場に立ったまま、並んで歩く蘭と瑛祐の後ろ姿を見つめている。

（蘭、良かったな……おまえを想ってくれる人が、他にもいて……）
蘭はちらりと振り返り、コナンを見る。また瑛祐を見て、歩いていく。

（わたしだって、新一ほどじゃないけど、成長してるんだから……あんまりバカにしないでよね……）

「つまり、お父さんが眠りの小五郎をやり出したことから、コナン君が新一だって推理したんだ。瑛祐君って、結構頭いいのね」

「い、いやあ、それほどでも……」

「でも、ちよつと見直したぐらいで調子に乗らないでよ。まだまだ、新一の足元にも及ばないんだから」

「は、はい！ 頑張ります！」

瑛祐は、蘭と話しつつ、決意を新たにする。

（僕はきつと、新一さんより立派になって、また蘭さんを迎えに来ます！）

第17章：事件と日常

春休みが終わり、4月になった。始業式の日朝、コナンと哀はランドセルを背負い、並んで学校への道を歩いていた。

「ついに、二度目の小学2年生になったか…… ホント、去年はこれまでで一番いろんなことがあった1年だろうけど、振り返ってみると、何だかあつという間だったな……」

「あら、私は長かったわよ？ 組織を抜けて、いつまた殺されるかもしれない、平穏な日常なんて訪れないって思ってたけど……」

2人の距離は、お互いの肩が触れそうなぐらいに近い。

「そうだな。もう、組織のことは気にしなくても良くなったんだよな……ま、オレはこれから、探偵としての長い戦いの日が続くわけだけど……」

組織のことを口にしたことで、コナンはあることを思い出し、哀の側に顔を向けた。

「そういえば、組織と決着を付ける前、おまえ言ってたよな。組織を倒すことと、蘭と一緒にになること、どっちかしか選べないって。確かに、おまえの言った通りになったな」

哀もコナンを見た後、少し空を見上げる。日はやや高く、筋状の雲がかかっていた。

「まあ、こうなることを予想して言ったんじゃないけどね。あなたのそれまでの行動が、早く蘭さんの元へ帰りたいっていう気持ち強いあまりに、少し軽率に思えたのよ。まあ、蘭さんへの嫉妬もあったんだと思うけど。でも、組織を倒して、しかもあなたと一緒ににいられるなんて、ホント夢みたい……」

再び、哀はコナンを見る。

「オレだって、こうなるなんて予想できなかったさ。わからねえもんだな」

コナンが言った後、哀は視線を少し歩いていく側へ向けた。

「……後悔、してない？　蘭さんじゃなくて、私を選んで、また小学生からやり直しになったこと……」

「するわけねえだろ。オレ自身、探偵としてはまだまだ未熟な部分が多かったし、勉強し直すのにいいきっかけになったと思ってる。それに、もし奴らと決着を付ける前に蘭に言うことを言ったら、あの時にオレはおまえを1人で行かせて、結局薬のデータは手に入らず、おまえを失い、組織も倒せてなかったかもしれない。だからきつとこれで良かったんだ」

コナンも前を向く。ガードレールの先を1台の車がすれ違った後、コナンは哀を見て口を開いた。

「そういうおまえは、どうなんだ？　組織を倒した後、オレが新一に戻って、蘭に告白してた方が良かったと思うか？」

「え、私？　私は……」

少し考えてから、哀はコナンへ顔を向ける。

「過去はどうだったとしても、私は、好きな人と一緒にいられる、今がいいって思っているわ」

「おいおい……」

コナンは照れたように顔を赤くし、視線を哀から逸らした。

（しかしまあ、オレも哀も、こうなって良かったって思ってるんだな……）

ふと、コナンが足を止めた。哀も立ち止まる。2人が向き合い、お互いの目を見つめる。

「哀……」

「工藤君……」

2人が目を閉じ、唇を近付けた時。

「おい、コナンー！　灰原ー！　何やってるんだよー！」

「遅刻しちゃいますよー」

「2人とも、早く早くー！」

30メートルほど離れた先から呼びかける元太と光彦と歩美の声

で、通学途中だったことを思い出す。2人は目を開け、声がした側へ顔を向ける。

「邪魔が入ってしまったわね。それじゃ、続きはまた後でね、工藤君」

哀が先に歩き出す。

「ああ、そうだな……つと、その前に……」

コナンは立ち止まったまま、ふと思い出して付け加える。

「おまえさあ……オレはもう新一じゃないんだから、工藤君ってのはやめねえか？」

「……それもそうね。それじゃあ……」

しばし沈黙した後。

「行きましよう、コナン」

「ああ。ずっと一緒だ、哀」

コナンは言った後に歩き、哀の隣へ並ぶ。哀は右腕をコナンの左腕に絡ませ、体を寄せた。

「お、おいおい……何だよ、急に……」

コナンは顔を赤らめつつも、満更でもなさそうに哀を見て言う。

「いずれ、あの子達にも言わなくちゃいけないでしょう？」

哀も頬を染めつつ、コナンの肩に頭を乗せるように寄りかかる。

「う、うーん……確かにそうだけど……光彦がおまえを好きだったこと、知ってるのか？」

「もちろん知ってるわ。そういうあなただって、吉田さんには随分気に入られてるじゃない？」

「いや、まあ、そうだけどさ……」

コナンは視線を哀から逸らし、右手で頬をかく。視界の端で、元太が驚いて目を丸くし、光彦が顔を赤らめ、歩美は笑顔のまま硬直しているのがわかった。

「でもそれにしたって、いきなりこれじゃ、アイツらには刺激が強いだろ？」

再び哀の方を見て、言った。

「そうね。それじゃ、あの子達の前ではほどほどにすることにして……行きましよ、コナン。あの子達に、ちゃんと説明しないと」

コナンと哀は少し体を離れたが、手はしっかりとつないだまま、3人の元へ歩き出した。

「ね、ねえ……どうして、コナン君と、哀ちゃんが、手をつないでいるの？」

強張った表情をしつつ、まず歩美が口を開いた。

「ああ。実は、オレと哀は付き合うことになったんだ」

「おお、コナンが灰原を名前で呼んだ！」

元太が驚いて大声を上げた。

「し、小学1……いえ、2年生なのに……もう恋人として、付き合うんですか!？」

光彦は歩美の右後ろから体を乗り出して言う。

「そうだけど……別にいいだろ、好きになったんだし……」

「ほ、本当かよ？ 灰原」

元太は歩美の左後ろから前に出る。コナンと歩美の間に立つ恰好になった。

「ええ、本当よ。彼が私を好きだって言ってくれて、私も彼のことは好きだったし、付き合うことにしたの」

「そ、そんな……哀ちゃん……前は、コナン君のこと……そんな目で見てないって、言ってたのに……」

言いながら、歩美は目を潤ませる。哀は歩美の顔から目を伏せた。

「……そうね、ごめんなさい……本当は、最初に会った時から、コナンのことは好きだったの——」

「おお、灰原もコナンを名前で呼んだ！」

元太は再び驚いて声を上げたが、哀は聞こえなかったかのように顔を上げ、続ける。

「——でも、彼にはずっと好きだった人が他にいて、その人にはとても敵わないと思って……だから、あんなことを言ってしまった

の」

「え……コナン君の好きだった人って……やっぱり、蘭お姉さん？」

「ええ、そうよ。ね？」

哀が右のコナンを見る。

「ん？ ああ……そうだけど……」

コナンが答えた後、歩美は今度はコナンを見た。

「でも、蘭お姉さんには、新一お兄さんっていう、恋人がいたから……だから、蘭お姉さんのことは諦めて、哀ちゃんを好きになったの？ コナン君……」

「まあ、その辺は話すと長くなるんだけど……オレが蘭姉ちゃんより哀を好きになったっていうのは、本当だ」

「……………っ！」

目に涙を湛え、歩美が振り返ってその場から駆け出した。

「あ、歩美ちゃん！」

「歩美！」

光彦と元太も振り向き、歩美の後を追う。その場には、手をつないだままのコナンと哀が残される。

「やっぱり、吉田さんを傷付けてしまったわね……彼女は、私にとつて大事な友達だし、うまく仲直りしたいけど……」

「まあ、こればかりは、しょうがないな……でも、あいつらだってまだ小学2年生になったばかりなんだし、まだまだこれからだろというか、アイツら、オレの同じ時期に比べたらマセすぎだって」「あら。それは、あなたが少年探偵団を始めたせいでもあるんじゃないの？」

「まあ、そうかもしれないけど……」

コナンは下を向いた後、歩美達が走っていった先の道を見る。帝丹小学校の生徒と思われる女児が、2人に背を向け歩いていた。

「とにかく、今は元太と光彦がそばにいてくれるけど、オレからも歩美ちゃんを励ますよう、周りの奴らに頼まなくちゃならねえかな……」

「そうね。私も、吉田さんを励ますよう、小林先生辺りに話してみ
るわ」

「それがいいな。あと、仲直りできたら、おまえも、吉田さんって
いうんじゃないくて、歩美ちゃんって呼んでやれよ」

「……そうね。私を最初に名前で呼んでくれたのは、彼女なんだし
……」

2人が話していると、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。コ
ナンと哀は手を離して振り返り、音がする通りへ出ると、目暮警部
と高木刑事の乗ったパトカーが目の前を通り過ぎて行った。

「ったく、朝早くから事件かよ……」

パトカーが道を左に折れたところで、サイレンの音が止まった。

「そうみたいね。ホント、あなたの周りでは事件が絶えないわね……」

……

「ああ、まっただ」

言いながら、コナンの目線はパトカーの向かった先へ行っている。

「行くんでしょ？ 探偵さん」

哀がコナンを見て、言った。

「ああ。世界一の探偵になるため、江戸川コナンとして、ここが本
当のスタートだ」

「そうね……」

哀の視線は、しばらく学校と事件の方角を行き来していたが、や
がて。

「私も付き合うわ」

意を決したように言った。

「おいおい、学校はいいのかよ」

「あら。やる気満々の、今のあなたからそんなことを言われるなん
てね」

「フッ、それもそうだな」

一旦視線を落としてから、コナンは改めて哀を見る。

「じゃあ、今回も頼むぜ、相棒……いや。彼女、かな」

コナンの言葉に、哀は微笑みを返す。

「……バカね。私は、あなたの相棒で、同時に彼女でもあるのよ」

「……そうだな。それじゃ……」

一瞬間を置き、互いに目を見つめた後。

「行くぞ！ 哀！」

「了解！ コナン！」

2人は、今日も事件に向かって走り出した。

最終章：16年後

それから、16年と半年の歳月が流れた――

ある金曜日の夜、都内某所の居酒屋にて、帝丹小学校元1年B組の同窓会が行われていた。店の一角では、毬栗頭の大柄な男性と、そばかす顔の男性、肩の上で髪を切り揃えたセミロングの女性の3人が会話をしていた。

「あーあ。コナンも灰原も、今日は来てねえんだな……」

毬栗頭の小嶋元太が言うと、セミロングの吉田歩美がテーブルの上に身を乗り出して向かいの元太を見る。

「元太君。哀はもう、灰原じゃないでしょ。いつまでそう呼んでるのよ」

「あー、そうだったな。でもよお、アイツ、まだオレ達に名前で呼ばせてくれねえから、灰原って言うしかねえじゃねえか」

「うーん……それもそっか」

歩美が言いながら体を引くと、今度はそばかす顔の円谷光彦が口を開く。

「でも、お2人が忙しいのはわかりますが、今日来られなかったのは、やっぱり残念です」

同窓会では、コナンと哀の話で持ち切りだった。2人とよく行動を共にしていた元少年探偵団員である3人に話を聞きにくる者もいたが、皆が知っている以上のことは聞いていなかったため、結局いつものメンバーで話し合う恰好となっていた。

「しっかしよお……アイツら、小1の頃から年ごまかしてるとは思ってたけど、まさかあそこまで行くとはな……」

「うーん。でも、コナン君の推理力は最初からすごかったけど、哀も当時から医学書を読んでたみたいだし、実はすごかったのよね。あの2人なら、これぐらいはむしろ当然なのかも……」

「そうですね。お2人の友人として、少年探偵団をやっていたのは、僕達にとってかけがえのない宝物です」

光彦が言った後、元太はジョッキのビールを飲み干し、テーブルの上に置いた。

「コナンは……何だったわけ？ 細かいタイトルは忘れたけど、殺人事件が起きる前に止めるとかいう話だったよな」

「ええ。僕も、今ちよつと名前は出てきませんが、過去のデータを駆使して、事件が起きるのを事前に察知して防ぐという方法で、もう実践もされているそうですね。事件を解決するだけじゃなくて、事件そのものを防ごうだなんて、すごいですね……僕達より、常に一歩も二歩も先を見てますよ」

光彦は感心したように言う。歩美はグラスのピーチフィズを一口飲んだ後、口を開いた。

「哀は『解毒に関する遺伝子情報の発見』だったかしら？ 体の中に入った毒を、何種類であつても同時に解毒できる遺伝子情報を発見したとか」

「しかも、博士論文でなく、学部での研究ですからね。一体、どれほどすごいことなのか、僕達には見当も付きませんね」

「やっぱり、すごいよ……コナン君も、哀も……」

そこで、一旦3人の会話が途切れる。空いたジョッキを下げてもらい、追加のビールを注文した後、元太が思い出したように言う。

「そういえば歩美。おまえ、コナンのこと好きだったよな？ なのに、よく灰原と仲直りできたよな」

「え？ ああ……確かに、コナン君のことは好きだったし、正直言えば今でも好きかな……でも、哀は、大事な友達だもん。コナン君を取っちゃったからって、急に嫌いになったり、よそよしくなったりするなんて、わたしにはできなかったよ」

「そうですね。むしろ灰原さんの方が、今でも歩美ちゃんに気を遣っていると思いますけど……」

「もう気にしなくていいって言ったのに、そうなのよね……ま、そ

こが哀の優しさというか、良さでもあると思うけど……」

歩美は、グラスの中身を再度口を含む。

「でも、今になって考えてみると、やっぱりコナン君には哀がお似合いだったのかな……」

その言葉の意味することを測りかね、元太と光彦は首を傾げる。歩美が続ける。

「あの2人って、お互いがお互いを理解して必要としていたっていうか、高い次元で助け合っていたっていうか……コナン君のことは好きだったけど、哀には、とても敵わないって、思うもん……」

「何言ってるんですか。歩美ちゃんには、灰原さんとは違った魅力があるじゃないですか」

「そうだぞ。今、叶わなかったコナンへの気持ちを思い出してどうすんだよ。まだまだこれからだろ？」

「……それもそうね。早く、他のいい人探さないと……」

そこまで言うのと、歩美は両手を自分の横の床の上に置き、天井を見上げた。

「あーあ、でも正直、哀が羨ましいな……コナン君とずっと一緒だなんて……わたしの旦那になる人は、どんな人なのかしら……」

再度、3人が沈黙した。光彦はグラスのワインを飲み、歩美もピーチフィズを飲み干した。元太の追加したビールが届き、歩美と光彦も注文を追加する。店員が去ってから、歩美が口を開く。

「2人とも、今頃あちこちから取材されてるのかな……」

「ええ、そうでしょうね。多分、12月の授賞式まで、予定がギッシリになってしまうと思います」

「でもよー。年末になったら、またいつもみたいに忘年会できるんじゃないねえのか？」

「うーん。そこまではわからないですけど、授賞式が終わって帰国したら、少しは余裕が出てくるかもしれせん」

「じゃあ、2人が帰国したら、また少年探偵団のみんなが集まらない？」

「賛成！ きつと、2人とも喜びますよ」

「いつだったわけ？ 前に5人で集まったのは」

「多分、結婚式以来だと思う。でもあの時は、他にも大勢の人がいたけどね……」

歩美が言った後、光彦は記憶を辿る。

「確か、5月の連休でしたよね。本当は、もっと早くに結婚を決めてたのですが、いろいろあってその日まで式を延ばしたんだとか」「やっぱよー、大学卒業してすぐ結婚ってのは忙しかったのかな」「それだけじゃないみたいよ。確か、コナン君にとってもそうだけど、蘭お姉さんにとっても、特別な日だったって言ってたよ。何の日なのかは、教えてくれなかったけど……でも、コナン君と哀の結婚式だったのに、蘭お姉さんに気を遣うなんて、コナン君は本当に蘭お姉さんが好きだったのね」

元太はビールを口に運ぶ。光彦と歩美の飲み物が届き、元太はジョッキを置く。

「そつえばあの姉ちゃん、今アメリカだったわけな」

「うん。旦那さんの仕事で、今はニューヨークだって」

「でも、蘭さんが新一さん以外の人と結婚したなんて、その時は驚きましたよね」

「そつね。わたし、蘭お姉さんに聞いたんだけど、新一お兄さんは他の人を好きになって、遠くに行っちゃったんだって。でも、今でも新一お兄さんのことは好きだし、新一お兄さんも蘭お姉さんのことを気にかけてるって言ってた」

歩美は、追加したカルーアミルクを飲む。

「でも、遠くに行っちゃったって……何だか、コナン君と哀みたいだな……」

「何言ってるんだよ。今だって、アイツらとはしょっちゅう会ってるじゃねえか」

「うつん、そういう意味じゃなくて……何ていうか、わたし達とはずっと友達だし、2人ともそう思ってくれてるんだろわけ……わ

たし達とは、住む世界が違うのかなあつて……」

少し沈黙した後、再び歩美は口を開いた。

「でも、やっぱりコナン君も、哀も、わたしにとっては、これ以上ない友達だよ」

「おいおい、オレ達は友達じゃねえのかよ？」

「あ、もちろん、元太君も光彦君も、大切なお友達ね」

「ええ、もちろんです」

「当たり前だろ。たくよ……」

言った後、元太はため息をつく。そして、ジョッキに半分ほど残っていたビールを、一気に煽った。

（しかし、いつになっても、歩美とは友達以上にはなれねえのか……）

同じ頃、ニューヨークにて。とある高層マンションの一室で、1人の日本人の女性がエプロンを身に付けて食卓を片付け、1人の男性がそばのソファの上で日本語の新聞を読んでいた。

「蘭さん。ちょっとこれ、見てください」

ワイシャツにネクタイ姿で、眼鏡をかけた男性——本堂瑛祐が、妻である蘭に声をかけ、新聞の一面記事を指差す。

「どうかしたの、あなた？」

蘭は作業を中断してソファに近付き、瑛祐から新聞を受け取って目を通す。

「あ……」

蘭は立ったまま、しばらくの間言葉もなくそこに並ぶ文字を見つめていた。

「やっぱり……江戸川さん、さすがですね……」

瑛祐が感心したように言うと、蘭は視線を新聞から瑛祐に移した。

「本当ね……あなたも、少しは見習ったら？」

その言葉に、瑛祐はソファに座ったまま、蘭を見上げる。

「またその話ですか……僕だって、高校の頃に比べたら、見違える

ぐらい立派になったでしょう?」

「ええ、そうね……でも、新一との差は縮まるどころか、広がっていくばかりじゃない?」

「うーん……確かに、ほとんどの部分で負けてる気はしますが……でも、蘭さんへの想いは、今なら勝ってるんじゃないかな?」

「……そうね。それなら、今は新一に勝ってるか……」

蘭が少し目を伏せたのを見て、瑛祐は立ち上がり、蘭を正面から見た。

「蘭さん……キス、していいですか?」

「……だーめ。新一のこと、思い出しちゃったから」

「え……そ、そんな……! しまったー、余計なこと言っただけじゃなかった……」

瑛祐が慌てた顔をするのを見て、蘭は後ろを向いた。

(ふふっ。ホント、こういうところ変わってないわね、この人は……)

蘭は新聞をテーブルの上に置き、再度瑛祐を振り返る。

「なーんて、冗談よ。もう、すぐ引かかるんだから」

「え……あ、そ、そうですか。良かった……」

言いながら、瑛祐は蘭に近付いて見つめ直し、両手を肩の上に置いた。2人の顔が接近する。瑛祐は少し顔を下げ、蘭は首をもたげる。やがて、2人の唇が触れる。そのままの姿勢でしばらく静止した後、体を離れた。

「よし! 今日も、元気が出てきたぞ!」

「何よ、もう」

蘭は内心呆れつつも、微笑みを返す。スーツの上着を身に付け、瑛祐は食卓を通り過ぎて玄関へ向かった。蘭もそれに続く。

「それじゃあ、行ってきます、蘭さん」

「はい、行ってらっしゃい、あなた」

瑛祐の見送りが済んだ後、蘭はリビングに戻り、もう一度食卓の上に置いた新聞を手を取った。

（新一、哀ちゃん…… 本当に、あの日言っただ通りに生きていつていのね…… 2人とも、これからも頑張つて）

しばらくの間、物思いにふけていた蘭だったが、壁に掛けられた時計を見て、あることを思い出し、新聞をテーブルの上に置く。そして、マンション内の一室のドアへ向かつて行つた。

「瑛——！ 早く起きなさい！ 遅刻するわよー！」

ドアを開け、ベッドの上で眠る息子の体を揺すり、起こそうとしたが、今日もなかなか目を覚ましそうになかった。

（もう…… 一度寝たら起きないなんて、誰に似たんだか……）

蘭がテーブルに置いた新聞が、床に落ちた。一面が上になっている。そこにトップで書かれていた記事は。

『日本人夫婦にノーベル賞——江戸川コナン・哀夫妻、平和賞と生理学・医学賞——最年少記録、夫婦同時で個別受賞は史上初』

最終章：16年後（後書き）

これで完結です。読んで下さった皆様、ありがとうございました。元々話は作っており、投稿時に加筆修正を行っていたのですが、何はともあれ最後まで発表することができてほっとしております。

「もつと長く読みたかった」「展開が急だった」「正直間延びした」、いろいろ感じる方がいると思いますが、後学のため、感想やコメントをいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7461s/>

世界で一番

2011年8月22日03時34分発行